川柳核



No. 7 2 0

加 盟

日川協

五月号

麻生路郎二十三回忌 麻生葭乃七回忌 中島生々庵一周忌

追悼川柳大会

日 時 昭和62年7月5日(日)

会 場 高野山 普賢院 TEL 07365 (6) 2131

高野山駅前からバス(大門行又は奥の院前行) 「千手院橋」下車すぐ

- ◆法 要 (法要に参加される方は前日からお泊り下さい)
- ◆川柳大会

お 話 金剛峯寺第四百六世座主 森 寛 紹 師 山内静水選 兼 題 「水 草」 高 橋 操 子 選 福寿草 「金 魚」 野 村 太茂津 選 小松原 爽 介選 一 是 大 空 去来川 巨 城 選 礒 野 いさむ 選 書斎 西尾 栞選 一. | | 译字 | 各題2句 締切1時(投句拝辞)

会 費 3,000円

- □前日観光 (奥の院・大門など) 4日午後1時高野山駅前集合
- □宿泊 普賢院 7,000円 (川柳塔社宛ハガキで予約して下さい)
- ◎大会出席並びに宿泊を希望される方は5月末日までに川柳塔社 宛お申し込み下さい
- ○会場までの所要時間は南海電鉄ナンバ駅から約2時間です

主催 川 柳 塔 社

爱染賞

西尾

栞

書をもち出された。 書をもち出された。 一葉の葉

ためには、そのような経緯も亦あってもためには、そのような経緯も亦あっても発想だなァと笑い合ったが川柳を広める発想だなァと笑い合ったが川柳を広めるないのだということが書かれなら投句しないのだということが書かれなら投句しないのだということが書かれなら投句しないのだということが書かれない。それを聞いて、新人類らしいでは、

柳ではあるが、人には功名心というものがあり、論功行賞こそ、ものを育てる要項の一つである。大いにやるべきだと主張する者もあったが、路郎賞、川柳塔賞、岳地柳壇賞と、余りにも賞が多すぎはしないだろうかという説もあった。
一人でも余計投句者があり、それはそれなりに励みのあるようにしてはどうかその賞については路郎賞、川柳塔賞のように合議制にせず、選者一人で決める賞であって、準優秀賞のようなものを排して、この一句こそという選者独自のユニークな賞にしては等と議論百出したが祥しくは考えるべしということでその決定しくは考えるべしということでその決定しくは考えるべしということでその決定しくは考えるべしということでその決定

廻された。そして次の常任理事会に

もし賛成者が多かった場合は愛染賞に、

ふり返ってみてみると、趣味で作る川よいのではないかという意見も出された。

とだと思っている。とだと思っている。

私の考えでは、その賞は通常の楯やトもので、何処へでもつけて行けるようなもので、何処へでもつけて行けるようなものでしてはと考えている。何れにしても、賞が出来るとなれば、石ニークなものにして、その帖、その花ユニークなものにして、その帖、その花れの考えでは、その賞は通常の楯やトンジされるようなものにしたいと考えてンジされるようなものにしたいと考えて



川柳塔 五 月号 目 次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

季右 鏡貨	岁月至了一同人吟 高	水煙抄 黒	■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十丁)	■川柳太平記(108) 川柳の群像 岡田 甫 東	自選集	川柳塔(同人吟) 西	五月号に因む エ	愛染賞 西
井知	橋	川紫		野		尾	藤	尾
智水	操	糸香		大		栞	甲	
庵	子	選		八		選	吉	栞
:	:	:		:	:	: 4	: 2	: <u>1</u>
59								

愛染帖

橘

高薫風

選 :: (56

五月号に因む

工藤甲吉

長い長い雪のトンネルを抜けて、去年はテレビドラマ「いのち」の舞台にされた津軽にもようやく春がやって来た。本号の出る頃はもようやく春がやって来た。本号の出る頃はりんごの花が一斉に咲き乱れ、まさに春爛漫りんごの花が一斉に咲き乱れ、まさに春爛漫りんごの花が一斉に咲き乱れ、まさに春爛漫りんごの花が一斉に咲き乱れ、まさに春爛漫りんごの花が一斉に咲き乱れ、ま年はテーレビドラマ「いっち」というな毎日であった。

精神的にも肉体的にも参った。 して雪との闘い。七十三歳の老骨はさすがに 身内に二人の病人(どちらも入院手術)。そ

消沈は許さん」と叱咤された。 がたら東野大八先生からは「落ち込まないでいたら東野大八先生からは「落ち込まないでいたら東野大八先生からは「落ち込まないでいた。

さて私は大木笛我さん(故人・東京・雀郎してこの稿を書く気も起きたのであった。とけては、すべてがお仕舞いと気づいた。そじけては、すべてがお仕舞いと気づいた。それがない」という言葉も思い出し、ここでく飛ばない」という言葉も思い出し、ここでく飛ばない」という言葉も思い出し、ここでくれの調子にもよる。天候が悪ければ飛行機も

「いしいり	青空にチョーク一本あればいい	吐布	**\\	■5月各地句会案内 89 ■編集後記	各地柳壇(佳句地10選/二宗吟平)	本社四月句会	柳界展望	「鯛」	一路集「走 る」	「 胸 」	初歩教室	紫香・太茂津・十郎・武雄・雀踊子・薫風	大相撲春場所観戦記	〈女性コーナー〉 茴香の花
1	西	_	1	91		i	i	高	河	舟	[A]			小
1	П	薫						須智	井	木片	萬			
6	いわゑ	風	A		i			高須賀金太選	河井庸佑	舟木与根一	萬			出智子選
Vi .	為		*					太選	選	選	的		i	计课
			*		i			:	:	:	:			:
K			1		$\widehat{76}$	$\widehat{72}$	$\widehat{70}$	<u>69</u>	<u>68</u>	68	<u>66</u>		62	60
1	No. of Lot, House, etc., in such such such such such such such such													

の季節をなんとか私も元気を取り戻すべく努の季節をなんとか私も元気を取り戻すべく努い上、紙数の関係でエッセイにならないエリカには生々庵先生の「俺は医者だそうしてり方には生々庵先生の「俺は医者だそうしてり方には生々庵先生の「俺は医者だそうしてり方には生々庵先生の「俺は医者だそうしてり方には生々庵先生の「俺は医者だそうしてり方には生々庵先生の「俺は医者だそうしてり方には生々を先生の「俺は医者だそうしてり方には生々を先生の「俺は医者だそうしている。」と、紙数の関係でエッセイにならないエリ上、紙数の関係でエッセイにならない。

めるつもりである。



几

尾

選

原 市 佐 藤 藤

子

松

受話 手し とぼけ 園 族にしらない 動 円 0 器 まる たひひ 木子ども の向うで が上手になっ とに 10 ポ は多 スト 足 顔 強 もと掬 もある法事 13 V 0) 味 た指 懐古、 ほう 方の声がする われれ が 主 Vì 義 3 60

お

遊

名刺交換法事

0

席

の美辞

句

親

父がすぐに取

りかえす

財

布 が

すぐに色即是空

帯に来て肥える

士: 居

岡

Ш 県

引 ゴ 年 香

0

越

L

0)

荷 男世 は

神

様を縛り付け

る

キブリ 金の 一質は

屁

ひり

虫

お前を誰も笑わない で火災保険をかけてい

さない

耕

花

外

n

中

L

いこともあり

後編 夫婦 あて

b

L 0 引っ にうれ

0

思

1

通り

書

とや は

ぱり合いも

して

先見えて

から た 足 0

マンネリを抜

けら

n

82

強

味 方

てくれる

女冥利の ビタミン剤

U

とつ

季節

の服 でい

派を着

る

弱っ サー たと子に見 力 ス 0 象 0 6 悲 n たくない V 目 と出

并

市 岩

本

雀

踊

7

学歴 猫に芸を教えて妻 を持たぬ が自慢出来る父 が軽く病む

が我が家に冬の蠅

か

ではない

大阪市 西

出

楓

楽

おとんぼがけなげな事を言うてくれ 腰 逢 0 3 骨

4

助手席で欠伸がつづきざまに出る 本衛門というカルテの人と順を待ち れいポストを見ると出したくなる手紙 れいポストを見ると出したくなる手紙 を見ると出したくなる手紙 さいかい かんしゅう はいかい はんりん しゅう はいかい はんりん しゅう はいかい はんりん はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん	井とうな重と有り八重 いが、ボリュームさ いが、ボリュームさ の過信が、築く砂の城 した笑いを寄席に吐き した笑いを寄席に吐き	だも大 司何聞	変地異 碁盤はた人は背後 死神は
東りがいある看護婦の太い尻 以前市 波多野 五楽庵 関ビはいれば赤字が消えるなら はいます 大往生とはいえぬお棺の釘を打ち 大往生とはいえぬお棺の釘を打ち 大道の空気を乗せて赤字線 しいと思う通勤車	生を終るか一兎追いので、会い嬉し別れ哀しい風ぐれがら雪へ単身赴任されるが要がある。	えりは芯嘘ど	がに背き乗り越し切符買う たくしを貫きとおす笛を吹く

冬眠の 父逝く 逢うまでの楽しみ距離をおいて待つ 方角 雪だるま春 次郎にて候 叩 交替で看る約束を淋しが 汚れ染まるな一 世 盃 咲けば散る諸行無情の 絵ごころがすこしあ 大きめな賽銭箱 腹立てて涙嬉しくても 庭 明 死んでやるも H を重 えた日 0 0 いたら迷いの覚め 0 レンダーに空白はなし春の 10 ないことが寂し 一履く のよい 花茶筅は多く語らない 出 中 や五 癖 ・を賢 ねて が残ってい 0 風を買 血 春 縄 れる桜 く渡る丸 の雫となりうせる 定まらぬ 七 0 かい 0 0) か保険 n 歳半の輝きよ 話 から H コメカミを走るとき h V 0) など 13 る背中 で溺れ 雨 まま る古時計 りますピカソ展 つの K 10 10 酒にする 春 ・蛙の子 P 0 耳 0) H Ĕ. 哀 ま < n 好きな妻 てる に に + 地図 島 倉 尾 根 市 市 県 宮 堀 1 野 西 江 弥 克 IE. 生 朗 枝 幸せ 追伸の 手 亡父亡母とお話出 しあ ナアナアで治まる程の喧嘩です したいことまだ手につかぬ戻り あと少し残りの旅を大切に 土を出てケースに入る出土 塔の下も善 ため息をふっともらした昼下り 欲のない顔し 窓際でひとつおぼえの鶴を折 日 ひら仮名も 梨捥いでもい 六月の水滔 つつじ咲く 曜日私 漉き和紙だいじな人に便り書く くて冬十一月の大根干 0 b 0 中 甘え見ている花 自 舌をころげて子にもどす せ がスルリ逃げてゆく二月 B 由 て 、打吹山 人 男 おんなも温いも 勝 家事を休みます 々と梅雨に入る 善 てコーヒーうまそうに 妻 ち負けな で九月のまろやか 女とはい 走 |来る墓| 1) にのぼろうか 出 切手 13 か 夫婦 掃 ず 0 和歌山 富田 を持 鳥取 寒 林 ち 県 市 市 市 福 回 JII 藤 内 本 田 临 月 秋 英 泰

女

子

子

子

J.	切株に森の交響楽がある	を生きすぎたなと思う春陽差し ちと生きすぎたなと思う春陽差し 流し雛の行方は問わぬ浅春や 米子市 父と娘の影たおやかに月のぼる 米子市	新章もない私は在位七十年 告白はラストダンスのその時に 四月馬鹿わたしは五月も馬鹿でよい 四月馬鹿わたしは五月も馬鹿でよい 対は花子と言ったお下げ髪	ない はい はおもだから 金魚掬いはおも
3	玉	林	越	
Ī	置		村	
<u> </u>	重	瑞	枯	
)	人	枝	梢	
腐屋が休んで朝を線結んで愛をと線結んで愛を	戦友が来てくれ記憶よみがえり投函をしてから不安になる手紙円高を知らぬ少女の小銭入れ円高を知らぬ少女の小銭入れ	指切りの相手が妻である安堵古里に背伸びのいらぬ温い風古里に背伸びのいらぬ温い風情で和で終えた父にも父の自負嫁の名を呼んで呆けてる病んでいる。	人の世や自分のメカネで見てしまうとは言うてみたけどやっぱり金が要りとは言うてみたけどやっぱり金が要りとは言うてみたけどやっぱり金が要りまがまた聞かされている苦労なえ話聞いて来ました市場篭ええ話聞いて来ました市場篭	部屋のみんな老人保険証
小	楠		辻	中
谷	原)1[
仙	秀		文	滋

新散約本芸時	差 団 お 寝 遍 造 し 仮 こ	ま 好 男 春 春 本 四 死 春
聞弾をも忘れるない。	国民 は 国民 は 国民 は 国民 は しのびの は しのがのがの は しのがのがのがのがのがのがのがのがのがのがのがのがのがのがのがのがのがのがのが	ま意盛らの 音季ぬめ
ん率りれ猿けでが花ただ熊	い地の人を動った たれて かゆって を 数されて まされて まされて ままされて ままさん こうしゅう こうしゅう こうしゅう こうしゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう	では誰も養 が出る動植物 が調子 がまん空巣 んまん空巣 んまん空巣
いるくい遅八や民花靴刻に	かっくり交 かっくり 変表 はたい かっくり 変表 はたい かっくり 変表 しんたい かんしん かんしん かんしん かん	を畑に置き忘れりの答を出して置 対もついてゆく 賛成してくれぬ 子はずれであろう 子はずれであろう 子はずれであろう
すくする ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	す理た無受僕 けれ酒人車いけの など	1で話しで くて出き出来なひあ れゆし忘
る利唐津市	土 故 屋屋にて	出 など して置く して置く たろうとも あろうとも からがりぬ おろうとも からがりぬ からがら からがら からがら からがら からがら からがら からがら からが
仁	春	春
部	城	城
рц	武庫	年
郎	坊	代
存在意識強くて妻を叱れない 夫婦茶碗ふせた位置から冬になる 夫婦茶碗ふせた位置から冬になる 春闌の父はくらしの貌で立つ 鳥取 石ひとつ立て風狂の門とする 柚子すだち君も平家の末裔か	は / でき / の 後 対 戸屋 たま / でき / の 後 対 戸屋 たま だ を 観 に 来 て 賽銭 け ちっと 若 作 り 近 所 の 二 号 さ ん を 真 だ か ら か と い た だ ま な ら を し て か ら 胸 の つ さ よ な ら を し て か ら 胸 の つ さ よ な ら を し て か ら 胸 の つ さ は な ら を し て か ら 胸 の つ は 我 の 妄想 だ ろ う か 四 分 休 コ ロ ン ボ の 無 表 情 に 吸 い こ コ ロ ン ボ の 無 表 情 に 吸 い こ コ ロ ン ボ の 無 表 情 に 吸 い こ コ ロ ン ボ の 無 表 情 に 吸 い こ コ ロ ン ボ の 無 表 情 に 吸 い こ は 光 の コ ー ス に 入 る 直 指 庵	とようにの明社長の節 で家での小唄社長の節 が家での小唄社長の節 が家での小唄社長の節 が家での小唄社長の節
を見ている。	指権 のつかえ まれ いこまれ にこまれ とばこう	ごや をし廻梯解 受てし子り唐
を見ていますを見ています		ごや を し 廻 梯 解 り と で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と い か と し で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と い か と し で と い か と し で と い か と し で と い か と い と い
を 見ています を 見ています を 見ています	ま符寝屋が似こくた	ごや 大阪 伊
ます。県	ま 符 寝屋 川市 ホース は ま で で で で で で で で で で で で で で で で で で	が 大阪市 を受けりず
ますり	ま 符 寝 屋 川市 稲	一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一次一

音無しの構え無職の庭いじり音無しの構え無職の庭いじり音無しの構え無職の庭いじり音無しの構え無職の庭いじり下関市クラス会お開き乾杯雑魚ばかり下関市クラス会お開き乾杯雑魚ばかり	軽いおとこのなんと明るい口笛だ を難が育つと桜ほころびる 情けばなしは金に無縁と思うべし 一位突の煙寓居に昼の風呂 での飛ぶはなしスルメを裂きながら で原本 が原市	にわとりになって回転寿司の前 その日から気まずくなった御忠告 なぐさめの言葉にかえて酒をつぐ 大和高田市 能率は考えず母の動きづめ 分れ道坂の多い方だった 長電話幼稚園がもう帰り 次男坊補欠のように育てられ 来ってみてなる程なあと赤字線 乗ってみてなる程なあと赤字線
石	小	久 岸
Ш	島	家本
侃 流 洞	南幸	代 仕 男 次
耐えぬいた痛みで回る風車 大間を磨く気持で句をひねり 大間を磨く気持で句をひねり 大間を磨く気持で句をひねり	い目のカレーでピンチ乗り切ろう 知言える幸せあとで思いしり 国会再々空転 国をとっては野党すぐ怠け 国会再々空転	亭主元気でゲートボールに凝ってます に援団くたびれている負けている に援団くたびれている負けている を表こ日周期の晴と雨と パン焼けて妻に春眠起こされる 早や彼岸四月下旬のぬくい日も 現り物あさる野良猫孕んでる 朝早い電話にろくな事が無い 東京都 東京都
奥	嘉	増富
谷	数	田 口
弘	兆	次 笛
朗	代賀	章 生

NTT騰って妻と飲みに出る	ひとり歩きをすると傷つく裏話	エイズには無縁と妻にみくびられ	美祢市	総入歯かんで含めるように言い	気紛れは女心と言い切れず	退職へ他人行儀の社屋なり	待ちぼうけ鍋をかけたりおろしたり	足並を婦唱夫随へ変えてみる	笠岡市 松	余生にも夢の脹らむ気忙しさ	色情も思慕と申せばお上品	自惚れがあるから女に近寄れる	二日酔い妻の突慳貪に耐え	会費だけ食べて来ますとパフたたく	倉敷市 稲	産れるも死ぬも自分で決められず	人間の方がこわいと鬼が言う	春の風邪単身赴任の身を案じ	父親は仕事の鬼で泣き虫で	梅桜春に悲しい過去がある	藤井寺市 吉	13	子は呼ばず二人で母ちゃんお父ちゃん	夢のある内が花だと言ってやり
			安平																					
			次						本						田						岡			
			弘						忠						豊						美			
			道						Ξ						作						房			
背番号言いたいことがまだ言えず	葉桜の中老いらくの恋もよし	売上税エイズNTT総スカン	オルゴールスイスの街と童心と		腹巻きが一万円の束を出す	通用門を	風呂敷の重さを母の手にあわす	病名がわかって鶴を折りはじめ	大阪の旅から舌の愚痴が増え	西条市	入院の友ふと思う二月尽	梅の花君手折らじな酒酌まん	さすが師匠猫背の伸びる舞姿	だしにくる	十万円の金貨に利息ついてない	綾瀬市	割勘は得したけれど二日酔	言い勝ったつけが回って来た辞令	ふところ手おとこ余裕を覗かせる	公害の空気は知らぬ山椒の実	秀才の気まま友人ひとり減り	高槻市	実弾が来ないほんとの浮動票	仮面から邪心が覗く美辞麗句
				汉						片	5					大	8					辻		
				原	į					上						Щ						白		
				静	ł					明						٢						2 渓		

金

子

水

步

ワープロの罪本名で来た三種	路線廃止土竜が狙う国	均等法妻の小言が多り	学校が休みになると長	円満な夫婦エイズは三		頂上を目ざす失敗なら許	それも愛教育論が嚙っ	趣味持って春には春の	を焼いて図太く	えると靴が		孤児たちのマーマの主	極楽への道に矢印つけ		まで売って終っ	2 8	まで売って終っ優もNTT株も典エイズの文字	根まで売って終っル優もNTT株も辞典エイズの文字	根まで売って終っル優もNTT株も辞典エイズの文字	根まで売って終っからの電話温もりからの電話温もり	根まで売って終っからの電話温もりからの電話温もりからの電話温もりからの電話温もりからの電話温もりがらの電話温もりがらの電話温もりがらの電話温もりがらればいる。	根まで売って終ったので売って終ったの電話温もりからの電話温もりからの電話温もりからの電話温もりがらの電話温もりがらの電話温もりがらの電話温もりがらの電話温もりがらの電話温もりがらのである。	根まで売って終っれて表って終ったで売って終ったた寝平和で売って終ったのででであることである。	根まで売って終っれて表って終ったた寝平和というでは、これである。
来た三種	国有地	が多くなり	長電話	川向う	松江市	ら許す	み合わぬ	の風の彩	、なる男	軽くなる	竹原市	声に谺なく		けてない	けてな	けてないた影法師	けてない た影法師 た影法師	けてない 無縁なり 鳥取県	けてない ま無く切れる 鳥取県 が加えられ 鳥取県	けてない (けてない た影法師 た影法師 に影法師	けてない けてない けてない けてない けてない けてない	けてない 世で散り も無く切れる 鳥取県 が加えられ 鳥取県	けた 無縁なり も無く切れる も無く切れる 鳥取県 が加えられ 鳥取県	けてない けてない けてない けてない けてない けてない けてない けてない けてない は に 影法師 れる 鳥取県 に 影法師
					恒						森							林	林	林	林	林	林	513
					松						井							20.00	60.2	60.20	55.20	0.00	000	岡
					叮						菁							路	路路	路	露	路	是在 是在	露洛
					紅						居							杖	杖	杖	杖	杖	杖	杖
恋をする羅漢へやさしい春の風	参禅門くぐると羅漢の笑い声	石峰寺五百羅漢 (二句)	蠟燭の炎が仁王の顔に見え	オシッコの近いのが補助席に居る	ちゃっかりと連名で絵馬へ願い事	京都市	群雀の声にたじろぐ風見鶏	丸嚙りする歯みがきのコマーシャル	溜めているらしい付き合い悪くなり	このふたり不倫と思うコーヒー皿	呵責から逃がれるケーキ買うてくる	和歌山市	1	趣味はまだベレー帽までとどかない	味はまだベレー帽までとどかならしいのもまだ居る均等法	はまだベレー帽までとどかなしいのもまだ居る均等法の庭もゆっくり春になる	味はまだベレー帽までとどかならしいのもまだ居る均等法寺の庭もゆっくり春になる教は自由で人間不自由で	はまだベレー帽までとどかなしいのもまだ居る均等法の庭もゆっくり春になるの庭もゆっくり春になるは自由で人間不自由で	はまだベレー帽までとどかないしいのもまだ居る均等法の庭もゆっくり春になるは自由で人間不自由では自由で人間不自由で	はまだベレー帽までとどかない は自由で人間不自由で は自由で人間不自由で は自由で人間不自由で	はまだベレー帽までとどかない は自由で人間不自由で は自由で人間不自由で は自由で人間不自由で はのもまだ居る均等法 といのもまだ居る均等法	はまだベレー帽までとどかないはまだベレー帽までとどかないはまだ居る均等法は自由で人間不自由では自由で人間不自由では自由で人間不自由であれた事也まに頼ってしまった不幸也まに頼ってしまった不幸也ならかでしまった。	はまだベレー帽までとどかないはまだベレー帽までとどかないはまだべんの他に誰もこずな自由で人間不自由では自由で人間不自由では自由で人間不自由でしまった不幸也は自由で人間不自由である。	はまだベレー帽までとどかないはまだベレー帽までとどかないはまだべレー帽までとどかないはまだベレー帽までとどかないはまだベレー帽までとどかないはまだベレー帽までとどかないはまだベレー帽までとどかないなまだだいしょうないのもまだ居る均等法
						松						堀												
						Щ						端							木	木	木	木	木	木
						杜						三							与 根	与相	与相	与	与	与
						的						男							111	110	118	118	118	118

和歌山市	終列車の切符は妻と相席で	泥舟と知っているのは船頭だけ	暖簾からのっぺらぼうの男たち	結び目があるからもめている夫婦	挫折してからの男とウマが合う	和歌山市	抱きしめて砦になってくれた人	瞳の届く視野で手綱はゆるい目に	ひたすらに恋うて女の子守唄	ダイヤルの手前で本音まろく棲み	思い出を結びなおして女かな	和歌山市	しい顔も見舞って死を悟る	せっかちとゆっくりコンビで五十年	四面楚歌思い出だけが温かい	喜怒哀楽叱ってくれる母がいる	入学式母だなあ春だなあ	和歌山市	桜満開政治は凍りついたまま	春風も四角四面のビル谷間	春は春の歩幅悟っている齢	春なれや霊柩車にも花吹雪	春うらら人を疑うのも忘れ	和歌山市
神						牛						松						内						若
平						尾						原						芝						宮
狂						緑						寿						登志代						武
虎						良						子						代						雄
終																								
点のひとつ手前で見る祭り	米子市	水甕へ自責点だけよく溜り	方円の器へ善玉だけ入れる	驚きが羨望NTTの株	ジキルからハイド驚く手の早さ	風船がしぼむと思案する平和	米子市 小	高いびき明日へ見通しつけてある	内裏様パジャマを着たい日もあろう	面倒見よくて誤解がつきまとう	人ごみで軽い眩暈にあう噂	点検の妻が出て来て発車する	和歌山県	空の財布に内需拡大せよと説き	美しいナースと出会う不整脈	花とワイン揃えて恋がみつからぬ	白を着るしゃれたピアスに舞う桜	春を呼ぶ役目を担う風の自負	和歌山市	浜に来て僕には捨てるものが無い	雨上がり恋泥棒の靴の跡	船は大きく揺れて自分をとり戻す	咄す程春は小さくなってゆく	美しい夜にしたくて船を出す
点の		甕へ自責点だけよく溜り	の器へ善玉だけ入れ	きが羨望NTTの	キルからハイド驚く手の早	船がしぼむと思案する平	小	いびき明日へ見通し	裏様パジャマを着たい	倒見よくて誤解が	ごみで軽い眩暈にあう	の妻が出て来て発車す	歌山県 寺	の財布に内需拡大せよと説	美しいナースと出会う不整脈	とワイン揃えて恋がみつから	白を着るしゃれたピアスに舞う桜	を呼ぶ役目を担う風の自	和歌山	に来て僕には捨てるものが無い	上がり恋泥棒の靴の	は大きく揺れて自分をとり戻	す程春は小さくなってゆ	しい夜にしたくて船を出
点の	米子市	甕へ自責点だけよく 溜り	の器へ善玉だけ入れ	きが羨望NTTの	キルからハイド驚く手の早	船がしぼむと思案する平		いびき明日へ見通し	裏様パジャマを着たい	倒見よくて誤解が	ごみで軽い眩暈にあう	の妻が出て来て発車す	歌山県	の財布に内需拡大せよと説	美しいナースと出会う不整脈	とワイン揃えて恋がみつから	白を着るしゃれたピアスに舞う桜	を呼ぶ役目を担う風の自	和歌山市 福	に来て僕には捨てるものが無い	上がり恋泥棒の靴の	は大きく揺れて自分をとり戻	す程春は小さくなってゆ	しい夜にしたくて船を出

	米子市	ふきのとうお皿の上の小さい春	孫たちが春の風船ふくらます	だめだとは言わずにおこう春だから	ゆずるたびに椅子が不協和音を出す	切羽つまって思わぬ方にかけ出した	米子市	かたくなで許すチャンスを皆にがす	海なりが止んで小さな春を連れ	万歩計遠いところがお好きです	風まかせ種は見知らぬ町にすむ	縄電車中の一人がけつまずく	米子市	これからは女の色で染める椅子	菊の花見事に欺す百燭光	もう春をキャベツ畑は主張する	一回り細った肩の黒羽織	凋んだら負けとひまわり知っている	米子市	同心円おなじ波紋に身をゆだね	ポリ容器想いあぐねた日を溜める	珈琲のわかってくれる友が来た	柏手の澄んだ響きに得心す
	菅						青						田						石				
	井						戸						中						垣				
	とも子						田						亜						花				
	子						鶴						弥						子				
馬鹿馬鹿しい苦労ばなしは捨てておく振り向けば見送る亡母がふとよぎる	一言がやぶれつくろう糸になり	米子市	帰省子を送りたくない雨の駅	おでんコトコト馬鹿正直は茹玉子	湖の詩をきかせるしじみ汁	先輩とおなじ帽子が似合わない	うっかりと嚙んだ飴から鬼が出る	米子市	何気なく落としてしまった花言葉	かすかに風が動いた別れのソナタ	角砂糖昨日はきれいにとけたのに	コーヒーのうまい画廊で待つ秘密	年下の男に二科展誘われる	米子市	みんな許して菩提寺の大銀杏	其の日にはほとけの茶碗磨きます	残されても茶碗二つを買いました	夫婦茶碗の一つが割れて夏が逝く	袂の中に針一本が迷い込む	米子市	赤電話探して旅の終り告げ	コーヒーの中の話題が歩き出す	しゃべりすぎて疎まれだした籠目の輪
		沢						寺						政						野			
		田						沢						岡						坂			
		千						みど里						日枝子						な			
		春						H						7						4			

五月海 生きて 花 亡父の手の艶を茶筅も噂 水盲 緑 美 黄 古 五月かな松ぼっくりも恋をする 花 il 泣き黒子除 愛 段 丁花 よりも葉桜 0 女の汗バレー 金 か 病 0 落 82 1 から命を接木し 傷 日の行にも似たり老い L るむここから先は春 0 も 0 乱 む友 糸 を打 下だから素顔喋りだす 妻を泣 しきし 0 n 矢ならすらりと受けようか 触れられそうで席をはず 七つボタンの学徒 42 ほぐし いるから退屈せぬこの世 れをたっ 香 3 って心を軽 に乗っ ぐさ女の 時 の言 0 には馬 て巻 が好き娘 て女を忘 かせにくる ボー た一人の娘がなじる 葉探さねば てくる小さい春 てもらう V 鹿 瞳 て五 くす ルの床が吸う の芽生 E れない 0 して たり 底 なりなが 十年 る のうた 桜 0 K H 之 17 島 島 島根県 島 す 根 根 根 6 県 県 県 儿 錦 小 堀 村 砂 織 江 早 文 芳 白 汀 苗 子 子 行商 は 平 太鼓 咳止 功績 愛犬の一 Ш あ 長電 入口 ライ 7 墓 旅 話 今日ね L 0 帰 補 茶花も散って思 均を追い越す 柱 イズなど途中でやー L ゆく 人もあの人も入院とか雪しきり 話 91 中十 者も め に をたたえる浄 ろ夜の宿で女が髪を梳 を這入るとか り妻は夕餉 8 0 へ来るたび馴染み買う心 ひともこの 間小 から を飲ん も 秘密を一 え」と話 吠ゆ柩 他意は 坂 花に向 円増えて出 0 お彼岸 鼓 詳 火 を待 で古稀 を借 しくし 0 なか L 女も プラン立 の足とどむ 0 0 て呼 かる愛 土 0 土 V 聞 0 てくれ 3 7 なお た赤 出遠くなる 軽 産 12 2 0 き逃 極 軽 立 た解 花 楽の絵 物 U 80 Va Vi る孫 かけ 一て直 ち向 す立 あ 一がす た春 る 0 唧 風 電 綱 17 か (義弟の計によせて) なら 話 帰 3 Vi 初 n 0 す 0 島 島 京 京 3 め 中 風 根 根 都 都 県 県 K 市 市 栂 都 石 Ш 本 田 倉 2

求

芽

清

泉

どり

規不

風

大阪市 天 正 千	はりきった分は眠りを深くする	孫三人目立ちたがりやがひとり居る病人の無理に他人が腹を立て	ガンバレが重荷になったドッコイショ	F)	白に棲む嘘したたかに生きている	馬鹿になり切って降りたつ終着地	青春よ試行錯誤の日記帳	政治不信椿ひとつが落ちてくる	善人の定義自滅の人生か	岡山市 時 末 一	公平な筈のジャンケン勝てぬまま	がらくたが喋り出すから捨て惜しむ	そろそろが噂で終るパパの椅子	桃の節句一升瓶は重すぎる	名門校パスして鈴の定期券	堺 市 高 橋 千万子	熟年を実年に変え職が無い	岩を嚙む波の白さも島は春(伊勢志摩)	露天風呂の美女へ眼鏡を拭き直す	木蓮の蕾揃って天を指す	三寒四温あしたへの夢ふくらませ	堺市 藤 井 一二
梢				子						灯						万子						\equiv
風しもにすわり灰皿うらめ		愛ひとつうたがう如く椿!	妻の愚痴あんたもわたしも馬抜り向かぬ背に躍りを知る木	の雪脳裡を過去の		妥協ぐせ取れぬ背中が丸くなる	まだ翔べる予感へ夜が短かすぎ	白菜の薹が外から見えませぬ	割り切っていても女の人使	友情をもろに信じた気の弱		振り上げた拳おろすのに弱	辞令一枚大の男を振り回わ	仲裁をどちらも待っている	免許証親の心配ひとつ増え	連休へ家族それぞれプラン持		囲炉裏端おいしい語らい待	火の中の栗を拾って見なおされ	65ツブ豆を握って燃えてい	かげ口は算盤玉の目と言わ	贅肉を落とす歎異抄読みな
めしい	大阪市 藤	落つ切けわし	も馬鹿やから	ひとよぎる	大阪市 江	、なる	かすぎ	か	い	99	大阪市 津))	4	る喧嘩	٨	・持ち	大阪市 河	待ちかまえ	され	る(節分)	われ	まし
めしい	市	わ	鹿線や	よぎる	市	、なる	かすぎ	やぬ	iv.	1)	市	1)	す	≥喧嘩	~	持ち	市	ちかまえ	され	る (節	われ	お
めしい	市藤	わ	鹿線や	よぎる	市江	くなる	かすぎ	め	い	33	市津	99	す	∂喧嘩	~	持ち	市河	ちかまえ	され	る (節	われ	お

ずる コー お日 千 日 ずっこけて仮面を一つ見失う 余生未だ明るい彩に塗り替える 五月病理想だおれになってます 庇 御香典と今日家計簿に書くなんて 千羽鶴焚けば煙が目にしみる 走 お 57. 無駄な日は 企みを持っていそうな揚羽蝶 春うらら クラス会別れた後は主婦 馬 母は哀しげ雪の日の豆ごは ってるのに 1 燈会いたい人に会えなくて 、柄そのままにじみ出 の段取り狂う春の雪 1 さまに 明 鶴とどかぬ祈りに首を垂れ い人下手といわずに苦手です 千歩さん個展 句 0 会に 指 で別れ話をむし返し 雀が火種持っ 一寸無礼なサングラス から寒さ遠ざかる 一日もない 傷 行 かせてもら 口 1 また触れる 有 てくる 0 難 る 顔 画 います 2 大阪 大 大阪 阪 市 市 市 市 里 神 本 大 夏 磯 間 塚 H 潚 直 節 道 津 子 子. 7 砂 傷心 色即 虎 日曜 合 春 それとなく座席をあけてくだされる 草笛と一しょに白 秒よみの段階ですと知 轟々と天馬千頭春立てり 日 雪 出 可愛いが孫の相談 面 春 0) I 1 こり 玉 前 T 会 ヤホ のうつ 本狼都会の中で生き残り の子を隠したとこをつい忘 の雨風を誘 断をまじえ尺取虫天 の一に恨みの此 是空お釈迦も無理な事を言う K 持 日雀とんちゃくなく騒ぎ 0 へ患者の方が身だしなみ へ話相手の夜は白 D 春来い 1 お礼まい 雪きゆる人の世なきわ ち人の間をすり抜ける ビクス明日 ・ン親 ゴリラの 花来い 子 って花を呼 りは後 の会話とだえさせ 胸中わ おそろしい い雲に の美人の の計報 恋も来い まわ む らされる 3: 乗る からない 夢を見る (川口弘生先生 らい n 大阪 大阪 宮 市 市 市 逝く) 林 古 塩 寺 # III は 美津 新 東

郎

雲

枝

絵

若い人に負けるものだときめている			金婚は退化へ架ける虹の橋			
余白には軽いつづらのスケジュール			子育ても終えた退化の車椅子			
木が繁りきざな看板かくれたり			唐津市	浜	本	久仁於
西宮市 奥 田	みつ	つ子	早春の鼓動に触れる万歩計			
春の土手犬も愁いの顔でいる			強情の父にもあった泣きどころ			
別れの駅にせアカシアの花が散る			鉄冷えの町で神話が生きてくる			
春愁にうかぶ辛夷の花灯り			閉山の島へ夕陽だけ落ちる			
のめり込む本に短い三時間			大あくびしてから針の目が通り			
竹の里まっ正直は罪なもの			八尾市	Щ	下	みつる
岸和田市 福 浦	勝	晴	西陽しかささぬ土地だと値切られる			
飽食の雀ビタミンB不足			操ったつもりの妻に操られ			
厚顔をからかうように若葉風			宇宙(三句)			
離職者のあしたに続く海のいろ			お隣と宇宙ばなしで和がもどり			
ゼニちーともたまらんのに鼻毛伸びすぎる			広大な宇宙談義で酒を飲む			
春おぼろ大学教授の革カバン			パチンコに負けて宇宙の星にあう			
岸和田市 清 野	٢	う	八尾市	宮	崎	シマ子
けんかするまだ相手ありああ夫婦			花咲くと妻が水やる番になり			
八十四歳皇后様はおすこやか			贈られた傘デザインは森英恵			
灯がともり更に花やぐ花の城			内緒事かくれんぼに似て又可笑し			
通勤の踏むには惜しい花むしろ			赤いシャツ夫に選んでフルムーン			
人の群さけて逢瀬の花の下			片屋根に残った雪と梅を見る			
唐津市 田 口	虹	汀	出雲市	遠	Ш	多賀子
村中を荒し流言町へ出る			性善説信じて水仙白く活け			
マンションで落した針が棒になり			不眠症問わず語りの夜が長い			
強情が父の美点で欠点で			春風の私語もわたしは聞き上手			

吉 岡 きみえ 正直に歩いて重い税に会う 泉屋川市 高みえ 正直に歩いて重い税に会う 身に過ぎた希いを祈る灯を点しうそ少しまぜると真顔になる他人 理知的にすぎても化粧濃すぎても 春の灯に心のすきを見抜かれる 春の陽へ猫も夫も背のびする をわらかい光へころころ毛糸玉 やわらかい光へころころ毛糸玉 神断が甘くて乗った泥の舟 夢なんかみてる筈ない大いびき 姉ちゃんの巻き寿司の具がこぼれそう 政治家に売上税という踏絵 中型で生み落す気の風見鶏 中型で生み落す気の風見鶏 市 取曳野市	近くへ来たらお寄り下さい真に受けてだんだんと子別れ下手が増えてくる渋滞の車で便秘になっている。	高知県 年取った方の易者に観て貰う なくらんだ妻の財布が置いてある この次を見ておりなさい二枚舌 でのほう見ながら妻と娘が笑う	舗途強んもの中さ居う	しのび逢い月のしずくがなおあまい 静止したブランコ月の輪の中に を眠の蛇と蛙の糸電話 を眠の蛇と蛙の糸電話	花粉症など煩わし春弥生春や春寒い言葉は忘れよう
住 菊 皮 風 野 え	江	曽 我	赤	吉	
		部	Щ	岡	
		佳	菊	きみ	
立志伝天狗の鼻に灯をともす 東屋川市 正直に歩いて重い税に会う 身に過ぎた希いを祈る灯を点し うそ少しまぜると真顔になる他人 理知的にすぎても化粧濃すぎても をあの類に心のすきを見抜かれる 春の関に添われ紅をこゆく引く 春の関に誘われ紅をこゆく引く 春の関に誘われ紅をこゆく引く 春の関にあかい光へころころ毛糸玉 やわらかい光へころころ毛糸玉 やわらかい光へころころ毛糸玉 やわらかい光へころころ毛糸玉 やわらかい光へころころ毛糸玉 やわらかい光へころころ毛糸玉 やわらかい光へころころ毛糸玉 で積みの頃が愉快な太閣記 押世押せのムードここまで丸木橋 押せ押せのムードここまで丸木橋 押型で生み落す気の風見鶏 中型で生み落す気の風見鶏 中型で生み落す気の風見が居て 花開くまだ故里に母が居て	度	. 風	野	之	
	く口で家売	では、ことでは、 の頃が愉快な太閤記 が甘くて乗った泥の舟 が甘くて乗った泥の舟がこぼれる。 が甘くて乗った泥の舟がこぼれる。 が甘くて乗った泥の舟がこぼれる。 が甘くて乗った泥の舟がはる。	減反おかゆすすれと言うらかい光へころころ毛糸! 陽へ猫も夫も背のびする 関いがする	上手にむいて寡婦と真顔になる他人を祈る灯を点しを真顔になる他人	志伝天狗の鼻に灯をともす
		本	野	智	田
本 野 智 田		吐	佳	_	英工

水

雲

来

試歩の杖大地こんなに暖かい		老母と娘の雛の思いそれぞれに	旧仮名の老母の葉書を入れにゆく	病院できく国訛りへ話しかけ	裏話きかない方がよかったに	老母の歩にわたしの行く手見失う	神戸市	ノイローゼ人の悩みも貰うて来	廃止線花壇の花は今盛り	仮面かけ続け仮面の顔になり	古稀うれし厚生年金チャンチャンコ	ライバルに貰った塩の辛いこと	字部市	逆縁のさだめと思う雪しきり	鞄よりふろしき包み似合う父	ロボットに負けたらあかんお父さん	乗越の切符はおんな持っている	しじみ汁うまい五月の病み上り	羽曳野市	離れずに歩幅合せて真珠婚	クレオンで画けば親爺はお人好し	司会者のムードで挙げた視聴率	おふくろさんと呼ぶ郷里の廃止駅	円高へ肺活量のないラッパ	羽曳野市
	丸						Щ						平						田						中
	Щ						口						田						中						村
	よし						美						実						隆						
	し津						穂						男						二						優
その昔人間魚雷という凶器	海ゆかばふと口ずさんでいる五月	町人の子孫が飾る太刀と弓	豊中市 田	三猿でいるは難し姑となる	才能の芽かも知れないマンガ好き	機嫌よく今日のスタート送り出す	紙ふうせん人情噺聞いている	愛し息子の愛した人を愛しましょ	富田林市 田	送り出てまだ立ち話冬の月	さわやかに袖をとおすも久しぶり	冬枯れや老いの暮しのむずかしさ	何もかも捨てて一人の楽しそう	いつまでもたよりにされてよしわるし	箕面市 坪	葉牡丹の見上げる空は雪模様	うれしさは墓参の孫と船を降り	春の窓姑無口がよろこばれ	どたん場で女男に頼られる	ライバルの秘密を知っている余裕	姫路市 人	人間より猿は真面目に演技する	菜の花に歓声あげるバス旅行	母が居て土の匂いの宅急便	春の午後留守番電話の切口上
			中						形						田						見				
			正						美						紅						翠				
			坊						緒						葉						記				

坊山	を	対がまずく役所に来たりまするでは、	しみじみと見ればホクロの多い妻眠くなる妻より先に眠くなるりが前市がある。以前市は大いでである。これでは、これででした。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである	大正や貧しい恋のテクニック プライドを持った雀で踊らない を典も妻の身内は妻が出し を開いるのは夫 を表に行のつづくのは夫 を表に行のつづくのは夫 を表に行のつづくのは夫
1	奥	野	田	北
L	Ш	中	中	野
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	美恕	御		久
-	智子	前	叶	子
尻おだやか寄せを読み切る 火せよとの原稿依頼 火せよとの原稿依頼 操すると目立つ課におり	ぽきぽきと指を鳴らして雨の憂さレシートの半分ほどは妻のものアドリブの少し音痴が盛り上げるあわよくば父の背がある七光りあわよくば父の背がある七光り	ならこは目をついていちゃんの誕生祝へク室の初声へ廊下のはず煙る宿にぎやかに三味	引い田き市	風紋は春まで耐える雪の下(鳥取砂丘にて) サンダルが春を見つけたすみれ草 上げ膳据え膳の人に不満聞く 寝る前に鼾を詫びとく旅の宿
竹				
竹 内	野	津	: 田	内
	野甦	津柳		花

激辛のスパイスおんな意地とおす 湯上がりの黒髪情緒不安定 湯上がりの黒髪情緒不安定 鳥取県	さざんかよおろかな夢を見るでない古本を買った二円がなつかしい古本を買った二円がなつかしいのとり旅耳をたくさん持って出る似た鼻でよかったこの家継ぐという鳥取県	水すまし春の軌跡の中に居る踏み外すだけの階段高くするそれならば鬼に馴染んだまま生きる耕せば畑の中に有るダイヤ鳥取県	コップ酒まだ正論が生きている言うなりになるネクタイが曲ってる言うなりになるネクタイが曲ってるは人は僕の白髪が増えただけ	世直しをする一票になりますか大学出親と暮せぬ子に育ち大学出親と暮せぬ子に育ち嫁の味姑の舌にはなじめない
宮 土	さえき	森	森	松
尾橋	.	Щ	田	高
あい	*	盛	熊	秀
き 螢	·	桜	生	峰
まだ子には負けぬ親父の細い守銭奴の噂のほどに貯めてい守銭奴の噂のほどに貯めてい	顔が遠い海鳴り聴いて居る前ならどうやと踏絵のようがならどうやと踏絵のようかがったいのでは	びきも聞こえばきになるめぐら	親戚の親戚一票頼みます がイレクトメールこの世の味 がイレクトメールこの世の味	を で雪く夜は雀のお宿気にかかる で雪く夜は雀のお宿気にかかる がは留守今日は私の台所
い 生 め い が 出 書 市	出雲市なこと) III	寝屋川市 ではせ	怪屋川市 を屋川市
	出雲市原)]] V3	管けば	屋のり墓脚ま
腕 出え ずき	雲市と風	市	屋川市なさ	を 屋川市 で

一人来て妻に見せたい城の梅	春の陽へ妻の手を取る足馴らし	大阪市 ル	長所でも短所でもある一本気	万歩計老化の流れ止めるかも	捨てたはずの過去がずしりと背に重い	世の中の流れの速さにたちすくむ	東大阪市	一本気損な性とは知りながら	糸切れた凧職安へ流れつき	だるまさん手を出すという一大事	東大を出てもインテリとは言わぬ	東大阪市	コーヒー通路地の奥まで連れてくる	指切りをした子にすまぬ朝帰り	チップには惜しいつり銭ちと迷い	顔の効くとこで落合う呑み仲間	東大阪市	雪景色二泊三日が褒めて去に	太く短く丈夫な妻の足	ドライフラワーオフィスレディーの御長老	当り前のことが通らぬ嫁姑	出雲市・	喜びも哀しみも白い冷やヤッコ	武勇伝小さな嘘も少しまぜ	子育てにマリアも付ける鬼の面
		北					崎					斉					森一			老		入			
		Longo					山					藤					下					澤			
		勝					美					三十四					愛					壽			
		美					子					JU					論					恵			
誘われた札所参りが好きになる	喜びが重なっている春がくる	チャルメラがなると裏町夜になる	岸和田市 原	メモ帳を離さぬ老母の記憶力	限りある命へ無限の夢を追う	ふるさとは昔のままの軋む家	笑うのも泣くのもひとりの夜が更ける	岸和田市 古	突つくには小さ過ぎます針の穴	まるまると月の使者かと児に惚れて	旅に出て一寸拝借した言葉	明けの明星今日もお話出来ました	大阪府 坂	浪人という名で長い冬迎え	正直に生きても怖いものがある	老いらくの恋のメリットとデメリット	円高は敵か味方かわが暮し	大阪市 板	点滴で明日へ望みの灯を点す	血の絆父母会いたさに来た日本	御無沙汰が一票たのみに顔を出し	心ある人の供花か事故現場	大阪市 長	昭和御代支えた腕をみくびられ	消費美徳物差し違う老いの目に
			///					野										東					谷川		
			3					U					公公					介倫					春		
			よ子					で					子					子					南蘭		
			1.					(1					1					[東]		

順不同中に不満な奴がいる 「天気図と政治家誰も信じないいい話尚続いてる糸切歯いいい話尚続いてる糸切歯いを知らぬピラミッドを 表すの辞書の重みが身にしみる 少しずつ亡父の時計が狂い出す 水子市 光 井 玲 表帯を確応されている自信のブロフィル シャッターに向ける自信のブロフィル を原言と使うないがまくて気障な奴 シャッターに向ける自信のブロフィル を原言と表がよくて気障な奴 を順志口の小声事務所の耳が立ち おの事故は話したくない松葉杖 一きわ高い声で呼ばれている耳鼻科 電話口の小声事務所の耳が立ち 羽咋市 三 宅 ろ ずれ字八法筆なかなかに運ばれず と たろばんの珠の具合にして誤算 を そろばんの珠の具合にして誤算 を そろばんの珠の目に並べ 貝塚市 行 天 千 代 サード で 大 千 代 大 千 代	少年のポッケへ秘める桜貝 一番量な阿古屋貝だが真珠産み 一番量な阿古屋貝だが真珠産み 一般漁る熊手へ貝の黙秘権 「唐津市 筒 井 朴 竜	紅美	る山県荻野鮫虎	本は	自閉症になって安らぐカタツムリ 溝埋めるための菓子折下げていく 栄転か左遷かネクタイ選っている 島根県 松 本 文 子	
行 三 小 中 光 大 天 宅 池 川 井 原 千 ろ しげ 幸 玲 葉	派舟の軸雨の日に並べ 法筆なかなかに運ばれず 法等なかなかに運ばれず	口の小声事務所の耳が立ちお高い声で呼ばれている耳鼻事故は話したくない松葉杖	では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	すつ亡父の時計が狂い出すの辞書の重みが身にしみるみにおしゃべりしたい水中花から飾りをつけぬ毬でした	の願いを知らぬピラミッド話尚続いてる糸切歯図と政治家誰も信じない	姫路
千 ろ し 幸 玲 葉	行	三	372.5	中	光	大
げ	天	宅	池	Ш	井	原
代 亨 お 一 子 香	千	3	L	幸	玲	葉
	代	亭		_	子	香

暴落の野菜牛舎へ押し寄せる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	大山	までもあがった凧の虚	町角の花屋で春を提げて出る西宮市	年金の余生を妻と回り道	山の	踊り場で楽しい雑音主婦の午後	いつわりの顔は視線を避けている	河内長野市	矢印の無い人生の曲りかど	陣の羽繕いに入る夜の	白髪を昔にもどすジャズバンド	地に帰る蟬がいまわの経を読む	神戸市	四面楚歌股をくぐれば逃げられる	三杯目の珈琲よばれてさあ帰ろう	値引きしろとは旧人類のたぐい	アメリカン運ぶウエイトレスモンロー	倉吉市	次の世も又あの夫と暮らしたい	進	気まぐれな陽気にストーブうろたえる	雪の戸をあけて弾んだ声が出る
Ŧ	7		西					井					仲				1)	渡			0	
清	专		П					上										辺				
Ę	=		43					喜					どんたく					菩				
三 千 什	t		わゑ					酔					たく					句				
春の雨いきなり傘の花が咲き	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	いた石に言うまい 一人統書付いて雑種を遠ざ	初歩的なミスで人類死滅する死を予測出来ぬ気安さ空の旅	ф	業ちょっと待った	の愛と思った花の	六十歳まだ青春と思いたし	ヌラリクラリに一人角力をとらされる	境港市 55	何もせず私は感謝して暮す	食堂の乙女食べたりだべったり	食堂で十八乙女よく食べる	心温まる話にはすぐ胸つまる	芦屋市 い	トーストの焦目素直になれるはず	方法はひとつしかない終電車	迫力のある台詞です伝言板	あと戻りした形跡のある誤解	和歌山市 ※	いるマン	はやり気へブレーキかける六十路坂	寝そびれてただ追憶のひとり言
				永					細.					竹					後			
	田			倉					木					中					藤			
	文			僕					歳					綾					Œ			
	子			Щ					栄					珠					子			

基法などロボ	は		初孫に弾んだ声の電話口	の街妻に内緒の店			酒飲めば酒に酔うのに酔えぬ酒	が抜けた親父の雷	ランテ		宝鏡寺は知らず人形寺でわかり	を分で計算した日の長	人間とペットの餌を売る米屋		子浜山おがめひょっとこ居て楽し	丁花寒の戻り	に山にみどりの風に		宝くじ諦めましたケーキ買う	病院へ行けば老人溢れてる	いう字今		カットした髪に春風雲雀なく	ット
		西西				地				々				野				井				村村		
						狸				木				白				春				映		
		兼治郎				村				裕				水				日				輝		
ご詠歌を習いおんなを卒業し出雲市		受け売りの話が大輪咲かす日も	寒いから値打があるとお水取り	大阪市	球根の時から値打ち決められる	母の日はやっぱりエプロンに決めている	週刊誌よんで物知り顔をする	大阪市	鈴を振り観音様へ歩一歩	水量の滝告白はためらわず	株買うて砂のお城を建てましょか	大阪市	プライドにしがみついたら村八分	勲章が欲しく無い妻に助けられ	新人類義理の垣根を越えて行く	大阪市	女同士寄れば衣服かハズの事	念入りに掃除した日は誰も来ぬ	まな板の唄はみんなの膳に盛る	大阪市	三瓶山親子三代わらび狩り	河内山図星のホクロ孤児もあり	老いてなお旅には出たい心意気	大阪市
板	Ĩ.			町		る		鍛				渡				北				松				坂
垣	<u>į</u>			田				原				部				Ш				尾				本
夢酔				達子				千里				さと美				悟郎			100	柳右子				仙吉郎

人の仮面を付けて	あてれば波の	大望を胸に抱いて過疎に生き	岡山県 直	番組のひばりは父の指定席	咳ひとつそろそろ最後の決を取る	新会社独眼竜の旅を売る	岡山市 行	啓蟄の虫おどろかす春の雪	換気扇内気なパパの喫うたばこ	尿の音威もおとろえて老いを知り	岡山市 井	美人だなマスクはずせば唯の人	還暦の気持は若いドッコイショ	寒の明け悲しいニュースも二ツ三ツ	出雲市 小	び跳ねる牛に大地	かじかんだ手に温かき乳しぼり	エリートに育て哀しい核家族	出雲市 小	出迎えが辛い息子のサクラチル	吊り皮の揺れに乗客合わすバス	一本の我が家の松に戻り寒	出雲市	すり鉢を上がるとローンにまた蹴られ	ゴム紐がボケるとパンツだらしない
			一原				吉				上				玉				白金				Ш		
			七面山				照路				柳五郎				満江				房子				よし子		
威張らせて妻という座をきずきあげ	西宮市	鉄冷えて港は静か春寒し	後三本血の通う歯が狂い出す	豪邸は戌亥にちゃんと蔵があり	姫路市	日々良き日耐えた苦労の実が結ぶ	裏の裏知っても止まぬ胸の鈴	袖ふれ合う縁も嬉しい野水仙	姫路市	お隣の娘も出花か春萌える	ひまの無いのが達者だと姑の私語	頼まれた数で忘れる候補の名			初孫へ亡夫も唄った鯉のぼり	た		補聴器をはずして笑いの中に居る	写経した硯も枯れて風邪三日	道はやっぱり母のふ			歳だけはだあれも追越したりしない	やっぱりついてく	
	野				中				釣				1	2			松				Щ				小
	呂				塚	į							坪				浦				本				林
	鵜				遊				遊				+)				輝				玉				妻
	1500												ウ子	8											

正直に話した人が叱られる 中流と言ってるくせに寄付逃げる 融別の悪さ気付かず忙しい 正直に話した人が叱られる なましい男が右往左往する 母の樹を揺すると欲しい実が落ちる 母の樹を揺すると欲しい実が落ちる	雪く海漁夫
玉 山 新 松 片 瀬	
井 川 開 本 岡 尾	
豊 克 千 今 智 六 代 日 恵 郎 太 子 子 太	
代 日 恵 郎 太 子 子 大	
大閣の古いしきたり呼子綱(呼子の綱引き) 田溜りに流言飛語の賑やかさ 唐津市 温泉勝が好きで徳利放さない 更衣来でも獄衣は変えられぬ 小手先の器用が一つ邪魔をする 唐津市 協税と政治の無駄は桁違い た脱税と政治の無駄は桁違い 鳥取県 蝠蝠のずるさも生きる処世術 ご先祖も土も泣いてる休耕田 ニ月かな水の流れを唆かす それぞれの悩み持ち寄りお茶を淹れ をれぞれの悩み持ち寄りお茶を淹れ も 一の色にハイビスカスよなぜ染まる 島根県 エリッチの女神へ手を伸ばし 思いきり春の女神へ手を伸ばし 世	
北 藤 羽 松 桑 山 ^き 津	浜
川 原 川 下 原 口	本
民 鈴 公 た 掬 高	義
子 江 乃 み 水 明	美

葬式代を貯めて一人前になる 旅郷の山は仏に見えてくる 倉吉市 を着て雛壇とならぶ孫雛 を着て都壇とならぶ孫雛	い実の柘榴の説話訶梨帝母したと思う心がつくる影したと思う心がつくる影の伸びほんとに早い失業者	散歩するわが影長し黄昏れると黄色いばらの刺が言う音寿すぎてなおも赦せぬ非常識専力を表していばらの刺が言う	日が正月のよう退職後つけたつもりが亀の首がなでゆっくり舟をこぐ余世で	雪解けの水がうれしい猫柳 一知半解大きな荷物背負わされ イヤリングトレードマークになりまし イヤリングトレードマークになりまし がとりっ子ひとり遊びは上手です を入だ傷夜に痛みが増してくる
淡	井	上	奥	き た金
路	上	田	田	里 山
VD n	森	登志	満	高 夕
ゥ 子	生	実	女	子 子
美しく生まれ賀茂川の水にいつからか趣味も似て来た常の友が残った挫折感	あっプステップジャンプで 飼犬のうらめしそうに雨の 過ぎゆけばなつかしく見ゆ	一のなり黒い	娘に続く塩加減を鈍行こそが特別がテ物でない鮟鱇	母と娘の対話はずんでいるや潮騒の聞ゆる旅を妻とゆく潮騒の聞ゆる旅を妻とゆくった。
た共白髪 山	の朝の朝と生佐市中	見てつい買う気高知県 小高知県 小	車鍋でいる。川西市	いる 場所 ない余命表 るヤング を言ったゲナ 枚方市 二
合い 英白髪 市	終る学期末 土佐市	てつい買うののでは、	車鍋でいる。川西市松	場所 かたが 会命表 枚方市
合い 交野市 山	料 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	てつい買う気	車鍋の大いる。川西市松本	湯舟 次 会命表 かち市 二 山

ではずいて世間の裏が見えてくる がたむきに手糸編む妻背を丸め がたむきに手糸編む妻背を丸め 兵庫県 原皿へ余る思案を捻じ伏せる	イブルをしつ	エリートの人生試験だけに生き 賞めて食べると妻も安堵する 相談が脅迫になる外交員 加賀市	干餅を嚙むと津軽の音がする鉛筆を削りに立って深呼吸出勤のポケット膨らむ風邪薬出勤のポケット膨らむ風邪薬	春一番今年も税の申告日 大阪市 は生さんを偲ぶ まだ嘘のような気がする師の遺影 まだ嘘のような気がする師の遺影	反旗などもう捨てている千鳥足
脇	渥	茂 紹	斎	吐	
田	美	見	藤	田	
米	弧	ま 志 子		公	
朝	秀	子 木	劦	-	
頼り無い男 女を夜叉にする雪の道他人の歩幅に従いてゆく 唐津市の道他人の歩幅に従いてゆく	鉢に花つけてはげます松葉杖 雪の酒これから先の企画ねる 兵庫県	お粥では物足りないと喜ばせれ方が勝負を前になる糸柳橿原市で軍団と書きふざけてる橿原市	絹ずれの音もうれしい適齢期 赤い旗国には国の色がある 奈良県	D51がなぜ野晒しの刑にあう 駅弁の派手に戦時を振り返り 駅弁の派手に戦時を振り返り 岡山県	身におぼえあるので相談乗ってあげ
浜	川藤	岩	石 宮	二 岩	
	島 後	井	倉 川	宗 道	
本	113	~ .	倉 川	小 追	
本ち	選 実	本隆	著 芙 佐子 路	吟 博	

日選集

仔馬 人肌 シー 衣料豊富なのに週刊誌は裸横柄な態度が変えた票の向 放牧 てのひらの灰 七十と七十恋はやは 凝視する女の瞳へ 懸空寺の威厳声なき岩の壁 頭 チンコの戦果は顔に描いてある 0 の馬追い 火 か 1 H 1 0 眼 展を見て 6 お燗人肌なつ が子供 か歩い 句一杯に雪吹雪く 0 I しみじみと考える かける雲赤 てい が悪 0 蓮開 素直 かしや り恋 ない土の上 13 な眼を見る ロンとヤス き I. 大 SII] 矢 萬 藤 + 萬 甲 郎 的 吉 うしろ姿に涙を見せる演技賞 養殖 咎めると昂ぶり尚も強くなる 労わりの言葉身を射す老婆心 野暮なこと思わず明日 伝 T それらしい誘いその気にされそうで 硝子戸に葉紋巻いて今朝も開 0 しみで男の嫉妬唾棄すべし 家 目 ル ソコンの扱 れそうて出る P 0 のえびでわれらの口に入る 0 バ 宝刀 土俵溜りで鼻をかみ ムがこんなに剝がれ 0 おれ 13 43 を目がけて降るように 0 \$ 日 方も知らず済み 鯉 0 妻は 切ってある へ刃研ぐ まだおんな 五女が H 嫁 野 Ш 長 村 内 野 太

文

庫

静

水

茂

津

k969k3	***	***	رومو	~	4564	والمحو	~	****	يهمو	- Nove	Nort	9549	~W	1000	دودو	s es	***	2562	~	Nest	S-645	res
繭ひとつ転がる低い燭の下		裏切りは恋の哲学から外れ	今年ならまだお四国へ行けそうな	墓まいり線香のつきもいい日和	一人ですいつもあなたと来たお墓	押し問答聞くだけだから面白い		落日を呑んで晩酌とはいかが	膝を折り腰を曲げ反論する	ごめんなさいというたったひとりのおんな	見えかくれして人生は捨てられず	忽然と去って人間像語る		政局の転回野党の皮算用	花が呼ぶしばし忘れる酒に酔う	売上税反対代案どうする気	不況音変えるリズムのタンゴ調	花満開不況の風へ散り急ぐ		追伸は果し状にもさも似たり	ささやかなおごり真昼の喫茶店	忙中閑磨く小石が一つある
	八						米			おん			水						藤			
	木						澤			な			粉						井			
	千						暁						千						明			
	代						明						翁						朗			
	合理化の波が職場へ来てしまう	泣き言が口に出る程覇気も失せ	数珠をまた忘れる程の無信心	インチキ商法に狙われてる小金	甘え心が少うしあって風邪を引き	金世	恋終りお金が惜しくなってくる	イエスにもノーにも揺れるイヤリング	男を売った夜を目薬二三滴	引金へ非情な人差指となる	老獪と言われる人のふところ手	月頃	捨てられぬものが溜っていく余生	当分は医者を信じておくことに	どうせ死ぬならそれも無名のままがよい	夫より母より先に逝かれない	一匹の蜘蛛が二階に棲みついて	小山	渡り鳥みんなひとりの湖に泣く	黙って眠ってそのうち糸を吐くつもり	禱らねば凍ってしまう木の枕	にぎりめし峠を越せるだけはある
						井						原						出				
						文						宵						智				
						秋						明						子				

空転に けい い先 L どろぼとけ三態三様花とい 士. 0 葉桜 早起きをし 誰とでも仲 税 飽 言 ひがんばな独りで居れば淋しか ここから 見草と心 n ひねる無心 食 ちつも 沈 嫌 0 勝 n 0 に幸せふ 本音 な空 む お 彼 梅 夕陽 女に は故郷 となが 昨 3: 工 た方が佗しい 不変 ても 寸 H が通う泥仏 人 良 イズも混じる風 コー が に が容になってくる か 1 なれ 蒔 海 3 哀 くつくし摘 母 0 0 0 春 にはい 点 匂い菜種 ぞいて又 12 t n n 0 溶け るか お ぬ風を待 た 吉 ごら 時 五. 顔になり かい 7 つも負 して 雨 す 月 2 h 病 n む 咲 0 音 3 む n it n 黒 IE. 尼 藤 村 JII 本 緑 紫 水 之 助 香 客 女 根っ はっ 百選 よっ 父の笑顔 汽 老友と約 降りそそぐ陽と盆栽が笑み交す Ш 分 還 自 憚 曲 暦 らず か や降 きりと言える理 水うちに ぽど更け 席 かい I 辻川慶子さん還 線 は 乗 6 届 から 鉄分割 声 たちち でお 握手求 路 お 0 n < り継いで行く気まま旅 束ごとを忘れ 過 6 円 は続くよどこまでも 0 **疎地** の青春 ŧ た街に 3 満居士で憎め 陽 酒 つる 别 かい 1) 少し 旅 る人と逢 満 12 n 由は 友が を強 して行く夜泣きそば から がまだ残 Ш 井戸 過ぎて 合 0) 何も 出 いらるる 樹 10 が笑う が な す ある 便 13 橘 本 市 田 高 111 惠 薫 鈴

風

朗

魚

同 人 前月号から 吟 句 子

党と別たか子の話聞きに行く

くチャンネルで追う。党とは別にたか子氏へ けている。同じ党ではないのにテレビでもよ らすらとかるく詠んでいい句だと思います。 のこうしたファンも多い事だと思います。す か子氏に物珍しさと、女性としての期待をか 日本で初めて出た女性の党委員長・土井た

サムライの血を引いていた辞表かく

イの血を引いていたとは。少しの悔いが残っ てもすっぱりしたことでしょう。 白い表現ですネェ。短気と言わずサムラ

さりげなく罪着るものがいて和む

ごむよう心掛けて、立派な日々を送ってなさ ます。家庭内の小さい出来事でも明るく、 芳子さんの句にはいつも泣かされ教えられ

ることには頭が下ります。

倖せの中で倖せ見失う

それでも時折愚痴つくと、ぜいたくな愚痴や 言うて私に笑われます。この句を見て安心し れるさよ子さんは、ほんとうに倖せな人です。 不自由なく趣味の書道や川柳に親しんでいら やさしい御主人やお孫さんに囲まれて、 さよ子

父権暴落して男性化粧品

もきれいにしたらええやないのと言います。 すけれど、孫娘達はおばあちゃん、男の人で て来ました。いい所を詠んだいい句だと思い 旧人類にはわからないことだらけの世になっ 十歳前後の娘達は、私の思いに唯笑っていま 私もこの句と同じ考えを持っています。 П 紅

口惜しくてバカバカバカと鍋みがく

あるいはお姑さんの気持かも分りません。い い句だと思いました。 ったでしょうが、世の中が変りましたから、 今まででしたらすぐお嫁さんの句にしてしま お嫁さんか姑さんの気持を詠んだ句ですね。 中 御

信用という財産を子へ譲り

思いやられて何より尊い句だと思いました。 立直ることが出来ました。真面目な御日常がが、信用だけは残して置いてくれましたので 十五年前に死なれ借金もたくさんありました 番いい財産だと思います。私も主人に三 田

ママが描く地図を飛び出せない息子

なると思います。着眼がよいと思います。 してやれば逃げたりなどしないでよい結果に い愛情だが、息子が飛び出そうとする前に出 ご近所の陪審員は手きびしい 母はどうしても過保護になるのも無理のな

理智的な句で、

心に無駄のない句、

よい句

だと思います。 同居離婚をつきつけられている男

さんがお酒を毎晩のみに行ったり、明治生れ の私には理解に苦しみます。新しいところを この頃、 男が弱くなったのでしょうか、奥

それなりに愉しい男の市場篭

突いた面白い句です。

は私達には分らない。着想のいい句と思い 頃の方が男も女も立派だったと思う。今の世 対しなかった。奥様の恥と思っていた。その 前は主人に市場篭を持たせるなんてことは絶 一人の人もある。結構楽しく買物をしている。 市場篭をさげた男の人は奥様同伴もあれば

門限もひとりで決めて孤りの灯 ああ神も無力か父が癌で逝く 倖せの過去を抱いてる不倖せ

村映輝 川洋々



青磁社などの名編集長とうたわれた。 青磁社などの名編集長とうたわれた。 青磁社などの名編集長とうたわれた。

戦後の昭和25年戸塚にオランダ書房を開き戦後の昭和25年戸塚にオランダ書房を開きてに六本も刊行したが、末摘花関連の著書は昭和41年までに六本も刊行している。その他、末摘花まがいの「艶句」なる著書を昭和31年から10年間に四篇刊行。この他「誹風柳多留全集」十間に四篇刊行。この他「誹風柳多留全集」十二巻「川柳東海道」等著書多数で、書き並べると尨大な目録が出来上るほどだ。

昭和25年に設立した近世庶民文化研究所は

しい著書を遺しているが、彼が得意の末摘花

世の中ちゅうものは分らんもんだ」

岡田甫は以上のような川柳関連のおびただ

約百名の古川柳研究家を育成した。人といわれ、このうちから川柳岡田甫の門下を出して終刊したが、同研究所の会員は六百機関誌「近世庶民文化」を出し、同2年百号

では、これらの門下生らと孔版「柳多留」25篇より間篇を収めた「稿本柳多留全集」を完結さり、正れが昭和53年完成した「誹風柳多留全集」第十二巻の礎稿となった。また、柳多留集」第十二巻の礎稿となった。また、柳多留を発刊して、右の柳多留全集の補差としている。門下生らと柳多留金集の補差としている。門下生らと柳多留金、標本では、一次の門下生らと孔版「柳多留」25篇より間には、一次の間である。

月刊「尊(ATA8F5月号)志上で、今本・希うな興味深い挿話がある。 に手をそめたそもそもの因縁には、つぎのよ

紳士録』の中でこう語っている。(抄録)本・艶本の総元締で一種の奇人ぶりで世に知本・艶本の総元締で一種の奇人ぶりで世に知本・艶本の総元締で一種の奇人ぶりで世に知る。

具)張形にもいろいろある。それを忠実に、 生になった頃、手紙がきた。それには"お前 ら、長崎のミッションスクール東山学院の先 ちの読者と考え、サービスしたわけだ。(略) という人物は逢ったこともない相手だが、 ぜんぶ寸法、用法を書いて返事した。岡田甫 ・張形とは、男根を模した女性の自慰用の秘 の持ってる張形の寸法を教えろ』とある。(註 くて二人で「末摘花詳釈」を出した。彼は早 者になっていた。張形がとりもつ縁だな。か 柳の第一人者になっちまった。丸十府君は逆 たが、ひょんなことから末摘花を知って、川 大の学生時代は、川柳のセの字もやらなかっ スクールの先生が、すでに川柳研究の第一人 たが、世間へ出るとぜんぜんやめちまった。 で学生時分から盛んに古川柳研究をやってい 戦後になってやっと会ったら、ミッション 「岡田甫は、早稲田の国文の師範を出てか う

この坂本篤の座談会にこんな個所もある。 この坂本篤の座談会にこんな個所もある。 「末摘花詳釈は上下二冊で拾遺篇一冊、つまり三冊セットで出版したが、その帯に永井荷風の「桑中喜語」の一節を引用した。それは『川柳・都々逸は江戸時代に在っては通俗の文学なりき、而して今日は然らず、今日若しつぶさに末摘花のいう処を解釈し得ば、容易に文学博士の学位を得べし』というのだ。荷風は、戦前から末摘花を高く評価してたんだな。大曲駒村が「末摘花通解」を出したが、これはとんだ間違いばかりやってる。後に「川柳大鑑」を出したが、みんな "だろう解"つまり "そうだろう"の解釈でいい加減なものまり "そうだろう"の解釈でいい加減なものまり "そうだろう"の解釈でいい加減なものまり "そうだろう"の解釈でいい加減なものおより、

高識者岡田甫先生にきくべきだろう」「地方新聞特報配信に、いい加減な川柳註「地方新聞特報配信に、いい加減な川柳註

その中に水で滲んだ岡田甫書簡がわずかに筆えて、昭和48年に岡田甫との初対面の際、彼えて、昭和48年に岡田甫との初対面の際、彼えて、昭和48年に岡田甫との初対面の際、彼えて、昭和48年に岡田甫との初対面の際、彼えて、昭和48年に岡田甫との初対面の際、彼えて、昭和48年に岡田甫との初対面の際、彼えて、昭和48年に岡田甫書簡がわずかに筆

者の手許に残っている。そのなかに

の一文がある。これに対し当方からで興味を示さないのはどうしたことか」で明味を示さないのはどうしたことか」

「現代川柳派の連中も、古川柳や俳諧につ「現代川柳派の連中も、古川柳や俳諧につ

ている内容の手紙がきた。
生め合わせばよいか、とかなり真剣に心配し埋め合わせばよいか、とかなり真剣に心配し

四田甫編「定本誹風末摘花」岡田甫校訂「誹風柳多留全集」(三省堂版全十二巻)は、ともに水木真弓(一八九二~一九五二)のいわゆる水木本」が礎稿である。水木真弓は、岡田三面子が苦心蒐集した初代川柳評万句合の勝句刷の研究を継承し、綿密な分類調査に当ったが「この水木本と呼ばれる故人生前の研究成果を伝える稿本なくしては(右二篇)は生れ得なかったであらう」(石曽根民郎)

岡田甫はそれだけに水木博士の遺業を多と 岡田甫はそれだけに水木博士の 第 「 きんせ」で開いた折、水木真弓夫人と令 第 直箭夫妻を招き、ねんごろに故水木博士への感謝の意を表している。

孔版「柳多留」25篇より16篇を礎稿に「誹

風柳多留全集」十二巻が完結近い昭和51年ごろ「とみに体力が衰え、あと二、三年の生命れだけにこの全集への全力投球を行っていたれだけにこの全集への全力投球を行っていたわけである。昭和54年12月4日死去。享年7 お倉霊園の墓碑には「無心」と刻まれている 鎌倉霊園の墓碑には「無心」と刻まれている だけである。

「末摘花」や「柳多留全集」の他に、昭和「末摘花」や「柳多留全集」の他に、昭和3年には「川柳東海道」上下巻。昭和51年には「増訂版川柳東海道」上下巻。昭和51年には「増訂版川柳東海道」上下巻。昭和51年には「川柳東海道」上下巻。昭和51年には「増訂版川柳東海道」上下巻。昭和51年には「増訂版川柳東海道」上下巻。昭和51年には「増訂版川柳東海道」上下巻。昭和51年には「増訂版川柳東海道」上下巻。昭和51年には「増訂版川柳東海道」上下巻。昭和51年には「川柳東海道」上下巻。昭和51年には「川柳東海道」上下巻。昭和51年には「増訂版川柳東海道」上下巻。昭和51年には「川柳東海道」上下巻。昭和51年に対している。

に驚嘆に価しよう。ことだろうが、この精力的な著作活動は、実ことだろうが、この精力的な著作活動は、実にとだろうが、この精力的な著作活動は、実に、実験では、実験では、またが、この特別のできない。

★次回は「房川素生」

誹 風 柳多留 廿六篇研究(11+1--11+1)

八 木 多 敬 Œ 範 鈴 石 木 田 成 黄 佳

南

得

野 真

孝

多 \mathbf{H}

石 大 屋 \mathbb{H}

晋

郎

光

故 出

甫

本多=「鳥の名」は鷗と都鳥 角田川所の人ハかもめ也

518

俗な絵合せ歌麻呂や栄之也

519

鳥の名も替り息子の気も替り

隅田川迄やって来て、鷗が都鳥と鳥の名も替 句である。花に誘われてか、名所の散索にか、 業平の歌に詠まれ都鳥の名で呼ばれる。 出題句は、都鳥・鷗を吉原を背景に詠んだ 隅田川の鳥は鷗であるが、「伊勢物語」で 鳥の名も二ッにわかる隅田川 三六32

ち出して、互いに優劣を競い合ったりして戯

出題句は、歌麿や栄之の当世風美人画を持

添えたものを出しあって優劣を競う(「広辞 分ち、判者を立て、おのおの絵や絵に和歌を 本多=「絵合せ」は物合せの一。左右に組を

気を替えて吉原へというのである。 鳥の名も人の心も替る所 名にしあふ名所から皆気が替り 一三四28 一二四別26

るように、このまま帰っちゃ面白くないと、

多田一賛

多田一賛

石田普=実際の絵合せではなく、戯れている。

なかったらしい

大屋―江戸時代は絵合せはあまりおこなわれ 立て俗っぽい戯れ事といったのである れているのを、雅趣豊かな貴族の絵合せに見

= 十一丁

20

520

花曇り昼から桐の梅を見る

思ふとあり。句はいずれにせよ、殿女あたり とある。梅は恐くは此狂言を指したものかと ると、寛政八年春桐座(市村座休場中の控櫓 石田成=『川柳江戸歌舞伎』の三面子註によ 梅の縁語仕立により桐の梅を見るという謎め の桜の花見が芝居見物に変ったことを花、桐 兵衛菊之助の女房小梅にて大当大評判なりし の二番目隅田春妓者容性にて宗十郎の梅の由 いたいいまわしによりよんだもの

多田―賛。『歌舞伎年代記』寛政八年の頃に

36

るか。 也」とある。本篇が寛政八年刊行の傍証にな 役也……梅の由兵衛沢村宗十郎大評判大あた 「桐座由兵衛女房小梅とでっち長吉菊之丞二

岡田―賛

銀きせるつばなでやにを通す也

がった振舞をし、更に江戸近郊への遊山と帰 子は煙管掃除にまで銭のかかることをして粋 掃除をするが、つばなでやにを通す等道楽息 石田成―銀煙管は当時の遊治郎がおしゃれの として類句がたくさんある。 たもので、大分流行し柳句では道楽者の象徴 一つとして、どうしても持たねばならなかっ 句は、通常煙管は紙捻など手近なもので脂

当世のきまりハ本田銀きせる かれ萩でやにを通した銀きせる 安二義1 明元仁2

石田晋 ― 礎に賛だが、吉原行までは必要ない

りには吉原行を暗示したもの。

多田―賛。息子の野掛か。

のではないか。

522 い、息子内の朝顔斗り見る

家の朝顔観賞により、早起と勤勉さをよんだ 石田茂=前出句と正反対の模範的息子で、自

> もの。 いい息子内のおまん斗くひ

多田―賛。岡田―同

朝顔の花見るやつへゆづり状

宝十天1

大イさうな庭子錦の塒なり

いう意 吉原は大きな鳥篭であり、彼女等がその中に 艶美華麗な有様を孔雀か鳳凰に見立てると、 寝起きする遊廓はさしずめ鳥の寝所であると おく篭。本句は、 石田成=「庭子」は庭に置いて小鳥を入れて 遊女が着飾って見世を張る

大屋—賛 大相な庭篭さくらを植て置 五 五 15

多田―賛。岡田―同 鳥篭へむすめを入レるむごい事 四28

千両の中へ通りをすっと付ヶ

引手茶屋が並び、大門口より水道尻まで真直 南北に走る通りは仲の町、両側にはずらりと わし、本句は夜の千両吉原の意で、その中央 昼は江戸三座の芝居、そして夜の吉原をあら 石田成=江戸で千両といえば、朝の魚河岸、

石田晋=賛。但し訓みは「すっと付け」か「ず に貫通した大通りであることをよんだもの。 よし原の背ぼねの様な中の町 E 0 2

っと付け」か。お教えを乞う。

多田一賛

二七20

岡田=「ずっと付け」と思っております。

世をうしと悟て耳を洗ッてる

飲ませようと来て耳を洗う理由を聞くと、帝 れで耳を洗って居た。そこへ巣父が牛に水を 許由は承知せず耳が穢れたといって頴川の流 を箕山に赴かせ、その旨許由に伝えたところ、 が私に帝位を譲ろうということを聞いて、耳 堯王は勅諚により賢人を尋ねさがすよう臣下 石田成―謡曲「許由」に、「帝位を譲ろうと

浄な水は牛に飲ますことはできないと、牛を 父もそれは尤もなことと言い、そのような不 が穢れたので洗っていると答えたところ、巣

酔につれて夜の明けるまで舞を踊った」とあ この風雅な今宵を楽もうと、互に盃を交わし 牽いて去った。そこで許由は巣父に呼びかけ、

洗った故事をよんだもの。 いて来た牛を憂しと牛にしゃれて頴川で耳を 聖人の洗った耳も世に聞へ 1000

句は、許由の世間に対する憂いに巣父が索

大屋一賛

多田―賛。 岡田 許由も許由巣父も巣父牛もうし 一二六72



県 寺 中 枝 子

n

0

V

小

指を許

1

1

タイ

今治

市

野

村

京

子

佐賀

坂花べ惚道柄レれ の干した布団 1 似 合う 男で若くない へ蝶が舞う

思わくがあるのか神も知らん撒き散らす噂に女対おんな夕暮れに咲く花月と契りしか初夏へ譜が移ると少女翔びた

れに咲く花月と契りしか

女翔びたがる

よく合わぬ割り符

が闇を深くする

か神も知らん

ふり

正古いた

絵

の中でやすらぐ母の顔

12 大阪

市

清

水

康

惠

にこたえを待ってい

る窓辺

たず

お多福

の面をゆずって下さい

な

まれ

たみやげ値札をつけておく

原

市

信

本

博

子

あ

b

7

な

Vi

コッ

プ

人恋えば陽

の大きさと赤さかな

へです

V

言

葉に弱くなる

筋

の煙 Ť

が消えた鉄の冷え

マニキュアを二度塗りしてる春コタツ

みの

種

かも

知れぬ愛ひとつ

尼僧に会っ た花手桶

眼 雪しきり 誰も無口な冬の

熊本市 永

田

俊

子

椿女の嘘はすぐばれる 癖に合わせる嫁の 裏 知

軋落を

む

戸

0

上ぶとん

を裏返し

して話

題

U

0

涙

が

涙を

りの

の夜え

誘う独 0 中 0 騒ぎでしょ 本 県

> 大 111

子

赤電 身勝手な輪切り どうしても 点と線つなげばひばりの巣へたどり 吾 が家の プッツン出 ダイヤ 思 43 ル 断 来 つい忘れ 小ぬ酒煙草 たされ 3

111

香

選

噴水が僕の代弁して呉れる 名古屋市 藤	聞く耳があろとなかろとひとり酔い良心のカケラをさがす置手紙幸せのほくろ見せ合いかしましい道祖神の耳が捉えた遠なだれ	がんこなまでに真直ぐ果てた葱坊主目印のバラはとっくに枯れていた帯芯に浸みた女の修羅いくつ	の声聞くソナ	踊りつかれてピエロが眠る花の下障子張るはじめの終りかも知れず障子張るはじめの終りかも知れず幾千の愛を頂き個展すむ 幾千の愛を頂き個展すむ	自己主張通す若さに負けてやり黙ってる父の背中が怒ってると病んで夫にすまぬゴミ袋やっと芽を出せば雑草むしられる。 熊本市 宇
井		渡		杉	野
高		杏	奈	千	昭
子		花	美 子	歩	代
それなりに背伸びしている雪の下お水取り無病息災火をかぶる二月堂にて	義理堅い亡夫を思う熨斗袋 高槻市 笠 嶋 恵美子 かがままを聞いて呉れたは亡夫ひとり 戒名の並みと上とに迷う見栄	百ヶ日そろそろ疼く絵の具皿 裏という枷を解かれてからの独楽 高槻市 河 瀬 芳 子黄蝶ひらひら亡母の哀しい化身かも		大留米市 鶴 久 百万両妻としてまた母としてカーネーション露の嵯峨竹伐る音へ道いそぐ露の嵯峨竹伐る音へ道いそぐ	自意識に足もつれ出す蟹の歩度 証一つ打てばやすらぐ亡母の膝 揺きあげればさらりと青い鳥逃げる

地球の一角言いたいことはたんとある	手にすればさしたることなし鬼の首	むき出しの情けで逃げ道塞がれる	カラフルな鳥で籠から出られない	和歌山市 桜	妻と二人であすからの絵を描こう	退院が近づく婦長もいい機嫌	が手に	護婦のいう耳打	退院のお蔭を人妻からもらう	西宮市 紀	猫ももうお齢か物に動じない	花籠へ入れたい花を選っている	足や手があった夢などダルマさん	当にせず当にもされず冬籠る	ある日ふとこけしは里の夢を見る	京都市 松	酔い醒めてさてあんたはんどこの人	夫婦箸一つになった日の恐さ	大根下しが好きで父さんお人好し	波風を立たせぬ馬鹿になり終る	裸木の芽が騒ぎ出す風も春	大阪市 上	菜種梅雨逢えないひとの名を消しに	恐い夢ばかり見させる風邪の神	暗黙の了解という手を握る
				井						市						Ш						田			
				千						郁						芳						柳			
				秀						栄						子						影			
七五三主役は母の背で眠り	東子市	義理ひとつ果す喪服が雨ん中	恐いものみたさに覗いているカルテ	涸れ井戸を覗けば亡父の声がする	三寒四温花の便りもゆきくれる	羽曳野市	投げつけるように禀議書却下され	禁酒して友一人去り二人去る	山椒の芽をつむ頃に亡母のこと	名水の湧く駅があるローカル線	何事も妻の助言がいる男	西宮市	敵が居たからおとなしく帰って来	産声を待ってる廊下の若いパパ	湯を沸し旅から帰る妻を待つ	お恍けが上手で銭を残してる	血の絆ないけど重荷背負いこむ	尼崎市	水あたりだろうと陀羅助持ってくる	行李から出た古帽子かぶってみ	ひとり合点して春先に風邪をひき	ワープロできたお便りが抜けており	肥えてきてヘルスメーター疎ましく	守口市	あやめ咲く頃に逢おうと言う便り
	小					吉						松						森						森	
	Ш					Щ						本						安						Щ	
	悠					寿						-						夢之						まさお	
																		7						7	

三人の真ん中走るようにする	歯が抜けて明るい顔になりました	鳥取県・	知恵の輪がとけず終着駅につき	バスの景田舎になってから我が家	建国論議どうあれとにかく休みなり	札入れを買うて財布が空になる	熊本県	定退へどこかゆるんだ顔の線	逆らわぬ話だらだらまだつづき	真夜中のコーヒー妖しい手で招く	一本の旗を遠くで振っている	熊本市	南座の幕間を見たいゆりかもめ	まっすぐな道で別れる影法師	誘われた嵯峨のしぐれの旅もよし	友を見舞った帰りは温い冬のバス	京都市	隙間から洩れた光に救われる	長々と母の手紙は子を憂い	ふりむいて惜しむ別れに虹がたつ	待ちぼうけ温い指切りまだうずく	吹田市	造船の街に厳しい春の風	口臭を消す仁丹を妻がくれ	人生を替える出逢いとなる火種
		土					高					黒					木					井			
		橋					野					田					村					上			
		はる					宵										たけ					照			
		お					草					緑					Ĺ					子			
の芽に火花を散らすお水取り	摩り減った靴のかかとにある苦労	窓明けて春の雑音聞いている	尼崎市	三代のリレーは孫に手を取られ	流れ着く場所定まらず海に出る	スパイスを効かして女花ざかり	流言を飛ばして四月馬鹿でいる	唐津市	家中が風邪引き風呂も小休止	丸く輪を組んで宴会派手になり	OLになったらノルマ背なに来る	物好きの財布の口の軽いこと	熊本市	海の旅思わぬ方に陽が沈む	成人式の顔一票と見る候補	よく喋る女と逢った日の疲れ	ピカソのような顔が鏡に微笑する	佐賀県	フルムーン他人事にして花の下	アマリリスの赤に決心せまられる	ふりしぼるように咲く老梅が好き	御無沙汰を責めてるような墓の草	滋賀県	集まれば時間忘れる舌になる	片方の靴に嚙まれる癖がある
			的					相					北					江					安		
			場					葉					Щ					П					田		
			十四四					あ					-					万鱼					志		
			郎					き					進					亀子					津		

程屋川市 太 田 藍 子	村の床屋がエイズ予防の講義受け 遠磨画を書く人だるまに見えて来る 遠児服胸に名札とカーネーション 園児服胸に名札とカーネーション	突っ張った分だけ女の哀しい眼炎に似て父の横顔慕う人思い出をキラキラ照らす鏡湖たり(余呉湖の別名)陽だまりを心ゆくまで田舎道 寝屋川市 宮 崎 菜 月	歌劇見て若い空気を持ち帰る海峡の浜に異国の波がうつ思い出の宿の箸紙喋り出す旅の楽しさアルバム開き亡嫁に逢う アルバム開き亡嫁に逢う アルバム開き亡嫁に逢う	翔いて少年春へジャンプするライバルにばっかり軍配あがってる円高のあおりで冷える鉄の街円高のあおりで冷える鉄の街となが一杯生れる子供部屋岡山県 矢 内 寿恵子	手鏡に聞かすうれしい独り言 熱い茶に替えてあなたに妥協する 熱い茶に替えてあなたに妥協する ・ 兵庫県 東 浦 砥 代 日 東 浦 砥 代
中 村 沢 江 田 輝 新 良 あ 清 藍	車れて白魚がくる四つ手網を喰うつもりで食べた松葉がにかれる人と北満の雪見酒がんる四つ手網がの終る日赤い旗を焼く	まった雨になります雪になりてから優先座席のアナウンスてから優先座席のアナウンス	があるので今日も竹を踏むがあるので今日も竹を踏むいたいう見合いと明素顔がよいという見合いはり素顔がよいという見合いる。	た少女ケロリと曽根崎署 手を振り庶民小旗振る をひろげて母の国訛り	実に新芽吹き出す春の雨実におりも皆勤賞が光ってる業へはじめて父と酒を飲む業へはじめて父と酒を飲むぎやかな女に会って出る疲れ
輝 新 良 あ 清 藍	H	田	堀	桜	椎 太
か・	中	村		沢	江 田
	輝	新	良		清藍
	子	造	江		芳 子

親同士テストのような初対面	大阪市 今 西	ゴミの番させてる選挙顔写真	子には子の暮らし一人の朝詣り	朝夕のドラマは知らず駅の鳩	みちのくのこけしの駅の名は忘れ	西宮市 秋 元	不器用な告白を聞く耳飾り	一枚の枯れ葉で飾る蟻の墓	雪をほめ雪を憎んで北に住む	もうあかん貌して穴のある軍手	旭川市 朝 倉	紳士面した狼を見てしまう	糸切れたマリオネットの暗い貌	ぼんやりとしてたら銃を持たされる	信号を無視して渡る春の風	尼崎市 鈴 木	ギブアップさせてくれます孫の智慧	娘よりも嫁の涙が身に沁みる	背丈程力無さそな新人類	力の限り生きた夫も古稀となり	大阪市 亀 井	大切にしたい貴方の肩の線	日曜日の父ガタガタとして困る	娘の勧める髪型にして若返る	衣裳箱亡母の小言を開けて聞く
	静					て					大					良					円				
	子					る					柏					征					女				
親切が崩れてお隣遠くなる	私だけ勘忍袋縫う役目	静岡市中川みつ		八起めにようやく飴をすてました	昼の月おしゃべりしたい鳥に会う	湖の底昔ばなしがおいてある	米子市 門 脇 晶 子		犬年で犬の肩もつ話する	フリージヤが見とれていますレッツダンス		守口市 結 城 君 子	蕗の香にまた耳鳴りがせめたてる	あけにくい戸だがピッチリ閉ってる	長谷寺やまえに蓬を買うた店	どれ見ても正直でない鏡です	吹田市 栗 谷 春 子		一本の傘に寄り添う午後の雨	春風に軽い懐覗かれる	退職日朝から妻は靴揃え	尼崎市 吉 永 伊三郎	桃畑で手を握られてそれっきり	呼鈴が素直に押せぬ門構え	おばあちゃんはきらいじいちゃん好きな女の児

圧の高さも言うて日なたになりたい石を一つ積むさしい言葉に少しウソが	f	を描いて如何に見てないかが分かり 見るところちゃんとつかんだ子どもの絵 見るところちゃんとつかんだ子どもの絵 見込みある絵は描くたびに直される	当り への市 山	一帖が小さく見える大広間 複数を満たすと財布軽くなる 静岡市 三 浦	ままごとで父さん母さん別居中バラの花優しく包む新聞紙
200					
笑		手 ま		2	
子		子る	子	ね	
る	季が我が家でよく見せない孫の三歳児	見たような顔に相手も立ち止まり ・本枯しも耳をすませば亡母の声 ・本枯しも耳をすませば亡母の声 ・本枯しも耳をすませば亡母の声	合せな空腹だってある夜橋には厳しく孫にお人好橋には厳しく孫にお人好	事故突発日本人はいないというり、下TT借金してもと悔む人類が薄らいでゆく花灯り	風船の空気は丸く押し込まれ
	芦	片	奥	真	池
	田	平	野	喜	田
	主な	基 次	=	内	#3
	静	静	テ		寿美
	江	代	ル	實	子

たのもしいプランが孫の画布にある	喋りの妻	コンディン しぬよこ きょ 鳥取県	恋の甘さを知った唇には見えぬ	絵にはならぬが老いらくの二人づれ	とぼけた風が風紋を描きなおす	鳥取県	ある悟りライバルの道あけておく	金で済む話に金が無一文	忌憚なき意見を吐いて座がしらけ	大阪市	甘えたい夜で水割りもう一杯	初渡航日常英語などを買い	品師	堺市	春愁や哀しき絵馬を見てしまう	赤いバラ好きだと聞いて身構える	足組んでみても無力に違いなし	ネキンの古き	豊中市	樟脳の匂いを囲む形見わけ	たきりがしきり	戚に金持ち	々と以下同	
		乾				乾				井				矢					小					鷲
						喜				上				倉					林					見
		隆				与				白				Ŧi.					-					
		風				志				峰				月					夫					章
鈍行の温もり消えて行く電化	ジャンケンで鋏出す子はヤセぎすで	蝶まだある夢にひとり舞う	生きすぎて白寿の次を聞きまわる	豊中市	袈裟ぬいで僧サザンカの宿で寝る	孫の絵に花より小さい母がいる	ときどきは初恋の夢をみる枕	鳥取県	味方にも敵にもならぬ友がいる	寒い晩屋台に集まる顔馴染み	探梅のしんがりに居て句を拾う	尼崎市	摺り減った靴で見上げるラブホテル	人情の笑顔を包む里のバス	病妻を励ます寒のシクラメン	尼崎市	花道の七三にある落し穴	繕うた言葉の縫目は解けますよ	しぶちんが財布緩める愛の詩	大阪市	五月晴心の狭さ恥じてます	二度観ても同じシーンに泪する	優しさが重荷になってコーヒー館	竹原市
	森			Ξ				太				木				尾				Щ				石
	脇			宅				田				下				宮				原				原
	和			つ、				幸				義				弘				章				淑
	子			つえ子				枝				嗣				治				久				子

行ったきり音沙汰もないラブレター経の中の少女に出会う散歩道に理屈をつけて毎晩飲んでいる。成理屈をつけて毎晩飲んでいる。成理屈をつけて毎晩飲んでいる。	を事夢は無限に空を切る の味料理の冴えを皿に盛る の味料理の冴えを皿に盛る	言い訳も種つき果てた午前様頭上は近いと靴にはげまされてる障子気になる話し声を関の靴をかぞえてお茶を出す	て切れぬ物で混みいたがなない。	描三匹発品テンごの下で生き 似たような苦労の背なを流し合う 以たような苦労の背なを流し合う 足の裏土の匂いを恋しがる 田辺市
大	木	横	小 鶴	染
西	村	山	熊 田	道
文	貴代	為	江 謹	佳
次	子	子	美 爾	明
手土産に川柳一句添えてあり 良し悪しのある生活が詩になり 良し悪しのある生活が詩になり 静岡	い負けて机にバカと書く涙 れからは記憶が消えた千鳥足 隣が一緒で高い肉を買い 和歌山県	電話などしてやるものかとすねている転がった石の行先見届ける 島根県子はじめに小さな真珠のイヤリング 手はじめに小さな真珠のイヤリング	イバルを出し抜いて来た深呼吸のもの提げて元気な祖母が来るをかに生きて花道消えたままたたかに生きて花道消えたままをからのもの提びで元気な祖母が来るがある。	寺合室にエンジーにんと落らている 春覗きピョンと飛び出す蛙の子 ・いきなりに只一行の子の無心 福岡市
市市		(a)		
		· 小 田	並	吉柳
ti	森 I	小	立床	吉 柳 川 沢
市市市	森田三	小田	\$2000 C	

婦人病に効く温泉へ入って来 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	徹底的疑ってみるパズル解く 正直に言えば礫が背にくる 佐賀市 古 川 一 徳無常を知るや知らずや桃の紅	塔の影朧月夜に眠くなり 「京都市 小 林 英 子 茶屋から小さな春を買って来る	うぐいすのお喋りを待つ梅の花 白たびを洗って女が春を待つ 米子市 木 村 富美子第二ハウス海辺に決めて老いている	孝行はたたいただけの父の肩枯れ枝を集めるように社の整理 点 成 人披露宴の刺身も宝船にのる	絵日記に十二の色が交叉する 大切にされれば何故か面はゆい 鳥取県 津 村 八重子 傘寿とは見えぬ踊りの舞扇	ぼそばそと人の噂を話してる
死んでから勲章なんかいるものか 大阪市 堀 口 欣 一春風と共に女の線が出る 大阪市 堀 口 欣 一年前で誓った愛もとうに捨て	師の影が薄れて踏んでしまいそう 手刀を切って情の銭を借り 真向うの野次が唐竹割りで来る	意気投合して父の許しを待っている 意気投合して父の許しを待っている アンテナが光り出したよ地獄耳	鳥取県 鈴 木 ふみ子ラブレター孫めなかなかやってるな一杯の珈琲に負けている答 冗談にしては核心ついてるな	オートバイの僧もたこやき買って去ぬ裸婦の絵がある画廊から逃げ出せぬ絵日記へ大樹を描いて母子家庭	指切りに迷う女の愛らしさ 鳥取県 黒 田 くに子子のプラン親のレールに乗りあぐね 南風ずるいわたしの背を押す	鳥取県 田 村 きみ子

係長どまりで無遅刻無欠勤	ネクタイの時の挨拶別に持つ	方角を言うたらわかる飲み仲間	八尾市 松 下	子の作文夫婦ゲンカをさらけ出し	均等法男子うかうかしておれぬ	クラクション鳴らして父が無事帰る	十和田市 阿 部	名付け親辞典を二冊用意する	おふくろの味を駅弁売っており	子の帰る時間に仕事切り上げる	京都市森川	何と書こじっと見つめる白い紙	天	過去のこと尾鰭をつけて話題にし	富田林市 大 澤	ひとまたぎ出来る地図だが遠い故郷	辛党もチョコが気になるバレンタイン	太平洋に愛さらわれた蝶々さん	ロスアンゼルス市加藤	二次受験孫も私も落ちつけぬ	跳びたいと思う蛙の面がまえ	もの差しを差しても背中ピンとせず	島根県森山	春がすみよくも湖国に生れ来て	釣人がこんなに多いのにあきれ
			蕉								春				Ξ				明				英		
			露				進				子				四子				美				子		
いろいろな事情があって元の姓	愛媛県	古日記夫以外の頭文字	少雪の不満は子等のスキー靴	そっと抱く赤子の重み退院日	新発田市	従順な水で器を選ばない	黄昏や赤い絵に酔う他所の町	やさしさの湖面へ月はふるえてる	米子市	充電をしておしゃべりがまだつづく	目が合ってふたりの約束ちゃんと出来	ダイヤより貴男が光るほうがよい	鳥取県	すらすらと逆夢だった筆運び	どう見てもバックスタイルだけのこと	寒椿やっぱりがまんをしているね	出雲市	七歳の違いが大きく夫は老い	西行庵清水が今もチョロチョロと	沈丁花つい誘われて路地の奥	豊中市	残雪へこびてことさら実が赤い	春風へひねくれたのもいるねぎ坊主	春の風されど男の貌で出る	出雲市
	石				上				小		714		Ш				河				玉				金
	手				鈴木				村				根				原				井				村
					春				て				八				恵				房				青
	武				枝				い子				重				美子				子				湖
	5000								- 15												-				1.74

情でカバーしてあれを乗せてラーゲンのちらしる。	・大十路にて義理チョコ貰い苦笑する・春うらら時計の針もけだるげに・春の靄不動の滝の音伝え・春の靄不動の滝の音伝え	こと許せぬ白いかっスター気どりの顔を	無駄話ときにはビッグなニュース生む季が巡り遠く小さく老父の椅子季が巡り遠く小さく老父の椅子のひとつふたつにだまされぬ。	人も連れている。人とうの事
中	坂	中 久	大	浜
Ш	根	垣 野	田	本
	流	米 野	みゃ	治
楓	水	之 草	きと	幸
万歩計妻があとからついてくる 未熟児が今では嘘のような孫 黒板にはりつけられた紙の雛 黒板にはりつけられた紙の雛	関りに一枚脱ぎ捨て 戦始まる前の予想戦 な亭主の書いた予定 ろそろはしゃぐ花のな	大阪市お揃いの茶碗を買って春の膳蝶番のゆるみへ太い釘を打つまたお逢いする約束が反古となりまたお逢いする約束が反古となり	大阪市谷崎は名前ばかりで読まぬ著書外国へ来たよな気分の苦楽園外国へ来たよな気分の苦楽園の	半分ずつ出し塀建てたよい隣家 シグナルに軽く手をとる白い杖 手のとどく位置良心が呼び止める
島	清	富	吐	田 北
路	水	岡	田	中 川
太	悠貴	ým. á	純	隆竹
良区		子 =	子	積 萌

死につながるスピード苦にせぬ新人類	岡山県 後	居の	万歩計他人を気にしている一人	木彫りの熊強化ガラスの上に置く		涙する娘で盛り上がる卒業式	を呉れた弟先	空晴れて一冬の鬱吸ってくれ		一口が多いばかりに気まずうなり	西瓜切る切れ味のよさ手まで切る	離れたら気の合う嫁の顔になり	岡山県 戸	+	n	山並へ風のたよりを待っている		いよと祖母の	エイズ禍へ話が弾む膝が寄り	呆けまいと何をやっても年は年		いもせず気になる株のNT	を張り大手を振って	大声で孫が呼んでる春の庭	静岡市 久
	安				本				٠.				田								石				保
	à				た				ただ				種								た				き
	さえ				かし				お				子				茜				き				ぬ
胸を張り税申告へ晴れた空	を見れば無心な	安へ正装で行く陽の温み		1 ')	賽銭の音は聞こえるお寺さん	ふるさとを橋桁にした虹の橋		切りをされてみつめる二次試験		ぶくれて孫に頼んだ釘	į	対魔して縁のない好	路地を曲った蜆	位えがシューズの中	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	1	その上に唄もうまくて癪な奴	こりたと思う一	4	ま	け知っている	を刻むリズムで夜が明ける	岡山県	老い二人二合の飯でつつがなし	金婚に思い出多き旅を選る
			킈	í			渡				言	ij			-	*			荒				伏		
			木	t			邊				格	F			涑	Ą			H	1			見		
			カ	2			伊油				3				宿	H			-)			すみ		
			10	e e			注				J					_			3)			n		

ポットの茶なくなる頃に帰って来		寝返りに不吉の予感電話ベル	まろやかな言葉の裏にある打診	新人類五線譜はみ出す戯曲描く	静岡市	ギャンブルの好きな男がもてている	太陽の光で読んで自信もち	嗜好品すべて廃めれば健康体	倉吉市	待つことも仕合せの内ふきのとう	ねぐらから仕事場へゆく部屋一つ	真白いページが続く日記帳	島根県	同情も過ぎれば噂の風に乗り	石橋をたたいて渡って今日があり	雪	岡山県	自動ドア半開で止まる病み上り	酒肴揃えてテレビ独占し	うな丼が食いたいと言う快復期		減反のあおりで出稼ぎ増えていき	店は	安売りは山と積まれた品ぞろい	弘前市
	Ш				安				田				岩				杉				菊				小
	本				本				中				田				本				地				寺
	半				孝				八太				Ξ				伊久				繁				ギホ
	銭				平				朗				和				栄				男				ウ
新潟県	鉄冷えに親父配転妻パート	ただ今の声より先にランドセル	和歌山市	菜の花は菜の花なりに奢らずに	三月に吹雪きびしい風の彩	岡山県	南天の赤引きたてた今朝の雪	鷲の一声ほしい庭の古梅	岡山県	春めいてちらほら個展案内状	幸せは母真ん中にいつもいる	豊中市	セーターの胸のあたりに気の迷い	老いもまた息ふき返す春や春	和歌山県	おすそわけ実家の土のついたまま	泣けるだけ泣いて静かな海に出る	愛媛県	病院の順番とりも顔なじみ	効きません言うても薬また呉れる	吹田市	とりとめのない一日で損をする	やさしさの中に隠れた嘘が洩れ	河内長野市	空びんへいれるめだかが見当らぬ
高			青			後			牧			辻			Ш			八			山			植	
野			枝			安			野			Щ			田			塚			田			村	
不			鉄			江			秀			慶			久			三五			里			喜	
Ξ			治			Ш			古			子			子			土 島			子			代	

ふくらます子の	神経を臍でくくって坐禅する	岡山県	励ます会当確ムードが満ちている	貧乏と思われないよな笑い声	八戸市	善処するとは放っとくことかいな	粗茶ですと出された玉露なじめない	和歌山県	石一つ蹴って別れを言い切ろう	道問えば地道に地図を書いてくれ	岡山県	捨てるにはおしい未練が棚の上	雪掻きの話とぎれてゆくつかれ	兵庫県	のも女	だんじりのときめき偲ぶ城まつり	泉佐野市	坂道が多いと思う娘の団地	不動尊うしろ姿は拝ませぬ	今治市	列のラストでじ	桃咲いて一段明るい床柱	岡山県	当らない予報たよりに今日も出る	年齢の順に朝起きするわが家
		江			島			Ξ			松			円			真			Щ			福		
		П			田			宅			本			増			崎			田			原		
		有			昭						元			貞			浪速			宝			悦		
		朗			治			保			江			子			还子			保			子		
湯豆腐を囲む話は他愛ない	藤井寺市	よろめきの話はずんでもう着いた	消しゴムを丸くへらして恋を書く		机の上に忘れしものは万歩計	春着出来京のお寺の三ヶ日	八尾市	ほどほどという物指しは胸の中	ふりの夢	唐津市	春雨の軒に雫の音を聞く	れた日着	唐津市	代役が台詞忘れた村芝居	再現の出来ぬ見事な珍プレイ	静岡市	貴方との雪解け時計の音も春	笹舟が流れ来るような雪解ける		口車うっかり乗る人乗せる人	文通で愛情交わす嫁と姑	島根県	人さまの立場を立てて引っこめ	歯が一本欠けたぐらいで落ちこむな	島根県
	高			富			椎			原			入			青			船			花			菅
	田			坂			尾			野			江			柳			津			島			田
	美			志			公			常			莊			金			重			1			か
	代子			重			子			善			久夫			吾			信			フ	•		つ子

年度末また又道を掘りたった。	で で で を は で を は に は 誰が に は 誰が	を誘うて今日	気にいってもらった家に生前の約束あって弔辞読生前の約束あって弔辞読	結果から判断され	国民は働き国会は
煮胡りかえむ蘭	かがなか	日 ぎ る 送	言ム むう	るえらいても	が薄くなる
母の味西宮市	大阪市	高尼崎	意地と意地と意地と意地と意地と意地と	人 う 文忘れ 吹田市	広島県
松 上	桝	宮 中	西	西 野	森
尾嶋	本	田 澤	Ш	岡 村	Ш
志 さ	蕗	純 向	えつ	静	抜
保 子	児	一 西	美	豊雄	智
披露宴両家に一人は目立つ人協いの背に今日の風つむじ巻く出勤の背に今日の風つむじ巻く	いかけて追いかけてこころのシルエイエット一日だけでも頑張る気島根県	心をついうっかりの妻がいをついうっかりの妻がいをついうっかりを話す塾が	事故現場カメラはそっと目をふせる春風に富士の雪解け素直なり、同戸開け日課となれば佗しいない。	漬けるだけ今年もなれよ庭の梅 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	すりむいたひざ小僧かくし走り込む走り書き多く語らぬ心知る
船	久ッ 坂	西	佐 谷	池	大
越	谷 本	本	藤	田	エ
-	ま こ と 路	保	美代	*	静
正	と 路	夫	子 清	仙	子

雪解けに一滴ずつの春が来る 静岡市 大 村 美智恵農薬を撒かない妻がマスクつけ で愛を捨てて見合いの嫁になる	インのカモ	の目炎闌が辰)まって島は摘み春の野花を持ち帰り	までを柾目の下駄での薄い匂いが鼻を呼	めらき	峰寺坂のぼる修業の道と知る 島根県 今 川 三津 江歳月が胸を焦がして薄くなり	ンドを着せてはしゃぐ親	聞いたとたんに	ジョギングの朝の大地は冬化粧 岡山県 土 居 ひでの
地図広げ終着駅に身構える もしかして思慕を広げる峠道 岡山県 西山県	Į T	权 市	山寺で化けそうな傘借りて来る行軍で鍛えた父の万歩計	蕗のとう見つけた畔道恋しくて 要る物は身近において老いの冬	トンドの火へ孫の書初め高く舞い久しぶり話尽きない同窓会	県	啓蟄で楽しみふえる庭いじり なトレスがたまると妻は電話かけ	着て脱いでまだ迷ってる母のくせ
大 平	L	П	滝	野	岡	児	和	田
平 田	E	H	花	田	田	玉	田	中
太たい		草	喜	旭	寿	幸	萬	喜
け郎		Λ.	平	恒	美礼	子	里	俊

片言の孫の電話に口ごもり娘の播いた心配の種老母練る	岡山県 三	それぞれに着せてやりたい三姉妹	風走る音を聞いてる道しるべ	吹田市	菜の花と寄りそうように桃の枝	立雛を何枚も画く春の宵	奈良県	大掃除捨て場に迷う不用品	口喧嘩声の大きい方が勝ち	和歌山県	言い訳は矢張り女の嘘が勝ち	ほっとけばとられさりとて追えば逃げ	和歌山市	味方から崩れて行く新チーム	金を追い追いかけられて月日立ち	静岡市	建替えが進んで京も様変り	道譲り泥はねられて田舎道	京都市	病室にいつ迄飛び交う千羽鶴	独酌で誰はばからぬ一人言	大阪市 宁	1=	
	一村			木匠			山			北			三			丹			山 1971			宮一		
				原			村			山			谷田			羽			脇			下		
	美恵			7			有			凡			周			定			正			٢		
	子			絹			佳			太			Ξ			次			之			L		
守りごときめてるけれど守れない	たん生日やっぱりケーキを食べるべし	枚方市	⇒ジュニアの部	満席もまいない一つで空ができ	さまざまな出逢いで人も角がとれ	大阪市	受験校絵馬一枚で収まらず	長寿国の裏は寝たきり痴呆症	奈良市	潮時と去りし職場に未練あり	職を去り期待と裏腹空虚感	大阪市	合格も不合格にも金がいり	救急車されど我が子は家にいる	岸和田市	みくじ凶なのに当った五万円	ビル街の谷間で風が行き止り	大阪市	祈る雪あそばせる雪なかす雪	半額に買う物もなし金もなし	兵庫県	酔った目に鯛焼の涙見た気がし	御無沙汰の上司の名前柳誌で見	奈良市
		_				松			井			渡			Ξ			平			上			米
		宮				岡			上			部			輪			井			月			田
		正				久						+			通			游路			梅			恭
						留						丰												

橘 高 風

選 猫の日を設けましたと良い話 こんにゃくのような男で生き伸びる

寝たきりがお天気博士のファンとなり Ш 遠

和歌山市 後 藤 正 子

砂に足とられて顔は海へ向く 百束の手紙大きな鶴になれ

鳥取県 新 家 完 司

官能はすこやかにあり沈丁花

幸 溶接の火花だ熱い口づけだ

伊丹市

樫

谷

寿

馬

またの日は草木染など着ておんな

何故に春胸のあたりはさむいのに

Ш

花が咲き散り巡礼に出たくなる

富田林市

H

泰

子 合格者同士の母にある嫉妬

発表へ幼きものが手を合せ 羽咋市

宅

3

亭

感性の鋭さ街が研いでくれ 夕暮れの木々が囁く山ことば

藤

劦

雪解けの麦の青さにほっとする 弘前市

花咲かぬ吾が身爛満の花の中 粒の御飯こぼした今朝の罪 藤 井

春

H

くす

寿

美

味噌汁に蕗の薹入れ亡母を恋う

うれしさを瞳からこぼして美しや

鳥取県

土

橋

はるお

少年の凧青空を引くごとし

妻の勘あなたの及ぶことでなし 長寿にも凡妻型と才女型

鳥取県

橋

螢

良いことの来ると信じてむくキャベツ

大阪市

部

さと美

信じれば心安らか雪解水

春雷は心の襞へ鳴り響く

お水取梅に小さい小さい実

坊さんが引導渡した音がした 漬物石か嫁の尻が重たいか

島根県小

砂

白

汀

木々芽吹く私も何かしなければ 新茶つむ亡姑の想いが掌に余る おかめの面酸いも甘いも識りつ 高 橋

千万子

花だん今荒れて本職波に乗る 河内長野市 植

村

花

代

黄砂降る疲れ果てたる色で降る 抱擁の中のもがきは涅槃かな

> 枯 梢 車酔い一度かまってあげたくて

枯れ木にも点景となる自負がある

名古屋市

越

村

音一つしないご近所主婦の昼 堀

芳

子

餌をやる夫へ雀の瞳がきれい コメカミに残るものありまだ無口 田 中 江

ブロンズの少女の胸に初夏の風 原点に戻ると知恵の輪が抜ける

IF.

坊

錆びついた私を誘う春の旅 戸棚から古い心が消えてゆく 米子市 戸 田 鶴

栗 谷 春 子

夕映えにトランペットよ響け今 落日へ長い月日の兄いもと

春は優しく冬は厳しい仏の手 岡山県 松 本 元 江

お祀りの日まで虚ろに伎楽面 H 宝 保

米子市 小 西 雄 17

平和論無芸大食恥とせず

順不同順不同です縄のれん 唐津市 部 四 郎

シベリヤへ白く巨きな花が翔ぶ 藤 甲 吉

大阪市 出 智 子

これしきのことでへこたれない東子 米子市 木 T

燃えさしのくせがとれない絵ろうそく 代

四月馬鹿愛しい人をよろこばす 尼崎市 城 年 代

H 恭 昌

奈良市

56

															97																
	温い絵を描きたくなった喪の女	高槻市 河	18:3	18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 1	1-	後三さい この 芸前市 波		言目の丁ーズ言・音の鳥取県松	用資	情) 1 - *· · · · · · · · · · · · · · · · · ·	to	序题: 产品	次丁花ことしも 選挙ささやかれ	宝塚市 丸		P1)Pミス・・ディリ 吹田市 後		一支一・見ている。これは、原町県・奥	- Park	ブーラミング へなり音は十三つ 高和歌山市 - 福	ti	デージン・引き)育り・メイトル 米子市 川		な)ここのこと、 ************************************	車	アン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	-3	富田林市 片	燃えているつもりが煙ばかり出る	和歌山県 二	絵の中の鼠を狙う老いた猫
		潮	ĺ	居	5	波多野		下	な	#		Ŀ		Ц		藤		谷	す	本		Ŧ		岡		村	椿	岡	3	宅	
		芳		U		五		た		高	i	明		ょ		火		5,		英						静					
		子	-83	ひての)	五楽庵		たつみ		子	ii.	水		よし津		鳥		剆	1	子		より子		日枝子		雄		智恵子		保	
p p	広島県 藤 解 静 虱	何のため握る箸かな物想う	島根界堀江正朗	ウイスキーボンボン稚き恋も苦いもの	西宮市 奥田 みつ子	台本の通りに行かぬわたしの靴	米子市 寺 沢 みど里	弟もこの川幅に賭けさせる	*子市 林 荒 介	手帳の奥に仁義と書いて眼を瞑る	和歌山市 神 平 狂 虎	花見茣座いよいよ母の膝まるし	居耕花	春の雪娘の住む国に負けぬ程	堀良江	側面に廻った敵の靴の音	市 岸 野 あやめ		稔		唐津市 田 口 虹 汀	アフリカに飢えて食待つ子の微笑	大阪市 塩 田 新一郎	自問自答グラスの底のサクランボ	広島市 流 奈美子	核のないワールドオケの「新世界」	静岡市 渥 美 弧 秀	仲人が万年床を上げてくれ	今治市 月 原 宵 明		田辺市 染 道 佳 道
しれるイイ E できましたで	1	島根県神原秀子	ライバルの躓く石を踏んでみる	佐賀市 古 川 一 徳		大阪市 山 田 妙 子	雪解けて雀も春の声で啼く	豊中市 辻 川 慶 子		今治市 渡 辺 伊津志	63	大阪市 亀 井 円 女		守口市森川まれお		寝屋川市 堀 江 光 子		佐賀県 寺 中 三枝子		岡山市 井 上 柳五郎		倉敷市 田 辺 灸 六		益田市 里 本 たかし	ん	羽曳野市 田 中隆 二		寝屋川市 宮尾 あいき			徴兵がないから化粧するのかね
				3550				10		300		~ **		100		*		*		-10						_			3	I.A.	

				桥	言い足りぬ愚痴がまだあり妻も古稀	高明		Ш	
			化		岡山県・池			火に祈る心に春がやってくる	火
					1	森生	上	开	
一放送	ジオ節	発表 5月24日 (日) ラジオ第一放送	差太良	道	1/				我
		ジオセンター』係	子に			ひで	野		
んあいラ	ふわ	NHK大阪放送局。ふれあいラ	米朝	H	脇			昼の部屋飴のあまさにだまされる	星の
-10	43	投句先 大阪市東区馬場町3-			違い知	晶子	脇口	門	
	P		綾珠		芦屋市 竹 上			人情の世界に負けた新人類	人体
	人	(ハゲモニニ可る)				妻子		岡山県 小 :	
		帝刀 5月0 月	文子	田	南		1-	金で済むいとかんたんなことなのに	金
薫風	橘高	課題「姿」選者			ス	治	田昭		
2		ハード川村募集	仙女	田満	豊中市奥			フィルムが有り母を撮りに行く	フィ
		1			17	豆太	井豊	吊玉	
			秀	十千	和歌山市桜井			職安の椅子力瘤もて余し	職会
にごち	ノナコ	松言戴匠穷(,			桂子	武	7	愛媛県 石 手	
1 1 1	プラー	投句先 一丁66 豊中市中核場三丁目11-11	3	収な	米子市 野 坂			新天地鷹の子後を振り向かず	新天
5	1	0				山敏	压	唐津市 久 保	
	J	この先は流れに済って歩こうよ	子	玲	**子市 光 井			あれ以来胸のときめき消えている	あれ
沒	\ \	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			;	子	到 房	高石市 浅 野	
4			子	照	吹田市井上			蟠り話せば長いことながら	蟠り
1 信	加油	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			11/2	代仕男		平田市 久 家	
Í		-	郎	711	福岡市 吉 川			藁屋根は亡父のロマンとして残す	藁屋
1	スー格	一			気分屋の一発だからおもしろい	、え	っや	鳥取県さえき	
		L	=	中忠	笠岡市 松 本				台紙
清	江	第面市 椎			もう少しゆとりをもてと自己叱る	子	夕	米子市 金 山	
		न	登志実		豊中市 上 田		-	めぐり逢い互いの老いを見ぬように	めぐ
理	月	大原町千			御水取火の粉もらいに奈良までも	裕	ПÞ	高知県 曽我部	
E		ライバルが隠し持ってる遠眼鏡	仙吉郎		大阪市 坂 本				ふと
白岭	L	大阪市井			罪全て火の粉と散って春を待ち	悠貴女		岡山県 清 水	j
1			六郎太		西宮市 瀬 尾			趣味一つ増えて友達又増える	趣味
通彦	輪	岸和田市 三			篝火のように燃えたら楽しかろ	さよ子	3	岸和田市 原	
1									

水 煙 抄

前月号から一

智水庵

地獄絵へ描き添えておくクモの糸

きた一筋の「クモの糸」――作者の仏のよう せん。阿鼻叫喚の地獄絵に、極楽から下りて な気持ちが燦然と輝いているからでしょうか。 暗い題材ながら、この句には暗さがありま

ダイエット等とぜいたくすぎる娑婆

ち分かりません。「ぜいたくすぎる」に作者 なることはないのに……。今の女の人の気持 に絶食などして、不自然な、しぼんだ感じに の控え目な警告がうかがえます。 肥えた人は肥えたなりの魅力、それを無理

肥後守使って昔を語り合う

もたちは小刀で鉛筆を削れなくなりました。 守」に作者の年輪が表れています。今の子ど これから句会が始まるのでしょう。

> した佳句。懐旧の情が漂ってきます。 さりげなく、ある日の午後のひとときを点描

妻を怒鳴って独り淋しくなるばかり

す。ご多幸をお祈りします。 が、この世でただ一人の味方は奥さまだけで がなく、つい奥さまに当たられるのでしょう ぐに腹を立て」というのがありました。ご不 自由なおからだで、憤懣の持ってゆきどころ 同じ作者の句に、「ままならねからだです

続編へきれいな夢を蓄える

愛いお孫さんが、きっとおばあちゃんの句集 を編んでくれますよ。 の遠くを見つめる目……。ご安心なさい。可 はきれいな夢を蓄えておこう」おばあちゃん ここまで自分史は書き上げてきた。これから 「あくせくと働き、夫に仕えて、とにかく

豆球も又それなりのショートする

う。「それなりに」と、CMを倣ったところ 作者も毎日そんな経験をされているのでしょ 抗します。もう手がつけられません。きっと がおもしろい。 に入らぬ時は、それこそからだを反らせて反 豆球と侮るなかれ、うちでも一歳の孫が気

カタカナの中で日本語が乱れ

戦前、中学生の頃に「モチコース」という

言葉が流行しました。「勿論」と「オフコー ありませんが、ただこの頃のお笑いタレント です。日本語の乱れは戦後に限ったことでは ス」とをミックスした、得体の知れない言葉 です。二十一世紀にはどうなっているのでし によって、拍車がかけられていることは事実

割り切った顔で小さい方を取り

でしょうか。 何か哀れを催してきます。これが長男の宿命 僧侶のように……。微笑ましい情景ながら、 な方を弟に分けてやります。行ない済ました 幼い兄弟のなかの兄が、分別くさく、

十字路で夫の助言を聞いている

わっています。 やはり頼れるはわが夫。夫婦の情愛がよく伝 ツリとひと言、適切なアドバイスをくれる。 かと迷っている時に、普段は無口な夫が、ポ 十字路に立って、右か、左か、はた又直進

裃を脱ぐと構図が広くなる

とは巧みな表現です。 ります。水府先生の境地。「構図が広くなる クタイを脱ぐと、始めてホッとした気分にな すまじきものは宮仕え。帰宅して背広とネ

女性コーナー THE PERSON AND THE PE 小 出 智 子 選

有名名在在在在在在在在在在在在在在在 No 1/4

3 モテてきたらし ワ が ン き抜くグラス他人の テンポ遅れて妻が笑いだす 10 夫がよく喋り 貌 をし T

現実を離

n

か

妻とお

ほ 3 大阪 津

柳

伸

照にポツンと亡父の

かけ

茶わ

h

さえ

へきやえ

油木

祥

子

林石

瑞

垣

花子

女ひとり 残

猫も家族とし

てくら

堺

河

内

月

7

さよならと書 る余裕もなくて始 10 た日 記 かい 捨ててて て靴を履 あ 3 松原 大阪 北 清 水 久子 康

ŋ

返

いよ 見えにく よとなれ 10 視野 にも ば手を引く 慣 n 孫も 居 3

平凡 我を捨 な風は た簞笥 昨 Ė 」を疑 が隅 K b 置 12 7 あ

余生 か な還 曆 と呼 ぶ白 3 画 布

古屋

藤

#

高

7

大阪

鍛

原

Ŧ.

里

お 助 蔵 一母が指図 お 礼 に詣 に来た枕 る子をつ 7

原

佐

藤

子

h な巣立 0 た部 屋 にポ " ンと か 10 ぐるみ

水 車 かに 福廻を説 12 7 Vi る

ば 7 大地 4) 肥 0 t= 編 b ししか ť 目 をぬ T なうけごたえ L けてゆ 3 < 、若さ

i

たり春の野菜のほろ苦さ

宝

丸

山よし

津

心ぎた

土

壌 鏡

V

0

な花

が咲き

めて日

記 U

が重くなる

和歌

桜 石

芙

佐子

ぼ

で今朝

3

浮きうきと

和歌山 福

永 H 俊 7

とうさん

も見えぬ

桜で飲

む

タン

スに を語

住

みつく

る風

から

抜

悦子 子

もう 天中殺わ 脳 か みそが 針 水に染 少 0 たし 腐ら ま 頰 0 0 x よう たら ŋ 影 to た 小 竹を踏 V 電 小 話 む 64

うて

たく

井寺

田

美

春

羽曳

福 沢

H

洲

Ŧ.

夏

磯 満

道

信じ 生も 画 ta 死も神 像 はばなら 0 バ i " クは まか 2 男が せ 淡 3 た 42 H n むらさきに た縄 0 3: n

> 寝屋川 和

> > 岸

野 出

あ

や

80

細

JII

代

大阪

自

ひと株 物忘ればかり 笑 1 持 羅 ち 漢 寄る同 となり 窓会 申

> 岡山 米子 米子 鳥取 富山 歌

一井八重

恵

思惑がからみ合ってるつ 箱 正 庭に 直を美徳とば 夫婦 0 夢を溜 か り思い めて むじ Va

和歌山 和歌山

森 Ш

てる

手話少 負けとい てあ 通 C げ 笑顔 ると熱 でさようなら 10 茶に替える

七彩 さくら咲 に見 き厨 た錯 0 覚 椅子 を 問 うて の置きどころ Vi る

ぬけ 話が 6 0 背 広 和歌山 鳥取 寺沢 後 驱 津 藤 浦 3]1] 砥代

ど里 正 7

公乃

島根 姬路 岡 日枝子

奥田

みつ

子 子 枝

П

千子

むきに 幸せに さて誰 春です 人間 ボ 出る杭に 生きてい 春 故 14 施え あき者 ラ が来て H 8 ゆ 滅 分 が 唄 を 0 10 0 \$ 史 鏡 n 2 テ 3 草すこう 軒 なる少女を笑う E 生きる てようやく に H ta 語 お せ 0 片 る 大 0 は ラル なる る 招待 曜 は 1 るさとの 2 聞 0 方閉 安も n てんとさまと笑み Vi 右 銀 行 T h \$ な 話 雀 ば にする 手 Vi 0 間 との を 女 iz な 題 U なと亡 な私を越えて てみよう 夜 状がどっ め 指 な に を盛 と日 て許 Va は 嘆 Ĺ 聞 0 かい 悔 輪 盛 10 今だか 春 1 枯 心 母 辛さよ娘 42 短 7 0 63 かい 75 3 を母 n 持 n 母 7 0 ゴ 掛 フラー か は ることば くも 花 ま 111 春 朝 沢 7 17 と来る 卑 0 0 45 か す 下 言 13 と呼 てき 6 0 名 击 0 IlI × n 认 風 言 E L 編 だす IlI D 標 0 15 える きり ば 恥 手 2 1 か n n たり 3 和 寝屋 和歌山 和 羽 青森 歌 歌 米子 大阪 大阪 尼崎 岡 貝 埼玉 大阪 歌山 出雲 电 槻 III 塚 H 寺 坂 柴 矢 町 福 鈴 Ŧ H 木 河 宮 池 茂見よ志子 根 # 春 嘉 高 袁 内 田 JII H 岸 橋 H 瀬 1: 尾 JII 木 原 田 城 本 Ш 数兆代 英壬子 美津枝 寿 あ 紀 みさと 寿 例 T 多 久子 恵子 美子 方子 達子 勝子 芳子 いき 克子 節子 方子 文子 賀 F 裕 理 年 寿

一恵

キ

春 之 0 0 0 0 そ 愛を き 友 n 8 か 6 0 10 ま ば 春 る n 赤 0 火 お 夢 種 を 13 人 を 好 2 ラ

7

12

3

出 来 か 言 10 訳 Ŧi. 分と五 分

大阪 島 島 根 根 原 樋 浦 榊 信 宫 口 辺 原 本 本 か ŋ 静

判定 0 香 n か す か なシ + ツた た to

H シマ子 秀子 博子 紅

のほろ苦さ てい 主婦 守っ 表現 でも する作品です 会に住む私も大きく頷 友人から見たことはないだろうと苗 ほろ苦さはしみじみとした思いを誘うも 的 る。 えされ、 心人には分らないな「ワンテンポ遅れ」 に表現 には子育ての最も大変な時期があって、 てゆける。 姿はそれなりに強い個性を持 いても他人の貌 も思 やりたいことはみんな夢でしかないような、そんな気持を 隙のない の句は、二人きりになってしまった夫婦に、 されている。この場合の「台所」 わずにこっとしました。 大きな愛情だと感じました。 作品になりまし をするグラス。 楽し 7 いてしまう。これだからこそ先祖 400 ことか、 旬 は 男 っている。 女ごころの綾を透明 「みがき抜く」の句 と女 香 耕 0 の花を戴 のでありましょう。 違 「夢ばかり」の句は、 が生きてい 毎日が子供中心に廻 せば いでし 微かながら く」の句 いた。 大地」の句は、 しよう 明 える温か か、 東洋 ます。 伝来の 楚々とした なグラスで 蕗の薹など それ 磨 的 地を い句 43

カ + 雑 544 詠 3 大阪 句 市 毎 生 月 野 10 X H 勝 締 切 南 1 18

小山 出 子 10



相撲と私/黒川紫香

大矢十郎さんのご好意で大相撲大阪場所を大矢十郎さんのご好意で大相撲大阪場所を小路に圧倒されたったが、声援乱れ飛ぶ中を小錦に圧倒されたが、声援乱れ飛ぶ中を小錦に圧倒された。

大関になったばかりの常の花に抱かれたこと

れて北新地のMというお茶屋(貸席)で当時

脚染でもあり母が常の花と同郷なので呼んでれたチャンコ鍋を囲んでの一夜だった。大勢れたチャンコ鍋を囲んでの一夜だった。大勢居る中で私を呼んで「可愛い子だ」と抱いて居る中で私を呼んで「可愛い子だ」と抱いてそれた常の花はその後間もなく綱を張った。大勢作ってよく遊んだし小学校時代小柄な私が二々勝ということで相撲の選手になったと言っ枚腰ということで相撲の選手になったと言っなということで相撲の選手になったと言っない。

勇 み 足/野村太茂津

変わりありません。

・
あみ足賞めてうっちゃりどやされる

一、相手より先に土俵外へ足を出して負けって、相手より先に土俵外へ足を出して負けって、相手より先に土俵外へ落して勝つ。土壇場逆に相手の体を土俵外へ落して勝つ。土壇場逆に相手の体を土俵外へ落して勝つ。土壇場ですが、この勝ちざまが私は嫌いで、黒星でですが、この勝ちざまが私は嫌いで、黒星ですが、この勝ちざまが私は嫌いで、黒星でも勇み足なら拍手してやりたくなります。

所言ります、 たら上下されるときませんで、 私語や態度の紊れを反省させられました。 ないず一礼、そして負けて出ていくときも必ら語を下げて一礼します。 力士たちの挙措態は必ず一礼、そして負けて出ていくときも必終る道場です。 若い力士が土俵場に入るとき

大阪場所で拾った老兵の楽しい勉強でした。新宮の御大、大矢十郎さんに招待された、

やはり本場所/若宮 武雄

大矢十郎さんから、大阪春場所三日目、三 大矢十郎さんから、大阪春場所三日目、三 に甘えることにした。

当日は午後一時半に角力茶屋・天野屋の若内された枡は、十郎さんが自慢されていただ内された枡は、十郎さんが自慢されていただ内された枡は、十郎さんが自慢されていただ内された子さんご夫妻のこまやかな心配りさん・まさ子さんご夫妻のこまやかな心配りや解説などを受けながらの観戦とは、やはりや解説などを受けながらの観戦とは、やはりや解説などを受けながらの観戦とは、やはりなんとも勿体ない感しきり。

異趣をそそられる。
異趣をそそられる。

そして愈、午後四時、中入後の第一戦は

何時までも忘れまい。 頭をつけていい形になりながら、攻めきれず 薩州洋を押しだし。小兵で人気者の寺尾 贔屓の騏麟児が、得意の勇ましい突っぱりで 調子なら、入幕二場所目の勝越しも可能か。 わが和歌山県唯一の幕内力士である栃乃和歌 **栃剣に勝ったとたんの大歓声。若島津は折角** 危気なく若瀬川に寄りきりで快勝、 小錦の体重に押し潰された恰好など、

ている限り、大相撲の人気が上るとも衰えま であろう 魅力と迫力を肌で感じとれる位置にいたから 逞しい男たちの、裸で素手の一発勝負という テレビの勝負を見て気付いたのだが、それも の観戦中に全く覚えなかった、と家に帰って 直しへ緩慢を感じてならないのに、四時間余 土俵の上や周りに、あの魅力と迫力が満ち テレビなどで見る角力だと、三回もの仕切

発勝負に今さら惚れて喜寿の春

思いがけない収穫である。

と信じることができたのは、喜寿の春の

大相撲なにわ春場所/大矢

体軀の向上には目を見張るものがあった。 新築なった体育館の近代設備と、力士

一同の ここなんば府立体育館において開催された。 思えば二十年前、 昭和六十二年三月八日、 昭和四十二年初場所後に 大相撲大阪場所が、

> 十人の力士を引きつれての分家を認められた 当時、大関であった北の富士(現九重)以下 出羽海)が、部屋の後継者として確実となっ 文律があった。だが、後輩横綱佐田の山 たために、 った。出羽海部屋には「分家を許さず」の不 名門出羽海部屋に大事件が持ち上がった。 そして迎えた四十二年大阪場所では、 先代九重親方(千代の山)の独立問題であ 一門からは破門の形となった。 九重は独立を決意したのである。 大関

り、この優勝を機に、十回の優勝は精進の賜 ものがある。千代の山の意地を継いだ北の富 のである。 であり、名横綱として後世にその名を残すも 士の意地であろう。この弟子にしてこの師あ 十両優勝を飾った快挙は、私の記憶に新しい 独立と共に一門の十両力士 "北瀬海"

北の富士の初優勝が実現したのである。

て止まない。 力があり、精神力がある。大鵬の三十二回優 千代の富士には、まだまだ充実した技力、 寄りのポストが確約されている。 撲界における最高の名誉とされ、横綱一代年 千代の富士である。優勝二十四の快挙は、 昭和六十二年三月場所が終ってみると、確 そして、北の富士の意地を継いだのが、 北の湖の二十四回優勝に迫ることを願 横綱 相 現

第 三回 JII 柳 五 部 民文化祭文芸 門作品 募集 大会

宿作 火 未発表作品 各題2句 吉岡

住む 笑顔 「本(ほん)」 雑詠 堀口

尾花 藤田きよし選 森中恵美子選 白風選

応募方法 各題毎に一枚に2句連記、無記名 但し海外よりの応募は無料 一、〇〇〇円(郵便小為替同封 幅6㎝長さ18㎝の白紙使用

〒862 熊本市大江二丁目七— 熊本県立劇場内 国民文化祭 文芸大会 川柳部門事務局

切 文部大臣賞・熊本県知事賞・川 昭和62年7月31日(当日消印有効 但し海外投句は7月31日迄に必着

び発表誌に掲載。全応募者に配布

★入選句及び応募全作品より一句を選

国民文化祭川柳大会

熊本県菊池市 ①入選発表②講評③受賞式 昭和62年10月10日(土)午後一時より 菊池文化会館

所でもあった。九重部屋にもたらした十連覇

かに荒れる春場所ではあったが、理詰めの場

(住所・氏名は封筒に明記

兄弟弟子の愛と根性である。 グッドタイミング 人関北勝海よ、二度目の優勝おめでとう! 決して遇然ではない。師弟の愛、そして ″綱は目前だ″。

綱のいわれ /岩本雀 踊

子

賜杯また今日九重にUターン

麻厳速」の一戦が相撲のはじまりト言われて桜井市忍坂にある」の御代「野見宿禰」と「当 良朝時代から豊作を神に祈るため神前に相撲 が出雲の里で埴輪にする土偶作りをはじめ今 伝えられている垂仁天皇の命により、スクネー らないと言う。「スクネ」は桜井市出雲とも 祀られ、現在も力士たちは朝夕礼拝をおこた 奉納の風習は今日に及んでいる。 の出雲人形になったと伝われている。また奈 いる。勝った「ノミノスクネ」は開祖として 「日本書紀」にある十一代垂仁天皇「御陵は 横綱のいわれは「嵯峨天皇」のとき住吉神 「事記」の伝える「建御雷命」と「建御 国ゆずりの力くらべは別格にして

> 郎次。 呼ばれるようになったという。 ある。以上は「おもしろい話題起源のナゾ」 れるが、いずれも伝説性が強く実在は不明で 初代横綱は明石志賀之助、二代目が綾川 初代両国梶之助という説もあるといわ

乗り。実物はヤッパリ迫力があり錦絵を見て 休み少しガッカリ。 逆鉾を好き。 この日勝名 の正月をさせて頂きました。十郎柳兄ありが いるようで、どの力士の肌色も桜色、よい目 十七日の相撲見物では好きな北天佑が公傷で に上ったことがある。強さは中の上ぐらい。 私も少青年時代は角力が好きで、 よく土俵

相 撲 橘 高 風

られて新装成った府立体育会館へ大阪場所三 かり、渾名は「朝潮」である。女朝潮に見送 ●棧敷でも最前列というのは凄い迫力だ。 日目の場所入り?をする。 ○昨年九月生まれの孫の里衣の顔は頼っぺば

不合理な点が多い。私の相撲への興味は、こ ちびりちびりと傾けていた盃を三度もひっく 肩にも力が入り、知らず知らずに体が傾いて、 く聞き取れる。贔屓が登場すると、こちらの ○相撲界はずい分と改革されたが、それでも

出来なかったと言われる。これよりずばぬけ

にきめて角力をしたが、一人もさわることが にさわったら「はじかみ」の負けとすること こで神社の〆縄を腰に巻き相手の力士がこれ が非常に強く相手になる者がいなかった。そ

た強い力士が〆縄をしめるようになり横綱と

社で行われた相撲で「はじかみ」という力士

組む力士のぶつかる音や息づかいまでが激-

JII 柳文学社30周 記念川柳大会 年

日 吹田市立千里市民センタ 昭和62年6月28日日 向って右側すぐ 阪急千里線南千里駅下車進行方向に)11時開場

席 あいさつ 話

題

福

西田柳宏子選

友田茶の子選 **礒野いさむ氏** 永

H

빞

広瀬 山山本

反省選 良行選

各題2句 締切午後1 清水 斗升選

一、〇〇〇円(昼食、 発表誌共 飲

会

えそうだ。不合理の面白さの一つに、 ●虫眼鏡とは序の口の力士のことを言う。 る大きな朝潮を外掛けで浴びせ倒した。 の不合理と合理性との格闘と調和の味だと言 白二十瓩そこそこの益荒男が百七十瓩を越え 見

久保田以兆選

翠公選

供心に感じたのも、その一挙手一投足に厳し もに交互に東西の大関を張っていた。どちら いけじめがあったせいだろう。双葉山をはじ 江戸前の鳶職の親方のような、粋な風格を子 かというと瘠せ型で色も黒い方であったが、 った。大関の清水川が好きだった。鏡岩とと も相撲観戦の魅力に加えられる。 出していて勢いがある。その器量を見抜くの 士は、序二段や三段目あたりから取り口が傑 わけである。末に大関、 眼では読みづらいので、そのように呼ばれる あげるとはじめて番付に載る。小さい字で肉 習い時代に取るのが前相撲で、ここで成績を)私は子供の時分から関目の国技館へよく通 横綱を張るような力

> 特有の体臭が殆んど無くなってしまった。 囲気とともに軽薄短小の感はまぬがれない。 スピード感に溢れ、動きが派手になり、 取り直したにも拘らず勝負がつかなかった。 せたまま動かず、何度も水が入って取り直し、 子供の好く力士も好んだ。 の体は大きくなったが、相撲自体、桟敷の雰 めとする立浪三羽鳥や、その後の照国など、 稽古をする力士に近づいても、あのお相撲 そんな一番を見た記憶がある。近代相撲は 金華山と筑波嶺との取組で、額と額を合わ 土つけて男を磨く角力取り

奥田白虎編「新版·川 刊記念 JII 柳 柳歳事記 大会

チサンホテル新大阪 昭和62年5月31日(日) 地下鉄御堂筋線西中島南方下車、北出口か 11時開場

日

ギャラリー ら北へ直ぐ西側(電6302-5571 11 " 版 尾谷 **玉野可川人選** 不野由紀子選 清風選

宿

題

7 新

亀山 森中恵美子選 鈴木丙午郎選 恭太選

懇親会

柱衣英大

雄学

から

葉さくら 雑 踏

事前投句は5月20日ハガキ必着 片岡つとむ選

大阪市北区西天満5-6

四、〇〇〇円(新版・川柳歳事記、 念品・軽食呈)

四、〇〇〇円(申込5月20日迄

たしか名寄岩関の句である。

会 お

話

去来川巨城選 栞選

各題2句

締切12時30分

題

欠席投句拝辞 席題なし 記

費

番傘川柳本社

JII 柳 サークル卯の花 三周年記念句会

場 日 高槻市民会館4階402号室 昭和62年5月21日(木)午後一 阪急電車高槻市駅南へ5分

時

題

課

森中恵美子選 小出

三窓選

智子選

風

「句会と選者」 薫風選 紫香選

〈連絡先〉一59 高槻市明野町15 五百円(投句拝辞 原 27

川柳サークル卯 0 花

電0726(71)0886

近畿文字放送作品募集

3句 鈴 5月15日 高 風 選

ガキに明記の上、左記へご投句下さい 大阪市東区谷町2丁目36 近幾文字放送 大手前ウサミビル3階 川柳係

和步数室

題 — 蝶 —

阿萬 萬的

残念です。
五月号発表の課題吟であるので「蝶」としていて言い古された句になってしまったのはたせいか「夜の蝶」の句が半分位もありましたせいか「夜の蝶」の句が半分位もありましたが、作句のときとずれがあり過ぎてみましたが、作句のときとずれがあり過ぎ

翅ひろげ嘘温める夜の蝶 だが夜の蝶には色々と悲しい過去があって 変身の見事さ蝶に過去はない 保護色の二つを持って夜の蝶 夜の蝶いつも毒針かくしもつ 毒を持つ蝶とは知らず戯れる 夜の蝶都会砂漠で蜜に餓え 楽天に見える蝶にもある憂 浮気っぽい蝶で昔を語らない 華やかな蝶が持ってる暗い過去 華やかな蝶ほど過去を語らない 生いたちは知られたくない揚羽蝶 悲しみを嬌声にして夜の蝶 の翅知られたくない過去を持つ 千鶴子 春かつみ 知恵子 勝 T 成 遊 3 美明光 郎 峰夫

> 円高とエイズで暇な夜の蝶 円高で暇もて余す夜の蝶 夜の蝶エイズに追われ何処へか だが夜の街も例のエイズ旋風によっ 夜の蝶昼見りゃいずれも唯の人 夜の蝶淋しさ漂う素顔です 何処で蜜吸うのか悲しい夜の蝶 夜の蝶羽根をたためば二児の母 赤い爪落して蝶は母となる 弟の卒業まではと夜の蝶 子の為に仮面で通す夜の蝶 生きて行く仮面に過ぎぬ夜の蝶 だけど彼女らにも生活があるので 美しさ啼かせてみたい夜の蝶 蝶の過去知らない方がいいだろう 前身を問わない花が蝶は好き 舞う蝶に過去を聞いても喋らな 花街の蝶が怯えるエイズ風 千鶴子 治 ツヤ子 知恵子 7 重 サワ子 昭 八重子 恭 久 耕

いろいろな蝶が乗ってる終電車 持ち札が一つになった雨の 森英恵の蝶もお齢をとりました ファッションに蝶の図柄が溢れてる 夜の蝶のつぎは森英恵さんの…… 夜の翅たためば蝶に色がない) 売れている蝶はマダムの目が光り ネオン街少し疲れた夜の蝶 モチーフの蝶を見事にモリ・ハナエ エプロンもコーヒ茶碗も英恵の蝶 たかし サワ子 千代女 しんじ 博 子 女

> 世界にもはばたく英恵の蝶 蝶ネクタイで飴なめていた七五三) 蝶タイを締めて飴なめ七五三 蝶結び似合う娘に出来た夢 娘の帯を蝶に結んで母嬉し 道行きの舞台に絡む紙の蝶 紙の蝶絡んで舞台は道行きに 乱れ翔ぶ二つの扇子に舞う胡蝶 紙の蝶生きてるように仲が好い たけくらべみどりも蝶になるさだめ 花と蝶男と女がいる様に 蝶よ花よと育って世間にうとくいる) お人好し蝶よ花よと育てられ 新人類蝶よ花よじゃ育たな ついでに蝶でない蝶を少々 丹精に父が育てた胡蝶蘭 義理チョコのリボンもピンクの蝶結び 蝶貝の箱に秘めたる母の影 0 翅 久留美 倫 種 ふさ子 子 子 女

そして彼女らにも……

蝶にあるセンスか地蔵へ来て止まり) 野仏の友達になる揚羽蝶 お地蔵さんの円さに憩う蝶の翅 色あせた麦藁帽子と遊ぶ蝶) ランドセルの子等追っている白 五月晴蝶のリボンで笑む石地蔵 お地蔵さんに憩い預けた蝶の羽根 とかく蝶は神様や地蔵さんがお好きらしく 色あせた日除帽子へ蝶あそび 春の絵の構図に蝶が戯れる) (菜の花をあちこち浮気な蝶覗く) 土堤の蝶無心にかえり孫と追う 過疎の村蝶蝶の唄が忘れられ 故郷の蝶に菜の花寺の鐘 テフテフの頃は澄んでた川や空 初蝶や下校の子等の渦の上 ランドセル揺れる背中に蝶が舞う 花と蝶そしてお陽さま園児の絵 春四月は入学入園そして故郷が懐しくなる 菜の花に蝶の戯れ絵にもなる 春うらら花見の宴を蝶覗く 日溜りに咲いて蝶蝶待ちこがれ 紋白蝶追いつ追われつ春うらら 暖冬異変の陽気に蝶が迷 菜の花や眠そうに舞うつがい蝶 春一番菜の花蝶を待ち切れず 菜の花をあちこちと覗く蝶 菜の花は背伸びしいしい蝶を待つ 菜の花に蝶と遊んだあの頃に 1い蝶) ただし 路 新 テルミ 志 三千子 章春 喜代子 正 7 秀 東遊 る 吉郎 重造 久 太 峰 雲峰 鹿 しかし蝶にもいろいろ事情があっ 傷ついた蝶いとおしむ孫の顔 高層のビルの花壇も蝶は来る ベランダの花へ寄り添うつがい蝶 そして意外な所で見つけた蝶は和やかで この街の空気が嫌いと蝶も言う 春の花蝶蝶にもある好き嫌い 蝶蝶にも都合があって選り好み 蝶蝶も好きずきあって花を選る 傷ついた蝶に愛そそぐ家族中 葬列に似て蝶の屍を運ぶ蟻 霊場に蝶々運ぶ蟻の列 蟻の汗など目もくれず蝶は舞う はかない命なれど蝶蝶花に酔う 花に酔い蝶は静かに地に眠る 死ねば死ね笑えば笑え花と蝶 禅寺へオンヒラヒラと黒揚羽 薄命な蝶花の世界を飛廻り 美しさはかなさ兼ねた蝶が好き 蝶蝶の短命思う昼下り だが美しいもの薄命なものでして。 雑念を払うか蝶は静かなり 蝶蝶が道案内の遍路等 お遍路の疲れを癒してくれる蝶 蝶の軽さに一瞬心和ませる 禅寺へ黒揚羽蝶ばかり来る 連れだって五百羅漢を巡る蝶 連れだって石仏巡る白い 坪の庭にも蝶が来て平和 てか やすお 三津江 はるお 喜 喜与志 有 久 兼治郎 博 悦 太 繁 静 子 子 子子郎 南 子 佳 男 子

> 蝶になる夢青虫はよく食べる 蛾には蛾の誇り蝶にはない強さ スローモーションカメラで追った蝶の羽化 揚羽蝶の羽化に家族の目が揃 牛糞の匂いに酔うて蝶とまる 占いを信じる蝶で低く翔ぶ 高原の花蝶蝶で実を結び) ビルの花壇で舞う蝶の羽根いとおしく) 春待って海峡渡る蝶になる 突然の変異でネオンが好きな蝶 蝶ほどに風に逆らう歳となり 蝶蝶の浮気見つけた花時計 では最後は例によって色々な蝶を。 蝶二匹土堤をもつれて行く負い目 語らいの二人に蝶がつきまとう 花言葉蝶は信じず群がりて 高嶺の花蝶の助けで実を結び お隣の花粉を蝶が置いて行く 匹の蝶に励まされるわたしです 10 美恵子 陽 寿美子 周三 八重子 寿美子 たかし かつみ ただし 靖 美子

陽」5月10日締切(7月号発表)

不思議げに猫が見ている揚羽蝶

題

太

底」6月10日締切(8月号発表) ハガキに5句以内 のがきに5句以内

〒 598 底

泉佐野市中庄

一○八一一九九

はなるべくご遠慮下さい。 (編集部)た新人育成のコーナーです。同人の方の投句た新人育成のコーナーです。同人の方の投句でお願い〉「初歩教室」は初心者を対象として 萬 萬 的 阿 萬 萬 的

— 67 -

課

胸

舟木 与根 選

2

散る

恋を

秘

8

爆

送 いて

かい

用旬

た

ま

たかし 本 様代

真苦胸春 具相が判のバラつ 中を開の のうち 胸中相 00 ラつけたい人に似 判って溶けた胸の 人 分け 明かすと風 けのば悩 があ 惑に逢う を飼った事もあるすぶっている胸の内でも少し廿過ぎるでも少し廿過ぎる間に納めて亡母の旅順に納めて亡母の旅 みも ります 聞 船玉 る胸 V てくる 12 3 だんたく 枯 梢 根不風 暁 代仕男 新一公一 理重 一郎

胸花ス胸忍石胸母胸化拙特爆胸米軽暦トを一仏での三粧さび音す研 字胸にと胸のり悪 打つ言 レスを胸 っそり く花で終った片思いの子が来ても開いてる父の 樹海の中に棲む 悪く の鼓動をじっと聞 に 葉は 打 たたんだ束ね髪 つ初恋 には溜めぬ ピエロの 飾 胸 らぬ方がよ に抱く蕾 胸 落 騒 椿 10 < ぎ画 森脇 ましま 多質子 坊 白渓子 あ清 京正朴 玉 和子 き 芳 17 惠

+

月日マー度嘘い 聞 母 0 顔 12 な 3

4

病

6

で故

郷

0

い女

雀

踊子

の年想た風に持走

風に

う犬損北走ごひ小走春停思ひ六走

走

り 近 たす

寄所

疲れたら 信濃路 に要三度 たら所 を巡る女 所詮は眠る母の胸巡る女の胸の傷がる女の胸の傷間いてやる厚い胸 た 高 白 大 通 子 明 峰 柏 彦

全力を四肢に託して胸借り星一つ流れ不吉な胸さわ胸の内悪魔を飼った事もあ消し壺でくすぶっている胸の胸算用いつでも少し廿過ぎ

な胸さわぎ

借りる

凡悠 蕗

太 泉 児

厚

Va

胸

10

女

は

0

b

騙され

る

ち

t

L

れ連得風

こと胸

造德

胸背い扶百選全星胸消胸胸

举 カー

嘘

なめ

6

の帯きつく

奈美子

娄

U

7

B

胸

に

クルスを一

つ抱く

文

4

1

"

敏

走ひ好

走

1)

た老い

さぬ胸 ぶら

族が

下ってる薄

V

道宵

住子子明

用何

0)

矢

あかして冬を脱ぎ捨てる

胸

借

1)

なっても胸を張って生

7 を 脇 泣 か 0 甘さが見えてくる ず 抜 17 る歳 1 なり IE.

走

る

河 # 庸 佑 選

走るのを止 ってるうちにこだわり溶け始め た走る子に夢 り去るテー きなよう走ら 路坂下 しさを一気に走る春のれて走るないで突走は考えないで突走に走る男の首がなにたる大はお前も淋しい 押さを らに る 0 走まれだ 0 で渡 座 曖 走って神に 男一途 走れと背に走りたい 手に走れ 8 n かい ざして走る若 る女 て走る 走 つなぐ老 虹 たい父の!! る 走る春の で突走 がな に組む十 0 は握ってる 老い で 実走るい がしいか がしいか がしいか 無表情 か げそう 0 か 0 43 す靴 る n 背雪 < あ純文 やめ子平 奈津子 たつみ 法 子 輝 清津子 道 灸 さと美峰 雀踊子 章明 玉 久水

走マ

らラ

h

ば

なら

時

貯

之

ソンの

孤

独 自

時ないの吹

ドラマ

筋書伝

吹き t

溜り

重山雄宵

1) 兵ま

きする

走雑つ

書のず

碗

0

か

E

走 \$

る

Us

7

心

走る

母

0)

先自走青三走ラ何先感読駆雲信走 惚るい回 1 み切 0 時 情 丽 己忌脳 バか れま 嘘 抜 10 3 を がも、 ルら けてみると足 n 視す 脳 が見ているか妻のレ 走 走 0 ず n ても 円 ŧ る i 頭 を馳 n 周 B V 男 急 # 0 走 過 0 だ 悪信 る走る レールで たる K 7 子け 0 去 1+ ま 寒 ま など見など見 た て 運 0 る ついてくる を 消 運がな な V 走る U 走り 走 外はない が 陥 蹴 定 た走 躓年 馬 り出る 野 < 後 む 3 15 次 た 1 公白正智虹太 規不不 一峰坊子汀郎 風路 砥枯素一夢 代梢郎郎酔

鯛

あ不

b

高 須 賀 金 太

選

月け安場 作は を哀 n プ鯛 ライと ٤ を 12 つ横 K. 捨て 思 T う 7 鯛 厄 0 H 自だ買 目 奈美 人 峰 テル 111

さく

とも

祝

0

鯛

目

にま

30

軒太楼

鯛網網

南をに

天観養

のる殖

葉お鯛

白 3 網

ま いれ

橋へ遍を買

春

の風

物

ウ

のわ鯛

悟 章

持鯛

0

B

2 は

る

ŧ

ろず潮

0

架

ま

過

3 1) 舟 3

U

鯛

0

値

段

は

言うとれず

5

んだ

そり

3

お

6

3

h

6

L

12

大きな

鯛

据

3

久留美 子 子 人久々明 に工海腐腐バ上化食小ア ア冷全合当執小正活大市 ,フリン ってない スが行れる なが行れる であるない たってもい 凍快格選念 みででてながへ塩初 0 のへを 0 力 もい行生鯛め カの 鯛 祝 馬 鯛も 0 鯛 < 簣 12 0 は 鹿には 鯛 正芸 が昔の 鯛 嬉い 込 を 言書は鯛 が鯛 L 大 者 つつ 5 させ 大 斎鯛は 凍 0 63 鯛 ٤ 子の のが跳 き ま 0 鲷 顔 反 V) 为 63 て来 い壁釣ね V 7 ŋ してる う 鯛 に渋にれて 親 こころ 披 0 でい居たみ誇の 誇の意露 た港 返 返 3 地 宴 玉本通重 雀静市不 惠棒彦人子 朗二 文洛一高掬雄 德明水々

折大お鯛運

13

0)

鯛隣

もは

と値何明

ぶみ

勝ちいれてい

可芳太

郎住子郎

茶の

潰よ

を石

食べ

40

鯛

かい

0

売ら

白渓子

鯛祝

のが

がん

聞

10

7 之

る る

外

玉

語戦 3 3 n

び

迎

よう桜鯛鯛騙鯛鯛一食あ養旅ピ さ焼 焼筋欲 6 殖馴 れとこれが温生 が煮 ont んとこうと 温生 ま 鯛 た 2 3 ti は鞄 身 食べ をた 旺を外 抱米 盛晒 海中 6 寿へ 10 L n 知の 物鯛網ショな喜寿のて友を訪れる胃の手がが跳れる胃の手が 6 小 ず鯛 É う 術 ね鯛味 き 司負 森脇 宵 ただし 公 2 泉朝美水郎久郎明 和子

海 瀬 老 鯛 峡 戸 残 な 0 架 釣 誇 橋 3 架軸鯛 1) 老 地 0 Vi 人 抗 ŧ 議 13 人 かい 10 0) 聞 鯛 海 えそ 0 かい 白 あ う 負 る 悠 さんと 高 美

仲

良

0

U

とり

走

n

ばみな走

らど

世釣

子

等

走

3

V

1

ル

を

L

かと守る

親

軒

太楼

釣

つる

た気

れ福

な担

0)

箝

t

10

さ粧

Vi

る面

山田

13

橋

か

0

7

B

鯛

10

生

泉

子

7

かく

ta

ば

春

0

女

神

かい

U

た走

る

久

天

秘

めごとを抱

10

て月夜を小

一走りに

高

柳 界 展 望

集録 敏·武庫坊

日時 会場 ★第11回全日本川柳大会 京王プラザホテル札 6月14日(11)10時 五条西七丁目 (事前投句) (札幌市中央区北

35×18の句箋一枚に一句宛 郷愁 西村 高橋 俊平選 在我選 巷風選

申込み・4月30日厳守

会でした。当日の秀句

「好き」

門脇かずお選

ト部方

時の川柳編集室

記入・無記名 投句料千円 封筒に住所氏名を明記 現金書留 (定額小為替か 申込書・江別市文京台40の 彦賞が発表され高橋りき於 ★柳都川柳社6年度鬼原光 全日本川柳大会実行委員会 16藤谷怠民愚方

締切り 丁目1の39新谷町第2ビ 5月10日必着 大阪市南区谷町7 氏が受賞 スプーンゆっくり産む産む 真ん中の仏を狙う含み針 まいを考える

投句先 日本川柳協会大会係あて 20 (当日出句

最優秀作品

松田静佳

★竹原川柳会61年度賞決定

観光・6月13日13時京王プ 表彰・文部大臣奨励賞ほか 会費・二千五百円 念品·発表誌呈 いのち 時 海 各部各題とも2句詠 長沢としを選 (昼食記 孤舟選 優秀作品一席 最優秀作品 素晴らしいおんな 優秀作品 だるま市いつかは

宿泊・京王プラザホテル札 前夜祭・6月13日京王プラ ザホテル札幌会費八千円 の名前も明記のこと 日を明記また同室希望者 前々日、前日の宿泊 願いごとかなった

ものがたり 田中亜弥 小出智子 大漁選

やがておんなはすべてを 許し花になる 小出 智子選

梶川雄次郎選 道子選 ノーモアへ風化を拒む 蟻の列 石原淑子

百まで女彩

でっかいダルマ買う 小6岩本純亚

中1瀬川亜貴子

記念川柳大

ラザホテル札幌集合

費用二千円

席あり参加者一九七名の盛 り十二名外岡山県よりも出 閣にて開催、京阪神地区よ ★第10回鳥取県川柳大会 3月29日倉吉市駅前長生 だろうか十円で

立30周年

少し世間が分って 網ぬけてそれから長い 父が好きになる

許す

日 0 小松原爽介句 時 昭和62年5月10日(日 集 草 根)10時30分開場 発刊 記 念

神戸市立福祉センター5階婦人会館 車北へ徒歩5分 神戸市中央区橋通3丁目4-1 (湊川 西門前) 国鉄神戸駅、 地下鉄高速神戸駅下 風 柳

演 各題2句 切り捨ての文化」 中田 大 野 たつお

指

前川千津子選

語

る

勇

待 芯 事前投句 橘高

片山 天根 大森風来子選 薫風選 巷雨選 夢草選

◎爽介選の兼題「草」のみハガキで 〒62神戸市兵庫区大同町2-3-18 事前投句。締切4月20日左記 小松原爽介謝選

特別課題 酒 (1句

懇親宴 公当日、 回ときせん賞入賞者の表彰を行います。 三、〇〇〇円(当日受付) 知事賞、市長賞ほか(合点12位迄) 一、五〇〇円(記念品·昼食·発表誌呈 61年度時の川柳作家賞並びに第7 欠席投句拝辞 各題締切12時 深日白光子選

主催 時 0) Ш 柳 社

日の冷奴 用美社刊·千七百円 ▽同人・誌友の消息△

花びらもご馳走へのる

花吹雪

★尼緑之助氏(本社参事

前原勝郎 善句選

弓削川柳社賞

スイッチポン馬鹿でも 飯が炊けまする 弓削川柳準賞 小林 夢介 今日生きる手で カーテンをしかと開け

おしゃべりの友情花は 角田 千秋選 散り急ぐ 石垣花子 弓削川柳準賞 森藤 清子 耳遠い母へ幸せだけ話し 裏庭の花は疑い深くなる

山田 止水選 野沢大漁 ★テレホン川柳教室で橘高

ハン半分くれた先輩

特選一位に土橋螢さん入選 年度川柳作品コンクールの

青森県

★工藤甲吉氏(本社参事 賞状と金一封を贈られた。 ら出雲市文化振興賞を受賞 により、出雲市文化協会か 界の振興に尽力された功績 出雲市)は永年に亘り川柳

■同66頁下段 京都行(塔の会)

京都行(高校の同窓会

流氷の溶けて流刑の窓の春

仲どんたく

■4月号20頁上段

▽訂正△

★NHK学園川柳講座の61

小林由多香選

やせていた

光らない息子と 知っていて磨く

湖で売上税が溺れている 片山巷雨

★弓削川柳社61年度各賞 但見石花菜

紋土賞 清水悠貴女

新聞をカタンと受けて どの形も赦してくれる 陽が昇る

どうということのない

随筆風に書きつらねてある。 人情、哀歓、言葉、匂いが 本郷、柴又、上野、浅草の とひと昔前の風景を選び、

見。御大切にお過し下さい。

「ご活躍のご様子誌上で拝

り栞主幹へ

月頃より句会に出られる由

★磯部鈴波氏(東京都)よ

準紋土賞

田中寿美江

小山いわお 白い目 ペン画で最近の下町の風景

▽新刊紹介△

画文集「下町ものがたり」 ★石丸弥平氏(画家·東京

品を紹介した旨掲載。 月から12月にかけて薫風作 「新刊句集鑑賞」で昨年11

九六八七(三)九〇〇〇番の 同地のテレホン川柳教室〇 「噴煙」(熊本市)三月号に 鷲羽川柳会顧問)は、山陽 きました。」 新聞 (3・3) に、氏が造 ★本田恵二朗氏(本社参事·

院を退院、自宅療養中。 三月十五日兵庫医大付属病 ★紀市郁栄氏(西宮市)は ?を随想として発表された。 語された「幸人類」の定義

し雪片づけで、腰や手足の 神的に参りました。雪下ろ 「実兄と娘婿の手術で、精

土居耕花川柳句集

序文/本田恵二朗

/大滝 出雲

春を迎えに行ったまま

暖くなったので元気も出て 節々の痛みにも参りました。

薫風副主幹の「愛染」紹介

やこの

庶民的なユーモアに富む句は、読者をひきつ 念として発刊される。耕花さん独特の暖かい

第一句集「笹の花」につぐ六百句を傘寿記

けずにはおかないでしょう。

是非一冊あなたの書架にお加え下さい。

サョナラをして居る様に腰曲る 八間の種も袋に入れてある

弔いの鉦を迂闊に七拍子

戦争の真似なら止せよ花吹雪 宝塚見て来て足を振ってみる

707 -04 岡山県英田郡大原町笹岡

振替口座 岡山 八一四四〇五 電話〇八六八七(八)二八六五

大原川柳社

本 社 几 月 句

四月七日(火) メンズファッションセンター 午後六十 時

美しい点景が華やかに彩られたが、折悪しく 大阪城をはじめ大川の堤など染井吉野の 月七日、 初夏を思わせる暖かい雨に終日ふり 大阪は桜が満開、 会場の近辺に

こめられた。 のは淋しかった。 賞の選者と受賞者が遠隔地のため欠席された て定席が空席となったこと、また、各地柳増 西尾栞主幹、黒川紫香副理事長が欠席され

ア稀薄説を否定、川柳塔の作品には質の高い らと、先輩戸田古方氏の所説から、ユーモア る楽しみを強調した。 ユーモアの作品の多いことを披瀝する。 柳を分析、女性川柳人の増加によるユーモ 柳話は私が担当した。今野空白氏の近著か 今年発刊される両氏の句集で鑑賞され 高橋千万子両氏の個性あるユーモアの

なお呼名賞は先月をもって廃止した。 今月の月間賞は高田律子氏

(受付―年代・藤子

薫風記

(記録―重人・月子・隆二

人・杜的・射月芳・三十四・章久・作二郎・子・和友・白渓子・萬的・隆二・凡九郎・重 志代・公一・英子・佳秋・淳一・諷云児・芳 晴・洋敏・たつお・柳伸・薫風・柳宏子・登正坊・頂留子・はつ絵・いわゑ・みつ子・勝 鬼遊・庸佑・狸村・三男・太茂津・笛生・幸 白兎・冬葉・文秋・美幸・泰子・美緒・柳影 三・吸江・美房・楓楽・度・規不風・喜風・ 岳人・天笑・月子・求芽・光代・久子・一二 律子・敏・吐来・寿美・小路・寿子・美代子 雀踊子・池田寿美子・満津子・道子・勝美・ 武庫坊・年代・藤子・眉水・白峰

江 П 度 選

父さんの値打ちわかってきた仏間 値打ち物から手放していく三代目 均等法男の値打ちを疑われ すみれたんぽぽ値打を問うたりはしない 値打ちもの他人が言うからそうしとこ 道草をした値打ちならあす解る 陽の目見て男を上げた若王子 風の日の値打ちを問わぬ紙風船 補償金命の値打ちを見積られ 票の時だけ電話かけてくる 三公勝 子幸 男 死

> 野仏の値打ち母には温かい 鈍感な男に値打ち当てられる 短足に着られてミンク値打ち下げ

礼状が値打ちを知らぬ文字で来る ほどほどの値打ちで夫婦生きている うなずいて値打をさげてきた男 他人様がきめた値打は正札で 坂の花屋で仏の花を買う値打ち そのうちに値打ち出るぞとしまい込む 葬列の長さは亡父の値打ちかも 脚光を浴びて値打ちが狂い出す 値打ちなど分らぬ画廊の裾が冷え 値打ちまだ少しあるので別れます 人の値打ちが決まる柩の釘を打つ 指触れる値打ち四月の雪あかり 値打ちのない品物だからまた落とし 女の傘は春の値打ちを持つ寺に 捨て石の値打ちがきっと解る日も ともかくも落款だけで買うて来る 明日になったら値打ちがわかる柿の 無造作に億の値打ちを置く旧家 くたびれたけれど値打ちのあった旅 むらさきの値打がわかる春がすみ 人の値打ち保険屋さんに聞いてみる こんな絵と思うがシャガールというサイン 円の値打ちがわかるから拾う みつ子 雀踊子 たつお 頂留子 雀踊子 郎 的 友 秋

春宵の値打ち知ってるすりガラス 中田 たつお 選

トンネルの向うはきっと花曇り トンネルの中で呼吸を整える トンネルが好きで旅から戻らない トンネルで男引き際考える タイムトンネルを抜けると虫歯抜けていた トンネルを出ると女が喋り出 トンネルを抜けると空に又会える トンネルを抜けると冷えた鉄の町 五里霧中まだトンネルが抜けられぬ トンネルで生きることだけ考える トンネルを出ると自分の道がある 踊り子幻想トンネル深い深い闇 トンネルを三つ越えると遅い春 脱皮しておこうトンネル出るまでに トンネルを抜けると姉に逢う秘密 愛一途タイムトンネル突き抜ける トンネルで積んだ修業が役に立ち トンネルの中で明日を考える 完全主義で長いトンネル抜けられず 逃げ道になるトンネルを掘っている トンネルまたトンネル答がまだ出ない トンネルを抜けると怖い鉄橋が 国鉄でないトンネルに春の雨 貧しくてトンネルつづく夢ばかり トンネルでしばし途切れる車中談 トンネルを抜けると磯の香が満ちる トンネルを抜けると変るアクセント トンネル開通男ばかりの祝い 枚のハガキでトンネルから抜ける 諷云児 満津子 太茂津 冬 芳吐天文和 射月芳 みつ子 岳柳 美代子 雀踊子 武庫坊 勝 郎 人伸 秋 7 房 暗 男

> 両方 本 吐 来 選

トンネル完通緑の風が抜けてゆ 明日の命思う桜のトンネルで トンネルの向こうの雪は母想い トンネルを何度も抜ける卑怯者 トンネルを出たら幼ない日の匂 トンネルをぬけたら春の鬼と逢う 妻のあと押しでトンネルから抜ける < 43 たつお 満津子

中宮老人憩の家

日

時

昭和62年5月24日(日)午前11

時

トンネルの中で転職考える

花のトンネルなら長い方がよい トンネルをいくつ抜けると悟れるか

射月芳

JII

弘生追悼句会

勲章もなくトンネルを掘る父で

トンネルの長さに耐えた父の貨車

作天年寿小郎 笑代美路

お 場

話

題

川口弘生さんを偲んで

電話 (06)953-7841 地下鉄谷町線「千林大宮」下車歩10分

橘高 斉藤三十四選 薫風氏

鬼遊選 智子選 天笑選

Ш

■参加下さる方は5月10日までに左記 生口 、五〇〇円(昼食の用意あり) 各題3句 締切13時 紫香選

吸た文荒白英洋江お秋介峰子敏

席

大阪市生野区中川東一—二—九 吐法 田だ 公

電話06(751)571 9

久た年 子お代

城 北 Ш 柳 会 シーソーの支点に妻の指がある 両方の顔立てるのに顔がいる 両方の言い分聞いたあほらしさ 妻という軍師両方についている

両方に弁護士がつく深い溝 両方の言い分を聞く散髪屋 片寄ったことばかり聞く両の耳 両方が折れて話が弾みだす コーヒーが両方の距離知っていた

英温云児

544

へご連絡下さい。

敵と味方でゴミを集める草野球

罪深い奴両方に気を持たせ

両方共親は反対する離婚 両方に言い分があり杭一つ 妻と母両方たてて痩せている 悔いているのか両方とも静か

-73 -

母と妻どっち立てても逃げ切れず 筋書が狂い両方敵にする 両方に解釈できる公約で 接点は一つ両方お酒好き 酒と菓子両方好きで意気地なし 熟年の両手に花がしおれかけ 名と実を両天秤にかけてみる 虚栄心両方の手でまだ足りぬ 孫の智恵愚問へ両方好きという 厳粛な事実両家の親が折れ 両方に言い分がある犬と猿 両方の息が合ってる命綱 両足を大地につけて試歩の朝 両方の言い分にまだ愛があり 決心を遺すわたしの墨と筆 両方に花を持たせてだまらせる 両方は生き残れない槌の下 両方受験少年この世の賭けを知る 両方に揺れて振り子のマイペース 両成敗などと気軽に第三者 両方共少し抜けてて夢があり 両方を見くらべている女の目 両の手ですくう水から山の春 両方が同じようには減らぬ靴 両方に花持たせたいヤジロベエ みつ子 美 諷云児 射月芳 どんたく 満津子 重 藤 公 満津子 緑和寿律道 荒緑美

友子子子介良房

神様にお酒を供え土を焼く 山焼いて春の思いを強くする

雑草を焼いて若芽の春を待つ 大 路 美 東

> 四柱推命未来の風を焼く祈り もう焼きがなくなって来た父の腕

おふくろの声が聞こえる焼むすび

洋吐岳妻

焼かれても父はこぶしを振り上げん 藁人形を焼きにときどき森へゆく

熟練の魂を焼く柿の色

女上位かデートでお好み焼く男

楽焼の心に触れた春の風 お好み焼きつく押えて別れだな 過去焼いてみても煩悩すてきれず 秋刀魚焼く神も仏も巻き添えに 懺悔する過去は底から焼きつくす

兼題

暴落のニュースをサンマ焼きながら 手を焼いた子に老骨をささえられ 風薫る焼き芋一つふところに 青春との別れ軍旗を焼いた頃 秋なすを焼いて姑の気にさわる 過去を焼く明日の一歩を信じよう 胸高な帯で身を焼く思い断 焼く手紙妻の方にもあるらし 本のマッチで私の殼を焼く

子

善と悪使いこなして金バッジ

こだわればパンまで黒く焦げて にんげんが嫌いで炭を焼いている る たつお笑 和 楽友

> さんの粋が収められています。 になりました。この本には選者の太茂

定価

一、五〇〇

円

壇の14年

(昭和48年~61年) が一

大茂津町の本

野村太茂津選による朝日新聞和歌山川

人子

みつ子

(申込先)

市美園町2-21 送料 二五〇円

善人で骨もきれいに焼けました 焼けていく雲の行方を追う埴輪 するめ焼く拗ねる女を見る如し

しあわせはほどほどがよし目刺焼く 白正杜律道荒柳 頂白正杜律道荒柳狸 留 蜂坊的子子介伸村

諷云児 いわる 九郎

朝日

新聞和歌山川柳壇のあゆみー

太茂津

編

5

111 柳

は

まゆう

れんげ 卵焼以下同文の列に居る 畑の向うに父を焼くけむり

窯出しの壺花びらは焼けて散る てのひらに故郷の空が焼けてゆく ゴミ焼いて老人無欲に慣れて生き 白渓子 介

青空へ冬の絵みんな焼き捨てる 焼肉屋で親のドラマと子のロマン はつ絵 和藤 郎

愛された記憶に遠い焼野原

細胞をいじると神は鬼になる 松 JII 杜 的

度

熔鉱炉冷えてく男の泣き顔で

太茂津

焼くほどに夢が拡がる登り窯

74

ひたすらに歩く細胞の目がきれい 試験管ベビー細胞の恋みのる 細胞はレンズの中でドラマ待つ 単細胞賞めればすぐに走りだす 千手仏春の細胞みな光る 細胞はミクロの敵を迎え打つ 細胞が語ってくれる進化論 細胞も大学へ行く靴の音 七十兆の細胞みんな僕のもの 癌細胞に似てヤーサンの地下組織 単細胞だから喜劇が終わらない 細胞を騙す化粧にかけている 単細胞裏側に手が届かない 哀しみの細胞だけがつきまとう 細胞を壊すお酒を呑んでいる ロツレチハ脳細胞が首を振る 脳細胞猿よりちょっと多いだけ 細胞の輝きほれぼれと見る産湯 孤独なる細胞あすの日へ耐える がん細胞検診結果のうまい酒 脳細胞蛇口がボツボツ錆びて来た 単細胞同士よく食べよく喋り 細胞の気ままで踊る太郎冠者 写経千巻細胞日々にあたらしい 美人画へ細胞すこし若返る 巣細胞だからピエロになり切 票へ細胞がみな動きだす ・細胞らしい答弁嘘がない に古い時計が進むなり n 82

ペンダコの気合はときに人を斬る

杉 鬼

情無用気合へ味方の矢がささる

柳

太茂津 諷云児 脳細胞疑う程のもの忘れ 単細胞な妻でちょくちょく欺される 細胞分裂やがて一人になる戸籍 がん細胞神との対話多くなる うぐいす鳴いて冬の細胞はずみだす 細胞を誰か下さい春の宵 知恵の輪に脳細胞を覗かれる 細胞の温い鷗にそむかれる 細胞をみな閉じ込めて雪が降る がさわいで酒が欲しくなる が変る筈ない親子です へ細胞赤旗立てている

求吐小寿

雀踊子

規不風

ジーンズにTシャツ定年後の気合 マジシャンの気合そろそろ胡麻化そか

壺振りの気合に鬼が乗り移

美耕 7

耕作市

手品師の帽子気合を聞きあきる

気合が抜けてから夫婦うまくゆ 春眠へ母の気合いが届かない

道冬

ロボットに気合をいれている油 薙刀を持つと臍から出る気合 単身赴任気合をかけにきた女

杜和求

的友芽友お

遊 柳宏子

風

岳妻緑道文

子秋的

人子良

JRの気合が少し物足りぬ 王様になると気合が薄くなる 中曽根の気合危ういものに見る 優勝をしてから気合かけられる

気合入ってるなパチンコに行くのかな 重美狸薰

太茂津 武庫坊

気合抜けしたのか妻が寝てしまい 純白のシーツに気合い掛けられる 雄鶏の気合で孵らない卵 春の気合桜がパッと咲いてく ええ女連れて気合を入れにくる 年金のかける気合は知れている 姑さんの気合で家が建ちました 貧しくて猫に気合いを入れて出る 目薬をさして気合を入れている 石庭の教え気合いを受け止める 奥さんが気合を入れている電話 婿殿は時々気合入れられる そばを打つ気合いを雨の木曽で聞く 眼鏡拭く社長に気合いれられる

白渓子

円空仏笑いの底にある気合 ただ一人旗を守っている気合

吐小

たつお 三十四

字野千代にいつも気合を掛けられる 土曜日は妻に気合を入れられる よめはんの気合いがかかる月曜病

エアロビクスママのあきれるほど気合

風呂上りやのに気合を入れにくる

射月芳

敏郎

結婚も離婚も気合い一つです

ママの気合が方角違いに子を進め

かあさんの気合いが怖いおとうさん

男

-75

天月正月

子坊



相談も旅

ゆるみ

13 7

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。 作品は雅号も含めて20字まで。

担当·清水健 司

花嫁が来て俎板の歌を替え

組板が三日乾いて妻の風邪 組板の前で

泣いたりするも

丁を拭い爼板なでている

板が凹んで子宝恵まれず

0

チリ紙交換ラブレターとはつゆ知

らず

今日子

組板に家計隠せぬ日がつづき 組板のリズミカルなボーナス日 マナ板は熱湯かけて陽にあてよう 古爼板たくわん切れば数珠つなぎ 菜を刻むかがんだ母の背がさみ ふくろは組板なしで日はたたず か 健太郎 八惠子 みつる た 柳 火晄

組板が笑う玉ねぎ嫁が泣く

米朝報 ひか平 百合子 越

好きが酒好きを呼ぶうれ

L

Vi H

脇田

柳ささや

板と庖丁切っても切れぬ仲

鉄

相談が長びき燗が冷めてくる 指切りが白いまんまの待ちぼうけ 千羽目の鶴はきれいな白で折る 白壁が重なり合うて城下町 酒程に効けば病の苦労なし

> ちと 隙のない話の裏にある打算 片言が気まずい隙間埋めに 隙のない女が帯を締め直す 隙のない女手綱を離さない 相談に乗れば舟足向きを変え 苦労した涙障子の陰で拭く ひとつぶの涙が苦労を知ってい 青春の手鍋が語る楽隠居 隙もあって女は愛される 来る

祈り深く苦労を愛にすり替える 結婚離婚紙一 サークル檸檬 枚で決められる 松本今日子報 千代女 可法靖

芽を出さぬ種にも刻は流れ去る 愛と憎深さ試したリトマス紙 何と書こじっと見つめる白い 迷うとき陶冶の句あり師の色紙

> 智恵子 三四子

泰

川柳はびきの

田中

早春の鼓動に触れる万歩計 旅ひとり天津栗の紙袋 柳塔唐津支部 久保

正敏報

久仁於

ジョークでは済まぬ急所を刺している 留守番の犬は不満の声で吠え スパイスを効かして女花ざかり 離党して売上税へ抗議する 藁鯛と貶して競の中に居る

あ

電話口腹にはないが美辞麗句 ああうかつ二月は三日も寸足らず 万歩計福引きに出た同期会 喜寿傘寿長生税もかかるだろ 中西兼治郎 虹掬 報

兼治郎 敏郎恒明汀

切符買う幸福駅まで遠い旅

バー

千代子 金之助 エキオ 売上税はんたい魚は群をなす 涅槃図に魚も蛸 地価高騰魚あずかりしらぬこと

子朝 子想して花の万博夢に見る 予想外自民選挙に又負けた 寒ぶりに取っておきなる炭使う 背骨だけ残ってい にらんでるようなメインの活つくり 予想せぬ祭に出合う花の旅 大公望釣られて魚籠は冷凍 ます魚好き

た

しあわせを摑みそこねて今日も昏れ 友釣りの鮎がだんだん痩せてくる ともかくも胎児の指図式早め 栄光を掴んだ男の広い肩 コップ酒肚にあることしゃべり出し 安来節どじょう摑みが芸になり 小器用に小骨をとって秘書止 隆二報 登志実 鬼 いつを

年中無休我が家はみんな風呂が好き 隅谷義 悪戯な眼に耐えてる花の芯 血圧が聞き流すコツ覚えさせ 廃止線ここはわたしの母の駅

留袖の鶴舞いそうな祝い歌 強力な助っ人ほしい鉄の冷え 句をねっているなと思う万歩計 鉄冷えでトンからグラムへ職を替え 梅見酒うめみる刻を見失い 桃割れのまあるく紅く豊後梅 存在を示せばもろに火の粉ふる 満洲子 蛙 子 子

を脱いでも残る今日の悔

み綾光照良文飛為春 つ 子子子子江子鳥子子 美津枝 さと美 子子子江子鳥子子子

76

青春の胸のふくらみテープ切る 切り張りの障子に温い陽がこぼれ とり逃がす獲物がでかい夢の中 リフォームへ何かありそう古だん 悪友の憎い言葉にあるなさけ 親馬鹿と思いつつ娘へ荷づくろい 暖冬へ役者も負ける程着替え 猿山のトップは清く去っていく トップテンくるくる変る歌謡界 着飾った晴着が揃う春の釜 春一番君もあなたも目をさませ 虫眼鏡郷土の力士ここに居る お互いに孫ほめおうて年を取り 駅前に古武士のような梅の鉢 躓いたけれど種火は消してない 増税をなじる火中の栗が爆ぜ ぼけなやと時どき夫婦喧嘩する 宥す気にまだ遠くいる宵の月 花野ゆく旅の終りはゆっくりと 保護色が好きな男で影がない 鉄冷えに企業城下の灯が寒い コーヒーの香り心を開かせる 悪運に負け運命線まで変り 先がけがもう来ています渡り鳥 奢られてフト卑しさが身をよぎる どうしても嘘をつけない母の前 春の音少し気どってやってくる 言が足りずに逃げた日を悔いる 大原川柳社 土居 シメ子 比沙子

春の音符が心乱れて聞きとれぬ 愚痴すてた窓から春の陽が覗く 石橋義 耕花報 やよ みづえ きしこ ゆくよ ダン吉

明り皆つけて吉報待っている

あっさりと断ってから残る悔い 初どまり幸せいっぱい抱いてくる ささやかな吉報妻の酌で酔う 温顔が微笑みかける冬の庭 着ぶくれて不況のニュース聞く炬燵 ぼたん雪夫待つ部屋をあたためて 地を空を汚して恥じぬ文化罪 空似とも知らず他人に声をかけ 帰り待つ土鍋に外はぼたん雪 友の名が又消えてゆく悲しい 何もない父にやっぱりついて来る カレンダー余白へ明日のスケジュー 水劫に花芯は蝶に愛され かくなれば歩ける孫を待つ ル 敏 幸 IE. 悦妻辰理

正直なご夫婦ですと聞きあわせ 睦 こふゆ 喜美子 たけよ

昇

明朗報 あすなろ 耕直 いさむ 寿恵子

背の低いおかげでゼニをよく拾う 不可解な日本語があり老いまどう 駅に立つ悲喜交々の風に逢う 大陸を歩いた足がけつまずき 熟年の柿が摑まる向い風

むらくも川柳句会

敏

村

あっさりとあきらめてから出る笑い ヤス子 はる代 秀 芳 子 朗

寿美報

ねんねこへ逃がれて温い子守唄旅先で亡母のニュースを温う聞 ワープロに指はずませて車椅子

尼崎 Ш 柳 大会

ひでの みさえ

> 愛されている幸せが顔に出る おたがいに譲りあっさり笑い合い 吉川

生きる幸すべて育む母性愛 生かされる幸せはるかな父母の愛 トランプの占い愛を信じてみ 母の愛通じてほしいはなれ鳥 買物で楽しい献立ととのえる

愛情がときには邪魔な子の主張 買物客神さまですとあがめられ

古報にもう 一本をつけて待ち

あっさりと言って笑いごとですみ 八重子 明 ふさえ さくら 節 福保林千義 寿 朗 江 子子蔵里良

٢ ところ ŧ 題 サンシビック尼崎 昭和62年5月17日 阪神尼崎より西へ徒歩3分 (日)午後 紫香選

席題なし 伊奥東田 沢村 森田 作二郎選

白虎選 智章選 牧郎選 栄一

六〇〇円(作品集呈・投句拝辞 、〇〇〇円(希望者 各題2句締切1 静夢選 時半

懇親会費

06(429)4193 北浦牧郎 尼崎川柳同好会

卒業に喜ぶ母と背くらべ

そんな時あっさり断る保証印 卒業へ巣立つ子離れ親も老い

二浪の子吉報うれしい春の風

老いてなお心安らぐ里帰り

-77

雪の夜タクシー 泣かれては困る今夜の泣上戸 すれ違うあれもバーゲン同じ柄 亡命の舟流れ星に励まされ 任されぬ時の流れに杭を打つ やんわりと自己貫いて流されず ご迷惑かしらとバレンタインデ 外国産ここにも顔出す梅の里 流行を追わず我流の色で生き 私の流れを変えた人と添う 国会が空転流れ変るかも ひと筋に燃えて流れる女川 恩少し忘れた犬に嚙みつかれ 草の芽が萌える少年の瞳 芽を吹いた若木が待ってる春の夢 希望の瞳無限へ若い芽が育つ 柳の芽恋も芽を吹く御堂筋 大海をめざしせせらぎ流れてる 落伍した男恩師に背を向ける 宅配便で小さい恩を返してる せめてもの御恩がえしの花手桶 恩返しですと仏像売りに来る ーダーラインちょうど真中へ来た夫婦 一分に春まちどおし受験生 中の鬼は素直に目をつむる 流れに添って日々安泰 の川の流れにすみれぐさ 柳塔まつえ三月例会 し過ぎて事が揉め つんと走り過ぎ が燃える

> 伴 清広

敏

叮紅報 寿義 俊治郎 美 友貢芳 Ш きみえ

> 進学を喜ぶ裏に出る吐息 進学の坂へ努力の松葉杖 進学の多くて財布息喘ぐ

円満に議事が進まぬ売上円満に治める役が酒を買

満に議事が進まぬ売上税

円満といいふらしては嫁 進学へ裏門少し開けてお 螢雪の功進学へ踏む大地 進学にまで親のエゴ顔を出し

V

じめ

美奈子 シメ子 満洲子 はつ子 三千代 美代子 トミ子 シマ子 どの恩も返せず弁当下げて 何度目のうわさ他人の口で聞く 陰口をきく気もないに聞 聞き上手余計なこともしゃべ 花立ての水が溢れる親の恩 三月の風が謝恩の便り呉れ 石塔を撫でるしかない恩返

聞いている方があわてる事故電話 なれそめを聞くとコケシも目を細め 晩酌に満足父のいびき聞 聞いといて良かったこんな儲け 聞くたびにつかみどころのない返事 愚痴聞いてあげるストレス晴れるなら 敏感な刑事が聞いた国訛り 仲よしが離ればなれの志望校 進学をさせたい母がミシン踏む 青春の生甲斐を聞く古希の熱 友の訃報聞いて眠れぬ春の 進学もきまって祖母に知らす孫 予備校が進学ラッパ吹き鳴らす 進学に親子で違う夢の色 口

かされる らせる る 寿 瓜 妻 静 美 子 人 子 翁

論

兄 躾 激 10

佳

句

地

10

選

(前月号から)

桂玄登吾風秀 美 子艸也作子子 正蒼美代仕朗流治男 ノ由満静昭正蒼 日出子 多賀子 雄 笑翠育 ż 郎江惠

騒がれるエイズ出るのも裏通 宴会をこっそり抜けて裏通り

の生家が残る裏通

裏通

n 川柳化粧櫓

明治ののれんまだ残り

決着をつける男の靴のヒモ 美しい女の立読みあてがある 出発進行パンコーヒーの美味 その先を言えば傷つく人がいる 故郷に地酒と親友が待ってく 念に念入れたプランで旅急ぐ 金持ちが尚強欲な事を言 踏切で子守りが過ごす小半 池の底小石の愚痴も聞いてやる n Vi

植村客遊子報 朝 PT 石男季香月山月鷹詩

に木 やな噂に両耳折っているうさぎ 弟子を抜く包丁が痩せてく のない時 が 別 箸 目 間 n を川に水 男 浮 夜 T < 2 1 を刻んでいる夫婦 でなごむ親子です 0 て行 な T 4) ŧ 青年 あ *†*= 先考 る い ij い 絵 雪が 脱 大家 お を遺 皮 え す 正 降 る 3 す る 3 月 八重野 曲 かすみ 白 ん手 敏 生

Ш い 音

2 t

紅丸江吉

亡母に似た手つきへハッと気付く 齢の数嚙めませんよと義歯の私語 息の合う嫁と姑で物足らず ファインダヘインコを入れてシャッター 酔うたのか恐いもの無し千鳥足 四温の間縫うて用を足しておく 切る 時 サワ子 2 遊遊

峰

医学書に埃をのせたままの 茶碗を割ったただそれだけのことでした 掌にすっと納まる茶碗です

かず子

減税をまともに聞いていた一 まともには言えぬ話で茶をにごす 神経がまともでストレスよくたまる まともだと知ってふるえがとまらな

43

留

寿隆楓

美

にっこりと侮辱になれておく野心

度

い紅椿

功 風

坊

福財布五円硬貨に番させる 年金の財布に義理が重すぎる 子の財布大きく見えるお正月 先代が財布ゆずってから呆ける 見栄張った空の財布に笑われる 付き合いの別の財布を見つけられ

万札を積めどなびかぬ井戸茶碗

仲間の愚痴は後で聞く

柳塔きゃらぼく

石垣

花子報

花

客和 みね子子

点滅のネオンへ財布握りしめ 辛口の味が酒豪の舌に合い 食通の舌がうるさい味の店 ふるさとに母あり母の味に酔 五千円かけて美人になるパーマ 小鳥来て今日はうれし

喋ったらアカンお里がすぐわかる 美術館訪ねて心豊かなり

エベッさん帰りはともかく酒にする

素直には礼が言えないへそ曲

血圧はままよ夕餉のコップ酒

永輝

割り箸を静かに割って見合い 暖国の零下を割った寒気団 の座

ライ ライバ

1

バルに一

馬の合う話相手で美味い酒 気まぐれで話相手を連 俺も歳話相手になったげた 南大阪川柳会 れてくる 中川

とも子 純朗

この判でまともになれとぬくい友赤ちゃんの目は母さんに話しかけ まともな相手でないから策を練り直す カマトトになってまともに聞いてはる 何んどでもまた初耳の顔で聞き 茶飲み友達なんていう程枯れてない 落ちのある話まともに聞いて いた 三恵子 新文

てい子

晶時瑞

子子枝み

松風報

竹 千幸和朱佳 鳥 泉

子野萌

滋雀報 松晚 節 菊 風耕

> ライバル ライバ ライバ

富美子

九九郎 信 伸 じいちゃんはしんじゃったからもういない 野心家の胸に浮んだ青写真 我が家にも名士出そうな孫の出来 口答えするのが我が家ふたり居る 酔うた眼に我が家の灯り見落さず 私を縛る鎖がある我が家 川柳たけはら

教室のストーブ言うことを聞かん 気持ちいい宿題をやったあと 春休みまだかまだかとまちどおしい おじいちゃん生きていればたのしいよ

小三晴 美小二昌 之

小四由

小一昌

菁居報 智慧子

しんじ

旅人が離せぬ物にめし茶碗飯わんの今朝の重さを父に問う 生きている限り茶碗をはなされ

> より子 日枝子

まともには言えぬ話を酒がする くず篭にまともな恋が捨てられる

柳宏子

茶碗から逃げたら闇がまっている 疵のある茶碗こわさぬ様にする 冬の旅大事にしよう飯茶碗 日めくりも茶碗の唄も確かめて 茶碗のヒビは他人に口をふさぎます 思い出の数だけ茶碗欠けてゆく うどん屋の茶碗の艶は生き上手 太閤ののんだ茶碗は鍵の中 手ばなせぬままに暮したカケ茶碗 桐箱でこし方語る李の茶碗 長病へわらの布団重ねしく ほのぼのと葱のぬくもり汁茶碗ほめられた茶碗がいつも前へ出る 初釜に亡母の茶碗が彩を添え

> ライバルを蹴落とす為の塾通 いい夢を家族みんなで見る我が ライバルが若くてホホ紅少しさす ライバルと共に私も生き残る ライバルより高い昼めし食べて 黙々と皿を洗っている野心 眠る兎へ亀の野心は燃えてくる 空き腹の男が抱いている野心 撒き餌して部下の野心を聞いてみる 野心家の無口八方に目をくばり バルと握手していた発表日 ルも土俵の鬼の名に恥じぬ ルもライバル意識もっている が評価されてる縄のれん 歩譲っている余裕 V る 芙左女 曲ん手 信綾雅山慶喜春 雀踊子 庸 重 妙 勝 公晴 梢 明佑 人治珠風久三風蘭 風

- 79

暖冬に不気味な予感がつきまとう 掘りさげることはやめとこ窓の月 弥陀の国まあるくなって母と逢 涙雨大地が少しずつぬれる テレホンカード妻はいつでも家にいる 淡いいろ着てみなされと風は春 灯を消すと笑い話がほしくなる うっかりと喋ってしまった後始末 玄関の句もかけかえてうれしい日 もう杖はいらないみ親に手を引かれ 春一番売上税とか攻めてくる ジャンボ機を信じて富士を下に見る ヒヤシンス薫る自問の日がつづく 根を張っていじめに耐えた麦の彩 下の子も学校六畳を明け渡す 明治っ娘まだ生きたさの手術台 強がりを言って孤独に耐えている 若い気を三面鏡が笑ってる 楽隠居人がつぎつぎ来てくれる かけ違うボタンにぼけたなと思う まめなのが取柄金婚迎えたり 幸せはメモいっぱいのカレンダー 歳と共ふるきを思うちぎれ雲 トンネルを抜け切れずいる縄電車 遅刻など出来ぬライバルいる限り 金の要る話へ声が細くなる まったくの音痴がマイク放さな 大当りですと割引券届く 一のない冬を弟ら不満がり つも知らぬ冬の花 V 比呂子 净静山由春房光静喜光 美火久江美枝子佳子頼 ヤスエ 爱千栄静 敬 文笑 蘭房 鬼 輝 牛俊 子惠 恵水子 晴 幸子焼居 E

> どこからか春の匂いと春のいろ手応えがないまま歳が一つ増え 母さんが器用にさばいている手綱 草の根の反核尼は一人坐す オアシスのごとくありたい母なりき 期する事あり赤い靴買いました 煩悩に刺さる小さい棘がある ハネムーン娘はふり向いてはくれぬ の雪ほどには解けぬわだかまり 辞いらぬ小さな島に住んでいる ステスが僕の手相を見てくれ 煙草いらだつ禁煙車 河内 月子報 笹笑臣シの令淑一貞康 ゲば 舟俳子ヨら子子路子子 眉 水

> > 祖母の胸母性であった日の名残り

追突をされて中古車新になり 赤提灯にだまされやすい男たち

小さいが大きな智恵で世を渡る 円高で社長小さく見えてくる また同じとこで間違う母の歌 中古になって出てくる味もあり 質草にならぬ中古を大事

から

い冬で友達風邪をひ

亜

ポケットの

思い違いに気付いていない木偶の首 乳が張る時の女は美しい 運命をかえたあの日のすれ違い 中古品だけでスタートする二人 ためらいもなく提灯に吸い込まれ 江戸っ子の意気浅草の大提灯 提灯のあかりはお伽噺だな 乳しぼる少年恋をしています 釦かけ違ったままの民主主義 お役目の済んだ乳房が重くなる うまずめの乳房を泣かす子守唄 理想とは違う男の子を孕み 提灯でお迎えがくる山のお湯 米粒に刻む器用さ賞められる 月天萬智 岳美泰 幸素柳真

触れる怪しい音が出る

寿美子 頂留子 千万子 笑的子人 子灯影柳晴 房 子 場違いな拍手に役者とちり出し中古車をこよなく愛すケチでなし中古車をこよなく愛すケチでなし路地裏に提灯揺れる地蔵盆 給料日赤提灯が待っている 鬼の面触ってみたいのもおんな 傷口に その事に触れたら親友とは言えぬ 前身に触れればかわす夜の蝶 制服になればファイトの血が燃える 先生のファイトに負けた手術台 還暦へ気だけ若いというファイト 仲人は粋な提灯持ちをする 年の功中古上手に使ってる 触れた世の情に熱きひとしずく 車をこよなく愛すケチでなし

あか里 雑魚死んで初めて温い掌にのるか 仏前に両掌で詫びる親不孝 情ある母の言葉へ触れず去に 票になるならぬ握手で知る候補 釜石の火が消え男の詩が消え 白旗で雇用を守る組合旗 寿へと平沢したたか獄で耐え

民営になって違いを期待する 勘違いばかりしているくすり 駅前の赤提灯に目もくれず

指

おうどんの味が違って住みにく

井上柳五 道甘五半天小か彗り 鮫虎狼 郎報 紀美女 秋 てるよ 新 妻 月銅路 風 女平月銭鳳

堺川柳会

吟草柳中 五 平 風郎建 玉佐加 たけ 護 水恵友

財産もときには不仲の火付役 財産の暖簾が重い屋台骨 巣立つ日のそれから自分の流れも 堕ちて行くながれは早く効かぬ棹 雲の流れ見ている中にねむくなる その時の傷が育てた今日の人 傷心を顔で笑えば深くなる 円高に誘致企業の傷深し ながされる女の古い時刻表 つつましく生きて流れに逆らわぬ 血のながれ見より見真似に握る鑿 流れ星今更燃える恋でなし 老化への流れへせめての万歩計 不器用に流れに添えぬ男船 稚魚放つ川のながれよゆっくりと 傷つけぬ言葉探して過去を問う 一筋に生きた勲章は脚の傷 うらまれている古傷うんでくる 失恋の傷など一晩だけのもの 的外れても心の傷は深かった。 敏感な男も鼻毛が一寸のび 経験が敏感鈍感区別する わらべ唄ながれて里に春が来る 毒針を呑んで男の掌に眠る 敏感と鈍感夫婦馬が合い 一度三度の煮え湯に敏感にもなろう 本気その癖淋しがり屋さん 東大阪川柳同好会 一幸川柳教室 昨日と違う陽が昇る いて口 を閉 桜井 千秀報 柳宏子 雀踊子 頂留子 曲ん手 凡九郎 玉高 千代子 三十四 四報 春恒 桃

美

蘭 明

文脈はないが誠意がこもってる 脈のない話へ望みまだつなぎ 能面の下に隠した不整脈 金脈の鼓動少しも伝わらず 乱脈をしずめに夜の海に出る 今年こそ脈がありそう釣書書く ニューリーダー人脈派閥ままならず 三十年後の財を託した桧苗 Uターン見捨てられない千 守らねば先祖の汗のしみた土地 財産に群がる縄も生きるため 持参金つきのヒップに悩まされ 人相も家相もよいが財がなし 身についた芸財産と世を渡る 等地猫の額が物を言う 用という 財産をくれた公 百合子 千鉄由香子治梨 孝正千 隆育 IF.

風

郎治平吾

ばらばらの心ひとつにした笑顔 陽だまりに鬼が陣取るかくれんぼ 猛犬と知らず幼児は尾を摑み 披露宴夫のスピーチやっと済み 錯覚の愛を指輪からもらう 再会は左の指に見た指輪 指輪には色とりどりの夢がある 指輪には縁なき両手じっと見る 手席で料金メーターばかり見る い子をはらはらとして待つばかり 西宮北口川柳会 奥田みつ子報 小六奈緒子 三千子 千枝子

> 割れない茶碗でストレス捨てる場所がな 事故の日と変らず信号点滅

つくしんぼこの辺事故のあったとこ

指輪から愛が崩れていくはやさ 脈取る手帰れば二児を抱きしめる 指先が生命の息吹き聞き分ける 核心に触れると変わる心電図

智水庵

重

男

ポケットの中で騒いでいる小銭 ぬきんでて仲間はずれになる憂き目 風騒ぐ一人の夜に茶をたてる 団地にも祭ばやしがひびく宵 団地の灯早目に消えて雪つもる 事故係さびしい影がつきまとい マシュマロのお返しが来て春になる 騒ぐのは何時も意気地のない男 飲み仲間にいつの間にやらなってい 仲間にはちゃんと根 旗をふる仲間をさとす 回し済みである 花明 3 V , 1

事故現場あとかたもなく忘れられ 騒音の街のリズムが好きで住み 仲間ばかりで貸切になるバスツアー 騒ぐことも出来ずヘソクリ探してる 子だくさん騒がない子が一人居る 待ちくたびれて食べてしまったチョコレート 別れたくない灯が消えている胸騒ぎ いい仲間いたから余生あたたかい にぎやかに騒いで痛み忘れさす 流のコック家では目刺し焼く 松芳 米正杜園 隆静柳 恵佳 眉美子 秋 水 わる 子子朝坊的歩代 子子影子

好

雪解けて少女に弾むものばかり 出生の秘密を知って血が騒ぐ 母の押す車は事故もなく揺れる この人と決めた歩幅に春の風 寒い息吐いて椿が炎えている 10 切れ 82 河芳 美智子 かすみ 諷云児

ふりかかる事故を不運と言

姑の話 世辞うまい女が火花かくしてる 転んだら叱ってくれるのも仲間 手作りの椅子はかたこと音がする 補聴器を外して騒ぎ切り抜ける 好きな人に記念切手を二枚貼る 前進しか知らぬ時計に引きずられ 師弟愛永久に変わらぬ絆持つ おふだ貼る車どうしの事故現場 ものになる卵と知ってしごいてる 栄転の篩を落ちた顔で呑み 身の程を弁え黒子で徹し切る たとう紙の中で騒いだ形見わけ 茶碗蒸し母とは種が違います 救急車の事故へ救急車も走り 合格を胴上げ落ちたのも混じり 三つほど胴 十年目の団地で何やら役がつき 宿がえの車に猫も乗っている 孫の知恵軽い気持の肩叩き 華やかな事故ですかくも高 責任のない顔が寄る事故現場 運のよい奴で無事故の綱渡り 大往生と言って母への思い断ち 裏切って得た幸せがうずき出 浪花節扇子一本決まる節 ねこ柳芽ぶくと春がうごき出し こ近所の犬が騒いでいる安堵 があるから自分をいじめ抜 磨く廊下に春が射す また初めてのように聞く ぶるいして牡丹散る い円

三枝子 一森枯良山 芳 勝保俊 紀蔵子ブ夫進生梢征久仙 秀

見下ろした峠越ゆれば母の 住み馴れて団地の壁は厚いまま 汐時を見て仲裁の酒 しばらくは団地で車の荷を拡げ 直球のほかに知らないから困る 出世した男が仲間から消える 銀婚の妻助手席で従いてくる 祉国結局税に頼ら が出る

> 太茂津 鬼定

香

遊

はつ絵

日を見るメガネを探す

春うらら

文善勝 平郎美

雄

美正房白天伊千萬一世 幸一子宗樹升子的郎

出稼ぎの父が戻った温い部屋出来合いを買い庖丁と仲たがい 悪縁を笑い合っている夫婦 利息だけ払えばいいんやおまへ 僕以外女ばかりで雛の部屋 故郷の山が答をくれ 菜の花句会 れました 鬼遊報

凡九郎

英

恒

明

頂留子

み江伊美正房白天 一 一 子 美郎幸一子宗樹

陽の当る部屋でハワイのはなしなど 雀柳 美柳 田 子 伸 幸子 美

勝 章 華

足音が消えて淋しさ押しよせる

曲ん手 百合子

悔い一つ女の部屋に置いて来る 日曜祭日利息に休みのない恐さ 結び目の固い縁の糸車

日銭追う僕に利息のない生活 身に覚えあり因縁と諦める さびしくて山彦を呼ぶ登山帽 庖丁を知らぬ夕餉が今日も出る

みつる 露

利息にも困るお金を借りに 男ひとりおんなの部屋に待たされる ドラマならきっと別れる腐れ縁 庖丁を上手に使う妻と居る の当る部屋で悟りに遠くいる 揃え料理はせぬ庖丁

シマ子遊 度

> 笹食うてこんなにうまい肉になる 老妻の料理を試食する日課 ひそひそと話は出来ぬ遠 考えの甘さ結果が指摘 今朝の肌少し荒れてる二日酔 言がありそう 0 の愛は素直に花受ける 母 妻の背が する 動く H Vi

三拍子揃うているのに婿が来ず 借り傘をほしちっぽけな借りが 中年の恋はソバ屋で待ち合わせ 人憎く 足音に想いを残して雪女 人生の花道にある石つぶて 点滴の中で逢いたい人が来た 日めくりがたまったままに風邪 ポケットに輪ゴムがたまる割烹着 念ずればきっと逢えると思うチョコ 夜はしんしんと雪が積む の床

強引に奪った椅子にあるしこり 最後まで聞けばお金のいる話 げんか過ぎて互いに残る悔い 静岡市川柳塔同好会

射月芳

喜律

年金があるから長生き頼まれる 風に乗れこれが最後の応援歌 身勝手な頼み一升瓶と来る 愛される心が歳を忘れさせ 酒たばこ止めよと古稀の心電 布から舞い出る札の四月風 イズ禍へ話が弾む膝が寄り あって貴男好みの妻でいる

僕川報 孝定紀代志 平次志 弧 秀

雀踊子 寿美子 登美也 きみえ 多質 弘早雄 独花 女峰 朗 仙 和光子童 苗 17

-82

いきなりにただ一行の子の無心 夫婦仲見せたくて行く初詣 親切が崩れてお隣遠くなる 人居は男の客も帰さない いもせず気になる株のNTT

早熟な女は深い傷を持つ 札の皺のばして自販の切符買う 渡辺 善句報 僕喜庚静かみ 円平郎代ずつ

栄転の椅子も何時かは夢となる 枯野遠くトランペットを吹くひとり 車 朗

銀嶺に彩とりどりの銭が舞う

青春は山に挑んで妥協せず

美由紀 はるお 螢 風 女

人の世はゲーム近道遠いみち

遠い日の夢は枕を転げ落ち 三世代住んで明るい語が弾み 富士山を父母とも思う孤児の胸

愛情の不足をダイヤでカバ 自制心帯と一緒にとける夜

尼崎いくしま川柳会

遠くいても母の似顔絵は書ける

票のいる日が遠縁を掘りおこし 陽炎の向うに誰か待っている

星の山花いちもんめ忘れない どうしてか敵の打球は遠く飛ぶ 遠い人見すぎて近く忘れてた

抱きしめて下さい遠い人に言う 分け入った山にわたしの井戸を掘る 栄転とおだて追い出すこともある 文荒 みなと

ゆり子 石花菜 亜 御

ロボットが慣れた手つきでする作業

会うまでの空想をする花時計 少年の部屋空想が詰まってる 少年の空想紙ヒコーキに乗る 水平線のかなたに空想湧いて来る 空想をポケツにためてひとり旅 空想へ思いがけない人あたり 空想の同じ絵をもつ女たち

かず子

白渓子

慣れすぎて捻子の利かない古時計

れてる作業衣僕の顔である

与作は山に生れて山で死ぬつもり 遠い目をしたライオンの哲学者

遠くから見ると満更でない彼女

無縁ぼとけがいて山を眠らせぬ 栄転の椅子にもあった隠し針

歳月を遠景におく大時計

遠からず親爺の物は俺のもの 人も芽も明るい方へ貌を出す 栄転の椅子についてる裏ばなし

どこまでが程々なのか酔いつぶれ 後添いの若さへ少しわだかまり その溝を越えたらと思う夢一つ じっとして居れぬ若さをうらやまれ

助産婦の先ず目が走る指の数 快方に向うベッドの朗らかさ 足組んだヒールに紫煙からみつき する アヤ子 康 芳 仙 宵俊 緑 進

逆光の涙見逃すまいとする

やがて咲く約束がある庭のバラ ボケの花テレビの上で威張ってる 上曲 佳秋報 玉晴良山静 定保 いわる 夢

水仙が咲く古里がある自慢

正

また来てね孫と指切りして別れ 電話口声聞くだけで満足し 来客へしばし喧嘩は休戦中

北風に慣らされ花も化粧する

独秋

お 女

旬

遠い国へ行きたいのなら西へ行け 熊本川柳会

芳仙報 幸照

総理よりましな男で嘘つかぬ

あれこれと鏡を変えて売れ残る 年金のリズムに馴れて来た生活 貧しさに慣れた少女のきれいな瞳 賭け将棋慣れた手つきの王手飛車 後朝の別れいつもの手を振って

春一かみ伊園嘉伊牧 すち三 子郎み子郎歩矩升郎

卒論へ林芙美子が生きている

伊佐美

寒牡丹男を軽く見ぬように ぽかぽかと春愁の部屋音もなし 疑いをもたない妻を欺せない

妻の座に卒業がない割烹着 老夫婦無駄話もよし陽のぬくさ 好きやから飽きもしないで喧嘩する 習うより慣れる事から身に覚え ホステスに区分けされている名刺

と 紫 萬 的

諷云児

年春

駅前の煙草屋がありふるさとよ よく喋るオームが近所に越して来た

久世川柳クラブ

髪染めて額の皺を持て余し 暖冬に春を見つけた蕗のとう 老いたれどまだまだ歩む道がある 大嘘へ騙されているのも平和 だんだんと歯抜けの多い日記帳 針供養妻の涙が浮いてくる 健康を褒めて成績にはふれず 過保護からこんな勝手な子に育て プライドが高過ぎ足元よく見えず 保 つゆ草 虞 つた子

IE

知代子 あき子 禅 照 伊久 山 栄 さわえ

吟平報 はつ絵

女的

83

d

杜

明治もう遠く余禄の道に出る ヒヤシンス嬉しい春に顔を出し 倖せは叱ってくれる夫が居り 切られたら落ちるザイルに身をたくし 素人の鋏大事な枝を切る 手切金取れと近所が知恵をつけ 切り捨てた枝の蕾もふくらんで 縁切って帰った娘売れもせず 回転がよすぎ頭も切れすぎる 自画像を飾る貴方の色を撰る 玉を打つ音が炬燵の友を呼ぶ 老齢をゲートボー ステックを握る老婆の健康美 恵まれた環境今日もゲート族 遊びでも勝負へ厳しい監督さん ゲートボール潑剌として長寿国 顔を見に帰ったと言う娘目もつるみ まだ役に立っていますと独り決め 亀さんに負けてもよいと寝正月 裏表こんがり焼けた餅の味 三猿の主義にならって日を送り 隠居部屋頼り頼られ今日を生き 神仏頼ることしかしてやれず 土地ブーム田舎の田畑口惜しがり まあまあと言葉を切って仲に入り ゲート行く祖母の足どり宙に浮く のいた料理に困る嫁の留守 い兎箱の世界で月を見る が過ぎて無口の日が続き 久世川柳クラブ 計報放送眠れぬ夜 ルで堰き止める 吟平報 邦半干吟種英雅素山光志定藤江 代 人仙女平子峰紅楽人水重山江山 つ種勝吟 ゆ 草子子平 知代子 伊久栄 千代女 さわえ 秀 紅

古里に昔のままで梅が咲き 手造りの亡妻の残した梅が咲き 吾が娘にも白髪が見えて叱られず田舎味噌届いて里のある誇り 父ちゃんの背中に苦労の跡がある 老いのしわ刻んだ苦労長過ぎた 世の中の苦労の味はまず卒業 雑草の敵は人間だと思う 窓明けて春の雑音聞いている 雑音が耳に入らぬ不安感 悪い夢薬人形に銃構え 豆まきの鬼でもめてる幼稚園 輸入豆で日本の鬼が逃げますか 明と暗みんな知ってる豆の出来 Ⅲ盛りの豆を追うてる著の先 寒い夜は湯豆腐家族囲む鍋 アパートの暮らしを祝う豆内裏 病床へ見舞いに活けた梅の花 菅公も匂いを待った梅の花 白梅の白さ守って寡婦一人 やすらげば一句ひねってみたくなる 子を堕す話が続く傘の雪 何事も任せられない苦労性 嫁にやればやったで妻の苦労性 責任のない雑音が多すぎる 人形がひとり砂場で泣いて ゼンマイが切れて人形寝てばかり 春の香りを運ぶ蕗のとう わくちゃになって梅干し役に立 が弱い男の苦労性 尼崎をはま川柳会 いる ち

佳 保 一 定禅 弘、 貞 峰 男

夢之助 いわを郎 あ 山 照 静 き 子 人 山 香 ふさえ 武庫坊 寅之助 十四郎 た子 治

手造りの椅子はカタコト音がする神様はお留守でしたか願い事相合傘遠廻りしてずぶ濡れに

亡き妻を今でも美人だと思う

有頂天になると吹矢に狙われる

眠れぬ夜ジキルとハイドが喧嘩するさまざまな出逢いで人も角が取れ もどり寒毛皮が出番うれしがり 喝采を浴びて嘘とは言い出 三寒へ四温待つ日の卵酒 信楽焼狸も受験に一役買 蕗のとう見付けた畔道恋しくて 新人類義理の垣根を越えて行く 受け売りの話が大輪咲かす日も 子から子へ聞かせる母の子守歌 潮時を去りし職場も未練あり 定年後悠々自適は死語となり ひな祭りミニの人形大はやり 風花に顔なぶらせて京歩く 父の様に敬慕はしても叔父は叔父 エイズとは品行迄も疑われ 番の敵が私の傍にいる いだけ残して通る石焼き芋 城北川柳会

耳掻きの順奪い合う母の膝 景観は流氷昆布は泣いてます 立雛を何枚も画く春の宵 走り書多く語らぬ心知る し父母へ想いは走る淡路島 ネックレスやせた胸にぶら下り 大空を迦陵頻伽と共に去り

神夏磯道子報 倫久悟達 留 子美郎子 正有志ちえ 之佳保子 テルミ 晃新綾頼倫 悟達公 ふ白秀 敏 炉 亀 良江 世郎珠 み峰夫 子香征美み吉

御飯時見てるテレビも飯を食べ 青春のドラマを綴る河川 親同士テストの様な初対面 水槽の鯛は生死を知らぬまま 走馬灯会いたい人に逢えなくて の中みんな身仕度春の音 の孤児には遠い母の胸 一の指から寒さ遠ざかる

旅衣木曽路まつやまチューリッヒ 四月馬鹿騙しきれない顔がある シチュー鍋じっくり煮込む母の味 空腹が過ぎると善を見失う 山下みつる報

静純

歩

押釦コラ人間を操るな 写経するギャルの姿や西の京 西陽でも射すだけましと家主い 癌封じ行きも帰りも酒の旅 暖冬の今年政治は寒う聞く 背伸びしただけ敵が増えてくる 子供部屋主義も主張もすこしある V 凡九郎 希久志 与呂志 重

買い占めた田舎をブルは容赦なく 店 もとみ 遊 三千雄 比呂志 可 平

初夢に舞い込む福に開く道

夫婦道泣いて笑って我慢して

廃線の彼方に田舎埋れる 善人に又出会ってる田舎道

幾山河越えて花咲く夫婦道

我が道を通して人生強く生き 酔い過ぎていても道知るママの 雑草の父が咲かせた道の花 灯台は闇夜の船の道しるべ

> 道の奥極めた芸のしぶい味 子が孫がこの王道をきっと来る 人生譜奏でロマンの道を追う 右顧左眄すまい天からもろた道 初物を食べて長生きするつもり

下宿屋の窓を和ます春の雪 墓参する妻の手桶に春の雪 春雪にとまどいがある母の背 川柳わかやま

華やいだ話ほしくてケーキ買う チーズケーキ女伏目で聞き上手 負けた日の傷慰める春の雪 ケーキ屋の前を素通りさす脂肪 おしゃべりなケーキが揃う雛の ケーキ皿磨く愛とは縁とは 春の雪老いにも淡い希望湧く 美しく輝き消える春の雪

洗い場でラーメン鉢の愚痴を聞く 鉢合わせ避けてライバル向きを変え 金魚鉢短い命が透きとおり 鉢植の花の言葉にある主張 老梅の意地は鉢でもしゃんと生き ケーキカットへもう歯車になり切っ ケーキ切るナイフが謀反考える ケーキ焼く小さな倖せ見つけたく 7 稚紀久子 雀踊子 凡武寿九郎雄子

佗びしさの余生を埋める鉢の数 台所ご機嫌斜めな鉢の音 盆栽は野山の木々へ憧れる 草餅を盛る菓子鉢に亡母の唄 ぬかるみの日もありました夫婦道限りなき道と思えどなお学ぶ

本蔭棒

三男報 みつる 敏

ふ右正市静山文 子近行郎子々子

太茂津 紀美女

的 立ち飲みで目刺しが旨いコップ酒 コップ酒友と黙って飲んでいる 石段の下から拝む老いの足 おしまれる時間背中に夕暮れる 旅立ちの二人へ送る言葉撰る

登志代 喜寿の年平穏にある春炬燵 どの絵馬の願い聞こうか神迷う けったいな奴と気が合うコップ酒

人事課で首のすげ替えしてる春 やっと来たチラホラ名所の梅便 夜の街妻に内緒の店がある 趣味一つ増えて友達又増える パスポート友がエイズを問い 大阪の夜は笑いの中にある ポシェットの中に思い出つめておく 枚をぬいで畑うつ冬日 年飾った髭に誓わされ

さよ子 ゆづる 佳狸

卒業のない人生をひた走る 卒業証父の遺影と酌み交わす 卒業は二の次歌ってばかり 卒業式また分校は減ったまま 卒業式父の荷物が一つ減る 卒業証書軽すぎる

柳宏子

子子

誤字当て字これで大学出たという 卒業の背なに期待の荷が重 卒業の美酒に酔うてる飢 卒業の日も正確な時計台 卒業アルバムあの子も逝った噂聞く 岸和田川柳会 えている いる

正緑照光栄美子良子代子

子良子代

門灯が一人の帰りを待ってい る 武助報 寿美子

三枝子

男

ダン吉 彦晴

浪速子 圭 通

に来る

-85

加代子

U

ひとり まだ暗 後からの勇気は皆んな持っている 出発はしたが戻るに道がない 友達が大ぜい人生ぬくい道 ボケのない長生きの家系信じよう 耐えて住む暮しへ温い冬のバラ 北漁港はためくだけの大漁旗 悔しさは思わず土俵叩く腕 サクラサク報らせ酔わずにいられるか 親の血をそのまま勇気なかりけり 栄転の出発白い目も混じり 片腕を捧げて悔いているいくさ 酔いどれの見本がずらり終電車 勇気ある父ゴキブリが怖いのだ 履きなれた靴で出発することだ 安心出来る腕に抱かれて子が眠り 酔うたふりその一言が聞きたくて 倫ならぬドラマに酔っているひとり 細腕で育てた子供と墓洗う 自分には負けぬ勇気がほしくなり 出発も終点もない暮し向き 腕のあるお人やと他人様が言う 母今日は少し酔うてるよく喋る 勇気出しエイズの検査恐れずに 出発へ洗濯ものは生乾き 腕相撲負けてくれたと子が語る 百年の恋醒めた女の酔っぱらい 脱サラをするか勇気の出しどころ れてから酔いがまわった街の辻 聴く夜のワルツも夢の中 つなぎ川柳会 い出発ローカル線に住み 小路報 頂好史文博 留子子好秋子 富志子 あお 花喜凡萬東素国代治郎的雲灯公 操 白光子 希久志 甘 凡子 子好秋子治

> これ以上飲ませわたしをどうするの 出発点に大きな白い画布を置く 西成で朝から酔うた人に逢う 出発へ昨日の雨が止んでいる さっと脱ぐのも華麗なる勇気 精一杯送る笑顔の朝の靴 嫁はんを叩く勇気がありますか 並々の腕ではなさそう優しい瞳 酔っぱらう度に友達減って行く 末席の勇気しらふでものをいう 0 菜切包丁一本を研ぐ腕まくり ファスナーが下りてますよと言う勇気 バラ色の旗を出発点で振る 悪を討つ正義の腕は細かった 酔うた振りしてソロバンはしかと持つ 勇気百倍妻も後押ししてくれ からの出発男の顔になる っぷし強くていつも輪の外に

ゆっくりと朝寝したいに孫騒ぎ 奉仕する老いの額に光る汗 性懲りもなく腕自慢してる酒 の愛これに尽きたる強さなし

別れても次の苦労が待っている 負けそうな心を支える妻がいる ザアマスも腹の立つ時河内弁 流し雛女の業も捨てにゆく 公園で知り合いになる乳母車

志つ吸

80

ナル茂子

ふ和

P

彩

初美で庄敦葉 で太 代佐お郎子子

冬節葉子 浩一郎 雀踊子 千代三 子 お白 ねこ 日光を含みてもたぐ蕗の薹 力尽きランナーゴールへ倒れ込み 寸法の合わぬ喪服の貸し 粗品には弱い主婦の長い列 悪人の人権ばかり大事がり 神様のジョークと思う別れ チョコレート売る程持って来た人気 つまずいた石にも齢を知らされる の火種は尽きず山 柳きらきら光り春を呼ぶ 効いても皺までは

葉治 新妻は青いセロリー胸に抱き嫁が呉れた絨緞の温み冬座敷嫁が呉れた絨緞の温み冬座敷 ひっそりと受験日終えたか百度石 お名残りが尽きず一と駅歩く 耳すます茶の間へ春の音だより 運賃をおぼえた頃に又値上げ 妻の座も夫の座にもある絆

和子報 小柳鬼外楓柳糸信 宏中遊吉楽子葉治 ときお きよし 道 退院も 掘り下げて古代の謎はまだ尽きぬ トンネルを抜けると光る海が見え 妻よ妻人のほろびの哀しさよ 間近に見えて梅便り

かな女 洋 岩礁でしぶきを浴びて光る竿 手鏡の 中学生キラキラ光る金釦 アトリエの斜光に浮かぶ裸婦の 宝石の冷たい光にある魅力 スカートが過去の寸法無理につ かずき松の木の間に光る星 中に自惚れしまい込む

像

M寸に嫌われそうな胴廻り キャンドルを灯して語る未来図を

> う 重末須正治正秋 め樹一美枝子人園心み

衣装

の日

みのる

手づくりのパイプをそっと夫の棺 手づくりの人形に夢をかたりかけ 手づくりの遺作となった父の杖年寄りの知恵が生きてた竹とん バタバタと暮らして今日は小正月いつか読んだクレオパトラの睡眠法 老夫婦だけで二階はしめたまま 寺田屋の二階が呼んだ竜馬像 手づくりのネクタイ妻が問いつめる 陽炎の命のなかの迷い蝶 花ぐもり仁王も酒がほしくなる 阿修羅像のほてりへ窓にボケの花 恋仇勿体なくも妻死なし 喪服から割烹着に変えた後始末 雨有情交差点からわかれよう 終電が寒さ残して発車する 五十鈴川永久の流れを信じたい 回り道ばかり歩いた父の靴 孫が来て我が家の地図を塗り替える 古時計振り子を止めぬネジを巻く おみわたり冬は巧みな仕掛 酒好きな人と別れてにしんそば つつましく貧しく生きる小豆粥 つららつらつら円高不況たれさがる お日様も黄色く見える二日酔 万物の眠りをさまし春光る 「曜大工犬も居心地たしかめる」 坪の庭にも芽吹く音を聞く へ時を得たよに祖母喋る の知恵が生きてた竹とんぼ をせっせと編んで恋らし 人 小 河 松 杜的報 英 芳 みつ子 いわゑ代 武庫坊 芳 諷和孝達敏白 静 智 笛 和秀 巨紅 花 杜 云児 子珠 詩陽 的 子伸 分割をしてもレールは継いだまま ジャガいもの芽がのび夫婦別居中 思慕だけが車椅子から歩き出す 新幹線東寺の塔は向きかえる 村はずれここにも塔のある大和 歩いても歩いても男は歩幅崩せない 名を捨てて歩くと開く視野無限 振り向けば妻と歩いた半世紀 答出ぬままにとに角歩いてる 塔見上げては人が去り人が来る 塔の見える所へ母が来て坐る お疲れさん塔が迎えてくれる京 五重の塔父の眼鏡にある安堵 ひめゆりの塔に乙女の反戦歌 妻の留守畳ヒンヤリ冷たくて 胡座かく畳に好きな豆腐鍋 妻の茶のうまさがわかる古畳青畳ローンの匂いもする新居 手裏剣のように畳針突き刺され 帰国して畳に味噌汁だけで良 クレオンで描いた小人と森歩く 真っ直ぐに歩けば税金追ってくる 青畳の香も清々し障子貼る ごろ寝する倖せ畳のあるくらし 喜寿の宴青い畳に父が坐す ふたりきりになり二階は使わない 駅を歩いて幸せ嚙みしめる が二階を抜ける港宿 った時だけ階段降りてくる 中もくせい川柳会 ね畳こげたのも昔 田中 40 福 正坊報 英 太茂津 はつ絵 百合子 よ志子 雀踊子 シマ子 よし津 三江紅三大 て 岳実 笑 白渓子 紫佳 る 男 穂 男 香秋 月 年齢を感じさせない新鮮さ アメリカのご都合だけでは生きられず はじらいをたもとにかくし晴 新人類親の血を引く祭好き 春風が私を蝶にしてくれる 桃咲いて冬と春とがめまぐるし 美しく咲いてぼけとはなお可愛い オートバイ乗る娘に成田のお札受け 転勤の辞令へ妻の頭痛薬 春風に誘われ水につきあたる セールスマン息子に似ていて 小さな愛妻に手彫りの髪飾嫁ほしい農家娘は町にやり くぐり戸の鍵はかけずに待ってます 格子戸くぐる音も乾いて京の冬 夫婦して火の粉をくぐる覚悟する 山門をくぐると木魚が風にのる 山門をくぐって触れる弥陀の慈悲 蔓ばらが生垣くぐり娑婆ながめ たくさんの橋をくぐって海になる 桜並木くぐって鬼さん追っかける 姑はてきぱきしない方がよい てきぱきが過ぎるとおてんばと言われ 分 塚山 枚の絵を見るみんなただ無口 の変化はオロオロ霧の 儀社がきててきぱきと支度する 割を上手にしても文句あ が五人アップルパイを切り分け 川柳ねやがわ 犬も良家の顔してる 頼みまっさと手がのびる れ着着る 断れず 高田 3 博泉報 なつめ 千鶴子 曲ん手 房 登志実 正庫坊 喜代子 美袮子 きく子 寿美子 峰 春 つえ子 富 福

的子

明

行動家たりし昔を口にせず 新鮮なネタで熟女がくどかれる 摘出へ脳波の変化待つ白衣 新鮮なお店へ主婦の目は確か その夜から秘書は女として務め 新鮮なニュースを孫がもってくる 変化球私はそんなに甘くない 向かい風ついてマルサの女くる 変化球投げても妻は笑う 行動は妻追うだけの地下売場 美人薄命それでも美女と言われ度し スムー ロボットの旗を信じてよいだろか 定年まで徐々に静かに妻変化 行動を近所がほめる聞き合せ 経営の極意に汗をかきなはれ 磯づりの刺身が踊る舌の先 行動の時ぞと反旗ひるがえす 名案を集めて名案作り出す 親は鍬子はクラブ振る核家族 新鮮な空気優しい嫁が来る やりくりの名案母と検討中 年上の人に小さなチョコ貰う 妻のもつひもの長さにある行動 レンタルでほしい小まめな旦那さん 一言が可愛い女に変えている 行動を探ればからんでいた保険 そんな日もあるとマダムはそっ気なし 新鮮をミキサーしてる父の朝 **奥さんの視野で行動せまくなる** 行で済む冬眠の日記帖 ズに変化が進む春の土 だけ かすみめ 覚然坊 さかえ 博晴冬一一静シマス泉風葉笑途江子 まさお おさむ 山光 春君 一藍菜勇 てまり 留子 水子子 鬼 熱燗を頼んで落とす肩の雪 お酒つぐポーズは昔出てた女 Ш 強精剤飲むのを妻は知っている 名案の一つに夫を立てておく 行動を起こせばなんとかなるだろう 溢れる程乗せて貰えぬノアの舟 ジャズダンスナウイ鉢巻してる妻 鉢巻が浜の男の顔にする 新人類鉢巻なんておかしくて 鉢巻はアンタの心にするものよ 野仏も鉢巻ほしい農繁期 鉢巻を締めて抗議の中にい 鉢巻に共通二次が待っている 酌ぎこぼす酒に嬉しいことがある 湯豆腐は湯豆腐理屈のいらぬ酒 酒好きの喉をくすぐる屋台の灯 酒くせが悪く二次会はずされる お医者さんに罹れば安いと思う酒 夜しんしん写経は旅支度でないか 職ひいて友の心も変り出 新鮮と温味を朝市からもらう 梅の鉢咲いてしもたら放っとかれ 春一番何の変化もない独り 寸ならよいと医師も酒が好き 一寒四温大地静かに動き出 巻の子を抱いているデモの列 巻の下に平和と書いてある 里の人情ぬくい茶碗酒 の水々しさを買い漁る 高槻川柳卯の花

凡九郎 実 敏 水 武庫坊 白渓子 恵美子 7 男

一弥呼以来過去の火はみな赤かっ

た

る

TE

窓際へ 指を切るどこか驕りはなかっ 早春賦犬のあくびが多くなる 出張にエイズの記事を見せておく 石のリズムに歩幅合わして禅の寺 掘り出した寡婦の火種はにぶくとも 雨宿り百円拾ってうつが晴れ 身におぼえないが気になる検査受け 露天風呂溢れて秋が流れてる 手荷物が溢れ女の旅の宿 春の森溢れるものあり蝶生る 雪解け水溢れ紙漉く灯がこぼれ ありがた迷惑とは愛情の溢れすぎ 愛情の溢れに気まま許されず 盃に夢が溢れるほどに好き 日の疲れ溢れる湯に 布 から溢れるものが何もな 心づくしのチョコをくれ たか 43

柳宏子 眉水 あいき 小路 亜

礫 鈍

辻

白渓子報

燕

英

陽露子

散

諷云児

とおる

香

tr

孤独の人過去の話はしたがらず 往年のスターも今は過去の人 独りいて過去を美化する不甲斐なさ 手のひらの過去をよんでる天眼鏡 嵐山夕焼け染める冬木立 念仏寺肩よせ合った小さき墓 ゆっくりと注文つけるにしんそば 大沢の池静かなり眠るごと 藁屋根と壬生菜畠と風致地区 君が代の合唱ひとり横を向き 今日もまた天に唾すること多く 舞台暗転手筈の通り灯が走る サークル檸檬(前月分) 松本今日子報 河瀬芳 千代女 三四子 雅 今日子 登志実 智恵子 百 年佳越杜春茂栄草萬 栄草萬ス 子木的子 秋 子的風治

5 月各地句会案内

	日/時及び題	会場と投句先
尼 崎いくしま	1日(金)午後1時半より 旅・糸・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水字稲荷247-21 田渕定人 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
川 柳 塔ま つ え	9日(土) 午後1時半より 不倫・そっくり・魚	慈雲寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
堺川柳会	9日(土) 午後1時半より 手・出る・テスト・天狗	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2−9−2 河内天笑
川 柳わかやま	10日(日) 午後1時より 輝く・退屈・害	紀の国会館2F(県民文化会館西隣) 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
菜の花	10日(日) 夕6時より 約束・風・名物・目	八尾神社境内西舞会館 2 階 近鉄大阪線八尾駅南西步 5 分 〒581 八尾市弓削町南2—141 飯田悦郎
川 柳ねやがわ	10日(日)午前11時現地集合 葉・道連れ・喧嘩・自由吟	字治吟行会 連絡先及投句先 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 〒572 TEL0720-27-9204 会費 3,000円 投句料 60円切手 3 枚
西宫北口	11日(月) 午後1時より 航路・読む・自由吟	西宫市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
もくせい 川 柳 会	18日(月) 午後1時より 城・祈る・古い・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1-3、5-801 田中正坊
南大阪川柳会	19日(火) 夕 6 時より 植える・口利き・水準・連れ	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
南海電鉄川 柳 会	21日(木) 夕 6 時より 公園・老眼鏡・喫茶店	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料60円切手1枚
高槻川柳 サークル 卯 の 花	21日(木) 午後1時より 三・風・美人・街・傘	高槻市民会館402号室 阪急電鉄高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻 白渓子 3周年記念句会につき投句拝辞
富柳会	21日(木) 午後1時より 遺書・田舎・囲炉裡	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
川柳東大阪	23日(土) 夕 6 時より 温泉・名物・人形・うたう	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分 長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 斉藤光利 句会費500円 投句料60円切手3枚
駒つなぎ 川 柳 会	25日(月) 夕 6 時より 無惨・スタミナ・冴える・喜劇	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円 (郵券可)、各題3句以内 原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です) 〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

●募 集●

題

各題5句

以内

グルー ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。 ★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。 現 事 実 保 西 Ш 岳 盛 げ お 詩桜

選 選 選

庭 闇

Ш

根

47

を

選 選 選

発行所

振替口座大阪8-三三三六八番

(0公) 公元一六九

林

荒 克

介 枝

★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

★愛染帖·課題吟

へは同人・誌友を限らず。

月 号 発 表 5月 15 H 切

15

H

絡 切

水川

煙

抄 塔

10

句 句

里 西

紫

選 選

柳

10

尾

染

3句

橘

高

薰

選

愛 水川 盆 題 染 煙 帖 抄 塔 月 号発 10 10 3 各題5句 句 句 句 表 里 西 1 橘 6月 尾 野 高

紫

選 選

栞

一 半年年 定

分 価

(送料共 (送料共)

五

百

円

送料

50

年分

六

百 百

五日

発行 印刷

薫

風

選

昭昭

5月の常任理事会は1日(金)

₹545

和和 **光光** 印発編 刷行集 所人兼 年年 西 五四

大阪市阿倍野区三明町二-一〇-一 原 尾 童 心

ウエムラ第2ビル202号室 11 柳 塔

本社5月句会

席 題

光

黒 岩 神 西

Ш 本

紫 雀

香

選

Ш

海 傾 注

峡

5 文

谷 出

凡

選

踊子 九郎

選

楓

숲

五百円

題

当日発表

各題三句以内厳守

題

おはなし

会 日

場 時

メンズファッショ

ンセンター3

五

月

七 日

木

-後六時

地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角 塩

満

触

選

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。

各葉毎に裏面に必ず氏名明記。 投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

柳

塔

社

争 う 眉 6月の兼題 檻 器 用

本社6月句会は8日(月)

最

投句先 〒 593

堺市堀上

河 町 内 天 九 笑

方

柳 会

堺

JII

終

盃

西

尾

夜 市 JII 柳 墓

集

締切 栞 5月末日 選

3句・

あり

でまことに

地公園の民地公園の民 度々 るも法悦 しく思 で、 春の春 死なん 願青 桜 はくは花 咲くも法悦、 出間見る心境 やま を担

《落を訪

緑

地

い気持が兆す 言う」という風 公園をわが家の庭のようとを向けるところなので、 薬屋根に名馬を いて15分ほどの、 な誇示し なぎ 合今年に入っ

0

は、それぞれが桜と共鳴まで、それぞれが桜と共鳴して、しずかに春を演出する。私は十津川村民家の前で小半時うとうとする。顔に虫が死まるようなので何べんも手で払う。うつつにも虫が死ぬのは可哀相だかも虫が死ぬのは可哀相だから指で軽くあしらってやる 曲り屋から南はな 民家をはじめ、 出郷の合掌造り、 と たるはよし」とは村田 桜もまたすばらしい。白言葉だが、藁屋根に配す ががで の合掌造り、 めて判 ではなくて、 いていた。 北は南部のり、椎葉村の たの 珠光 を 子定で 子 子 ともいえる 1:0 で、

える

と普段者でぶら 離

なので、

花

えたい くぐるとは、百人一首にもず竜田川からくれないに水 進 め者 一同、受人な れが 進い

第二句集一やっこ凧」がその第二句集「を外上の一を表した」が、四月には松本文子句を表した。土居耕花のおい海」と、土居耕花のおい海」と、土居耕花のおい海」と、土居耕花のおいた。 からもわが おへ通ったといったといっ も飽 宮廷 ある、ご存知 き、大和から山越えをの安達との恋愛遊戯に ったという伝説があ の在原業平が

川 個 出る。 の 出る。 も個性的な内容で読者を感れぞれ発行になった。どれ 名無名の 高橋操子句 銘させてくれる。 柳会に参 会に参加した多数の有句集ではなく、岸和田。これも第二句集だが 一歴史的な集大成 歴史的な集大成 集 万年青 刀年青」が 田 ける水の流れがほんぼりの いになると花のとんねるを抜 へになると花のとんねるを抜 へ 類出する。 灯に映えて、 川がある。 尾市である。 流れる玉串川という小さな ▼その河内の里がいまの八 夕食のあ がある。この川のほとり

のよう

tio

もその場が必要だっ

ただけ 花より

3

タビュ が某有名 会先日、

いた。

て、大成

功でよ

リの批評家が絶賛するなん カゴンもニカゴンも持つパ 嫌われた酔客には、

ラジオで女性ア デザイナーにイン

+

町の人に

申し込みも相次いで寄せ 秋には 会ぶり 女流 哉 かせてく 藤 村人 が見えるよ いれることもわれわれ 女、 高橋 に接した川筋の 切によく出かけ を見て き誇 b 6 誇る花の一つ一つを見てたたずみいまを限りに咲 頃合いを見て夜ざくら見 こ品り、ダ 主 らせてく てくれた。花の下りの大けた。桜並木田かけた。桜並木

文字通り万朶の だった。

らの合れ自高

た向うに澄んだ

かつての賑わい人の丹精がしのば の人のひんしゅく

な 他所 からの酔り 灯が消えて 客に 12 くしむ人 消えて よる をか してもらっ 銭湯まで ととて店は 直し 足を運び、両替 そこだけ た十 かり。 まっ ていの 明る 電 話え

よりしろである花をたずね狩りと謂われるように神の ▼むかし花見行事は た山遊びだった。 紅葉狩 くを買 、春買った町 り、桜 われだ限 様子で"アホやなァ、百円たら、その人あきれはてた でもかけられるがナ。釣銭にのか。目から鱗が落ちるとはこういうことか、とそとはこういうことか、とそとはこういうことか、とそ

ったらしい。

十円でダイヤルを回まで思いこんでいた。 初、必ず十円玉を入れるべ使える公衆電話、あれは最合十円と百円両方の硬貨が ら信じて疑わなかった。 追加する。 長くなりそうだと百円玉を るとき、 ある。 百円玉は最初入 貨を探 百円で足り ついこの問 体している 回し話が 7 しれぬ。 しれぬ。 しれぬ。 しれぬ。 しれぬ。 会これ すぐ分ったが、二家言とは家言」のことらしいとは、 配同して覚えていい は くり。 かったです

n

2

は恐ろ

-7 まっ 会宴 賞

一 7時 一 7時 に 報切1時

4

(宴会費

句集

三午出秀万八空少過十展 、後句句年

替 会

兼お 題話 会 日

場時

橋 高昭 石市62 操 碑 羽年 5 句 集 建

南新17司本東 線洋

表駅下 板駅下の間 野谷西 毎 車 間

2 西橘梶中森 句尾高川尾中 人西 川尾中村垣田 河徒 内天笑 步5

高 7 喜 万 寿 年 年

〒59岸和田市土生町 岸 九 和 高九 H 橋八 JII 柳 操 会 3

1:

催

5つの色味!! 5つの個性・



なんば我橋筋本店 なんば高島屋百貨店 泉北高島屋百貨店 京都高島屋百貨店 阪神百貨店 松坂屋百貨店 そごう百貨店 京阪モール店

サンストア中之船店 サンストア定屋橋店 アベノ近鉄百貨店 上本町近鉄百貨店 東大阪近鉄百貨店 奈良近鉄百貨店 京都近鉄百貨店

なんは新川店 虹のまち店 ドーチカ店 南海難波駅店 国鉄大阪駅店 梅田大丸百貨店 想事店



大 なんば



TEL 641-0551